川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和五十七年八月二十五日 印刷
昭和五十七年九月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻六六四号

日川協加盟

No. 664

九月号

57年度 二賞発表句会と同人総会

日時　昭和57年10月3日（日）午後一時開場

会場　阪南荘（地下鉄昭和町下車徒歩3分）
大阪市阿倍野区昭和町二―二二
電話　06・623・7512

▼同人総会は午後2時～3時30分
▼司会・西田柳宏子／開会の辞・河内天笑／挨拶・西尾栞
〔議事〕①会計報告・高杉鬼遊　②事業経過報告・香川酔々　③質疑応答／閉会の辞・黒川紫香
▼二賞発表句会　午後5時30分から　西尾栞
おはなし
路郎賞・川柳塔賞表彰
兼題　「噂」　山内静水選
「サウナ」　野村太茂津選
「逃げる」　阿部柳太選
「影」　橋高薫風選
席題　当日二題　各題三句
会賞　四百円

川柳塔社

★はじめての会場です。お間違いなきよう。
（会場略図は本誌80Pに掲載）

姉妹品大和錦印

九櫻

警察庁・警視庁
全国府県警察
大阪府警察本部
講道館・御指定

柔道衣
剣道具

早川繊維工業株式会社
大阪支店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1
電話（779）1690～2番

兄弟に思い出があり蟬の篭

妻の背が母の背となる針仕事

百度石整いすぎし目鼻立

君に似し姿におどる心はも

夏の月四十の未通女(おとめ)ためらわず

西尾　栞

川柳塔九月号

やるまいぞやるまいぞ

昨年の塔誌十一月号に「あるコラム」というのを書いた。その時「川柳漫歩」を書いておられる林富士馬氏を文芸評論家として紹介したが、お医者さんで あることがわかった。お医者さんに文学の好きな方が多い。そのコラムの中に、恩師路郎先生の有名な雲の峰の辞世の句と、先生の老友である山路閑古氏の追悼句が載っていたので、之は珍らしい句に出会ったものと思って書いてみる。

前書に

路郎冠者を哭す　　山路閑古

やるまいぞやるまいぞとて泣くばかり

という句である。この句は能狂言によくでてくる、やるまいぞやるまいぞにこと寄せた趣句だけでなく、先生の辞世の句

雲の峰という手もありさらばさらばです

のさらばさらばを受けて、やるまいぞやるまいぞと老友を哀しんだ追悼句となったのだということである。まことやるまいぞやるまいぞの気持はよくわかる。

川柳漫歩を書いておられる林氏は四十年許り以前、医科大学の予科の学生の時に、山路閑古（萩原時夫先生）は東京大学理学部出身の化学の先生であった。予科は三年だが、林氏は落第させられて五年間、萩原先生に化学を教わり、ある時はクラス担任であった。

「山路先生は佐藤春夫が序文を書いた私の処女詩集を全く認めず、私はまたその頃から知っていた先生たちの川柳を文学と認めることが出来なかった。昭和五十二年に山路先生は鬼籍に入られた」と書いている。川柳を文学と認めなかった林氏が現在、東京新聞夕刊に川柳漫歩というコラムを連載されていられるのも亦面白いことではないか。

座右の句

ふるくとも僕には仁義禮智信　（路郎）

私の句

呱々の声人それぞれの荷を背負い　藤井春日

川柳塔　九月号　目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

やるまいぞやるまいぞ……西尾　栞…(1)
初代川柳について……若本多久志…(2)
川柳塔（同人吟）……西尾　栞選…(4)
自選集……(26)
■川柳太平記(52)　井上剣花坊……東野大八…(28)
■連載　誹風柳多留廿六篇研究（七丁～八丁）……(30)
水煙抄……黒川紫香選…(32)
秀句鑑賞「同人吟……浜田久米雄…(47)
　　「水煙抄……小砂白汀…(55)
57年度二賞候補作品中間発表……(44)
句評リレー（樫谷寿馬・嘉数兆代賀・高橋鬼焼・尼緑之助）……(48)

初代川柳について

若本　多久志

「苦しかった私の人生に、川柳という灯があったことは、どれだけ励ましと慰めになったことだろう。嬉しい時、悲しい時、われを忘れて酒を飲む時、また、そんな折りに接する女達の表裏に人生を感ずる時、仕事や生活との闘いに苦悩する時、ふとほとばしる十七文字の詩は、信仰にも似た安心立命の境地へ誘い入れてくれたものである。」

これは私の句集「老いの坂」に誌したあとがきの一節だが、とにかく川柳のおかげというようなものを感ずる者として、初代川柳翁について知る限り書きとめておくことは、報恩の一端ともなる。今年はたしか翁の百九十三回忌である。

柄井正通（川柳）は幼名を勇之助と名づけられ、のちに八右衛門と改め俳号を川柳、または川叟、緑亭、無名庵などと号した。川柳の前句付の立机は四十歳という不惑、円熟の年であった。当時、名主という役職は、今日の区長と警察署長を兼ねた、いわゆる権力者であるにもかかわらず、彼はいたって庶民的で評判のよい官吏でもあったらしい。伝記ら

愛染帖……橘高薫風選…(52)
■同人特集／私の古典鑑賞「柳多留」この一句……(56)
（弘生・文秋・太茂津・甲吉・酔々・紫錆・恵二朗・岳人）
第六回全日本川柳大会参加と十日の旅(二)……西尾　栞…(60)
「週　末」……文川野生選…(62)
一路集「ボタン」……土岐トク子選…(62)
「　窓　」……笠原吸江選…(63)
句集「花筏」―うれしい二百句―……橘高薫風…(46)
初歩教室……本田恵二朗…(64)
柳界展望……(66)
本社八月句会……(69)
各地柳壇（佳句地10選／小林由多香選）……(73)
編集後記……薫風・酔々・鬼遊・史好…(81)

座右の句

地下水になろうと愛の川である　（千　代）

私の句

突然に向う岸から来る波紋　雑賀美世

しいものが残っていないので、少年時代のことは少しもわからないが、ただ青年時代、大島蓼太に師事して俳句を学んでいたが、句風が合わないので、

めっかちの蛙　桂馬に跳んでゆき

の句を残してその門を去ったという話である。

川柳という雅号も俳号川柳の記録があるので、俳句をやっていた頃のものであろう。その由来についても、住んでいた新堀端を採って「その河岸なる柳をもてそのまま号とせられ云々」とある。いちおうは参考になるが、その前後に柳の字を用いた俳号が流行していたので確証はえられない。

川柳翁は、もともと前句付の点者として、当時江戸庶民の脚光を浴びていたので、名主としての柄井八右衛門より、点者としての柄井川柳の方が有名であり忙しかったらしい。したがって、江戸各所で興行された万句合せにも一番集句が多かったということである。また非常に博学であったことは、その選句ぶりからみても十分うなずけると思う。

こうして、宝暦・明和・安永・天明を経て寛政元年まで三十年余を川柳一途に生き抜き、寛政二年九月二十三日、七十三歳ではなやかな生涯を閉じた。

その墓は、現在も東京都台東区の竜宝寺にあり、境内には全国川柳人の拠金によって、辞世の句といわれる

古枯やあとで芽をふけ川柳

の句碑が建てられている。

川柳塔

西尾栞選

人妻として滝みちを引返し
ガラス玉女の首を夏にさせ
ライバルの粘りに距離を知らされる
衝動買いして月末に裁かれる
あれはたしかに宝珠にふれた夢の中
掌を合わすほとけの素顔見えるまで

米子市　八木千代

ブルーブラックのインキに少年期の匂い
靴下に昔なつかし穴があき
食べ歩き地図で探した天丼屋
電車では立っていました少国民
八月もあと幾日の蟬時雨
さみしさが少し紛れる君の鼻

松原市　谷垣史好

歳月の早さをかこつ萩が咲き
仲の良い夫婦になってゆくこわさ
身のうちのランプが風に揺れている
さしあたり鐘と太鼓を借りてくる
帰りたくないので喋りつづけている
祭月母の思い出ばかりある

大阪市　小出智子

ふり向けばひとり芝居の長かりし
負けているのに言葉飾ってる
弱虫のにぎりこぶしを見た安堵
レモンスカッシュかるーい会話にしときます
素的なプライバシーだから覗かせる
少うしは悪女の脈も持っている

富田林市　岩田美代

一切我今皆懺悔日は落ちる

青森市　工藤甲吉

伎芸天しばしうっとりさせてくれ
思い出は今も活き活きしてつらし
おいらくのされど恋には齢がなし
なんとなく平家螢は悲しけれ
猫に鈴つける役目を酔って買い

八尾市　高杉鬼遊

南瓜もひねて一徹者になり
一ぴきの蛾よ秋風をどう生きる
サラ金のなさけにすがる蟻地獄
てんと虫福祉予算の葉にすがる
空つゆに痩せた稲穂も秋まつり
子を連れてふるさと遠い鰯雲

桜井市　岩本雀踊子

雑兵の不平に長い導火線
悲しみのわかる女の泣き黒子
まっすぐに故郷へ帰る父の貨車
精一ぱい生きる女の紙人形
もう誰れも信じぬ女の失語症

東大阪市　市場没食子

先方もふり返ってるまたお辞儀
誘惑に勝てずタクシーに押込まれ
二世帯住める家なのに老夫婦
二号にも逝かれ離れで余生老ゆ
級友も八十越した寝てる由

倉敷市　水粉千翁

頬染めて花は見上げるとこで咲き
足跡の重さ頌徳碑を仰ぎ
励ましの余韻一言居士という
朝顔に恙なき日を見つめられ
汗にこそ風は涼しさ語りかけ

奈良県　香川酔々

故郷は明るくダリア咲き誇る
夢を追う少女に美人コンテスト
近道をすると熊ん蜂がいる
あるときは美人に見える泣き黒子
下町の八百屋で曲ったなすび買う

和歌山市　野村太茂津

古い戦記の梅干に酔わされる
頬杖をついて瞑って空即是色
助走せぬ三段跳びを繰り返す
完敗と思うが言いたいこと一つ
本槿満開炎暑に負けぬ性もらう

竹原市　山内静水

鬼火ゆらゆら政治劇終る
手糸巻く親娘よ母を知らぬ妻
娘の決めた男だ逢うから連れて来い
お立酒ここにはここの祝唄
だらだら祝詞が続く美辞麗句

大阪市　川口弘生

父の日のツケは父へと回される

ついでなど無いに寄ったを見抜かれる
軍神の見事な筆の跡に酔う
祀られてその艶聞も神話にし
先客の靴が手強な口を利く

岸和田市　高橋操子

戦機競い合いながら平和を唱えてる
ローンつづく家計へ夫婦今日ももめ
冷凍室不精な女にしてしまう
正絹のよさお茶運ぶ女に見る
七変化してまであじさい言えぬ恋

岡山県　嘉数兆代賀

点滴の雫に神の声を聞く
子をおもう老母には怖いものはない
冷静にはげました夜を風騒ぐ
皿ひとつ割れても不吉なる予感
も一人のわたしを叱る闇の底

宝塚市　傍島静馬

筆まめの机上に辞典厳とあり
まっすぐな道まっすぐ歩くむつかしさ
渓流のひびきに枕落ちつかず
ずばり言う妻のリードに支えられ
スキンローション共用にする新世帯

島根県　堀江正朗

こんなとき鏡が見たい顔見たい
お喋りがしたいか梔子よく匂う
あや取りのように幸せ手から手へ
指先へ貧乏性がまだ残り
おだてにも乗らねばならぬ事もあり

島根県　堀江芳子

差し向い飽きずに暮らすおかげさま
隙間から入る光りもある強味
的を射て惚けてはいない独り言
ネックレスお出かけさきを知っている
順風で押したい夫の背に回り

伊丹市　樫谷寿馬

マイコンが冷たく余生はじき出す
マイコンは兇器の数字貯めている
マイコンの家計簿カラーには出来ぬ
マイコンが二人の妻を選び出す
マイコンに銀行詐欺を誘われる

新宮市　大矢十郎

支払方法こまかく決めてそれっきり
人間らしくしやすしらしく生き難し
失言を攻めて国会もめる場所
馬鹿の仲間入りがしやすい父だった
肩書きが消えて見た通りの男

倉敷市　野田素身郎

約束の時間へ信号無視一二
働き過ぎの蟻台所にまで入り
これ以上誉めると嘘に近くなる

欠礼の上司とトイレでまた出会い
平熱に戻り雨垂れ面白い

鳥取県　川崎秋女

三日だけ夫より長生きしたい慾
白い風出会うと火となる性をもつ
ピーマンの青さへ魅かれた中華鍋
サラサラと五指から洩れてゆく砂よ
砂吐いて貝が最後を意識する

兵庫県　遠山可住

足跡はもう消えているひとり旅
うしろからオヤッと年老い給うなり
定年へドッとお金にならぬ役
歯を磨く広さにキウリ、ナスが成り
テレビの横で我が道を行く時計

松江市　恒松叮紅

せせらぎの音古里の過疎の音
躓いたとこからつづく石畳
茶柱が立つと明治は気にかかり
水割りの息子と父の日本酒
口車に乗った男の負け戦

松江市　小林孤呂二

音楽の出逢いでいまの妻がある
ふたつ返事の妻へ用心して掛かり
表彰状もっと励めと言う如く
鳥居をくぐれば氏子の顔になり
ふるさとを持たぬ一揆の血が流れ

松江市　柳楽鶴丸

法律の裏には札束積んである
貧乏神が家の万札持って逃げ
妻がいるから僕は生きている
流れ星宇宙の暴走族か
お互いにうらやましがってる美女とブス

米子市　林瑞枝

わくら葉の孤愁野点の膝に舞い
ロボットの無口へ注油さりげなく
指文字を交わしうなずく発車ベル
キャリアもうハンドル手であり足であり
雑犬なら獣医本気で診て呉れぬ

大阪市　江城修史

独断と偏見非情をあわせ持ち
子に賭ける夢よ夫婦にある山河
偽われる盛装女とは悲し
疑えば積木の夢が崩れるよ
生かされている喜びの木魚打つ

大阪市　那須鎮彦

照る日曇る日のやさしい母の顔
お神輿の脇役として法被着る
久しぶり妻も興じている花火
仕事場で狭い自分を見つけ出す
無器用な言葉補なう眼が丸い

大阪市　金井文秋

便利さに馴れてくふうを忘れてた
どじばかりしてる男の人間味
燃え尽きるのも早い炎となった愛
自分のために生きる女の離婚歴
貯金箱五百円玉通せんぼ

大田市　藤田軒太楼

湖畔の灯映えて国体待つばかり
息災の日々年金に支えられ
許す気の父その娘を連れてこい
待ちかねた朗報みどりの風に乗り
まな板のリズムが狂う低気圧

松原市　玉置重人

女房の死に水だけはとりたくはない
父と子の血がつながっている無口
栄転の友をすなおに祝うべし
足し算引き算夫婦の気が揃い
気にかかることにご飯がおいしすぎ

八尾市　宮西弥生

積み立てのよろこび知った日の一円貨
競り合うていつしか下を見ぬくらし
衝突をしてから情通じ合う
疲れてるばっかりでない旅カバン
他人の上に立って私を小さくする

大阪市　津守柳伸

石橋を叩きすぎると鬼になる
優越感持つと男は自爆する
ざん悔する鬼も抜け道考える
夜遊びの悔いは忘れる方がいい
死ぬまでは元気でいたい磁気布団

富田林市　和田維久子

二歳児のお喋り大物かも知れぬ
一枚の表彰人間変える日も
愚痴らない下には下のあるさとり
ひとりの物と思ってならぬ表彰状
花作り花の心を膚で知り

八尾市　高橋夕花

パンに飢え心に飢えた敗戦記
積乱雲おもいがけない訃報くる
八月のほてりを知ってるさくら貝
ギャラリーでナウい服着た男たち
美しい奥さんたっぷり昼寝して

和歌山市　西山幸

良心が古い聖書の中で冷え
一幕の喜劇で終わる夏の雨
戸車が軋む世嫌い人嫌い
内緒話をすっかり聞いた熱帯魚
愁嘆場見せてしまった自己嫌悪

竹原市　小島蘭幸

三歳の絵の中にある父の眉

長女次女玩具のピアノ一つ買う
退院の荷物こんなに増えていた
二人部屋嫁と姑にさも似たり
何を着て退院しようかなどと妻

鳥取県　鈴木　村諷子

安らかな寝顔乳首をつまんでる
男の子に悪戯してる好きだから
人間の性善説を信じない
褒めてくれる母がいるから駈けてくる
登りつめたいもづるにまだ高い空

堺市　藤井　一二三

国貞寿子先生を悼む（一句）

旅はるか飛鳥路を師の杖がゆく
人生暮色ひとの情けがしみてくる
夕暮れがだんだん早くなる焦り
背信を責める金魚の瞳が迫る
七夕へこどもにかえる夢を吊る

藤井寺市　児島　与呂志

妻の目にやっぱりたよりになる夫
長女二女三女はそれぞれ母思い

中支戦友会（二句）

兵長の気安すさ便りがまだ続き
高野山に来いと戦友会がまだ生きる
人並みの暮しの意地は持ち合せ

寝屋川市　柴田　英壬子

神経がかなり傷んでいる寝汗
同じ日の去年は労を讃えられ
隠れ蓑にしては艶よい束ね髪
愛想よいママがつねっている躾け
簪で難なく開く蔵の錠

京都市　都倉　求芽

ビルの窓雨の匂いを寄こさない
もう切れる並木悩みはまだつづき
蟻の列誰も近道などしない
写真機を向けると母の腰がのび
故里とよく似た民話を聞く旅路

八尾市　大路　美幸

病院の真上の月と生と死と
五月晴れああ父の手が冷えてくる
揺れるのは五月の風か仏らか
私小説しずかに閉じる麦畑
叱らない父の時計が動いている

倉敷市　小幡　里風

雨宿り派手な噂を聞いてくる
風鈴の位置マンションの老夫婦
同じ部屋寝ても別々夢を見る
言い負けて女が夜の爪を斬る
すだれ釣る去年の位置の釘が錆び

吹田市　藤村　〆女

今昔をつづる絵巻の冷泉家

寡婦の掌のなかで挑んで来た歴史
悲しからずや正直者のちびた靴
裏に裏あって正直が泣きました
赤トンボの早さで秋の彩になる

倉吉市　奥谷弘朗

裏町に暮しの詩のある温さ
パラソルの男野心家かも知れず
ご主人の個性が読めるさつき鉢
うさぎ小屋なんて呼んだら罰当る
反核へ決意かためた原爆忌

鳥取市　小林由多香

個性まで曲げて派閥の隅に居る
角隠し父にも母にも似た笑顔
団らんの灯へゴキブリも顔を出し
むき出しの個性白墨また折れる
主治医よりうるさい看護癒え近い

諫早市　原田明春

応答にまよい煙草の火をつける
ステテコのまま宿直の電話口
飛ぶ時間より空港までを行く時間
海水浴場監視双眼鏡でどこを見る
信号機お神輿様も通うせんぼ

寝屋川市　宮尾あいき

カンナ炎ゆ私も朱い服を着る
あじさいよ明日も降らぬと月が言う
ポックリ寺和尚さんは俗人で
母と娘の間で方弁の嘘も言い
眠れぬ夜末っ子の事金の事

京都市　松川杜的

信号を挟んで手話もどきの会話
仕上ってから一と鋏散髪屋
蝶よ来い来いうちの庭にも花がある
アルミ貨一つお地蔵さんの眼が笑い
二つ目の桔梗が咲いた慈雨の朝

大阪市　西森花村

故郷もう知らぬ町になっていた
剣劇の前を走って救急車
とびの子がとびに似ていてめでたけれ
OBの口だけ達者無職なり
エチケットでっせとオバンも負けていず

島根県　榊原秀子

ほととぎす啼く音へうまい朝のお茶
栅田植え終ればうつぎ咲き匂い
種芋の無事の芽生えよ梅雨に入る
子離れの出来ぬ親から子が離れ
ストーリーがないドラマだという野球

岸和田市　植山武助

亡母一周忌（一句）

三年後又会う約束孫曽孫
勝敗が職場に響く巨神戦

夫婦の絆結び直して五十坂
過去知っているから幸せだと思う
地下街を方向音痴になって出る

美祢市　安平次　弘道

君子豹変踏み絵は泥にまみれてた
現実はドラマにならぬ悪が勝ち
適材適所枕木不満など持たず
空梅雨へ水虫出番狂わされ
チャンス逃して運命線が細くなる

奈良県　村上　春巳

終電車三人三様酔うている
改修の川故郷のそれでなし
天皇のお声マイクに馴れたまう
二三分歩いて貸しを思いだし
サロマ湖の落日鳥のシルエット

米子市　小西　雄々

知恵の輪が政治倫理では解けず
背信へ自戒のねじも弛みがち
再診の心細さへ妻を連れ
苦青く流人やすらぐ民話聞く
人生を青黄赤で繰り返す

大阪市　天正　千梢

口髭が「お前にいつも泣かされた」
一億がものの見事にだまされる
野良犬は鍵っ子いっち好きだとさ
一年生捨て猫二匹拾ろて来る

条件を長なが書いて婿探し

大阪市　中川　滋雀

山開き愚痴も生活も雲の下
法悦のそのひと時に灯をともす
頒ち合う喜びだって日を選び
冷や奴主張を曲げぬ箸の先
鏡には写楽の顔もして出かけ

大阪市　本間　満津子

試着してみてやっぱり合わぬニューモード
腹の立つときはお腹が空いている
コンピューター絆に迷ったりしない
留守番の隣の犬と話する
くちなしの甘き憂いに雨しとど

和歌山市　若宮　武雄

戦争の日はこの子らを使い捨て
この先の文化怖れている地球
子に折れている口惜しさと頼もしさ
ロボットの夢はまっ赤な血の温み
内緒ないしょ抱く鼻唄の弾みよう

笠岡市　松本　忠三

お役所の仕事チューインガムをかみ
網棚へ喪服をのせて母危篤
片ちんばのスリッパで行く頭数
故里の訛り通じぬ子や孫に
抽斗をかき回してのひとりごと

大阪市　神夏磯　道子

夫婦して想いは違う螢の火
平凡も朝昼晩という区切り
花柄のカバーいい夢見たいから
としよりに話しかけられ立ち去れず
金曜日そろそろ元気出てきます

和歌山市　垂井千寿子

茜雲美しい死に憧れる
唇が濡れて女の武器となる
税金の行方は知らぬ生活費
友の内緒見た日の白い日記帳
ローンまだあるのに白蟻越して来る

和歌山市　浦野和子

慰めて花従容と散るものを
打水をした露路一げんを泊めぬ宿
来年の花へ剪定容赦せず
輪の中でにっこり噂の外に居る
鶴たちよ千羽のなかの一羽だよ

和歌山市　松原寿子

セーター編む約束がある夏の指
熱い胸の奥でひらりと蝶になる
しめっぽい女の胸へ雨多情
与一が放つ一矢を胸に待つ女
本心をかくす日傘を深くさす

和歌山市　内芝登志代

楽しさも怖さも電波に乗ってくる
痛ましいニュースへ派手なコマーシャル
少年が或る日出逢った青い鳥
病む母へ世間話で力づけ
B面のような男にある魅力

京都市　山本規不風

飴玉を噛みくだいてる寡婦の顔
観音さまが許してくれた道行を
鬼二匹毎日身の内かけまわる
螢草二人を包む闇静か
欠伸して何を言いたいのか忘れ

岡山県　白岩文衛

楢山へつづく道だが花盛り
定年の庭蝶が来る蜂がくる
石に坐って蜘蛛の話を聞いてやる
お変りにならぬと教え子ありがたし
魚より近ごろうまい茄子きゅうり

寝屋川市　稲葉冬葉

藍染めに夏を着ている夕涼み
一刀返し虚しさの残る朝
ときめきもない女で恙ない夕べ
好きな人幸せうすい文字を書く
情熱に負けそうになる孤独感

兵庫県　辻文平

定年の歩幅急がぬ靴の音
妻の死角に置いてある釣道具
裏返す枕に罪は捨てられる
寝返って寝返って傷深くなる

針穴の向うに姑の肩がある　米子市　野坂なみ

生甲斐の中へ悩みを埋めて行く
葉の裏で蝶へ優雅な脱皮する
眉上げて寡婦は後を振向かぬ
痛くない腹を好奇の目がさぐり
商家の座守って昼寝無縁なり　西宮市　妹尾春江

日曜は小さい順に起きてくる
姑のとぼけ上手が和を保つ
明日咲く花に明日の夢もらう
クラス会一番気になる友が来ず
沙羅の花遠いロマンス聞いている　寝屋川市　江口度

教育ママの天秤皿をとりあげる
開店のあくる日閑古鳥がなく
濡れ場見た鴉で白くなっておく
風が呼んでる思い出の丸木橋
ＦＢＩ鮎の友釣りふと思う　富田林市　板尾岳人

バス降りて漆喰の傷母の地図
傷口をなめて相姦二輪草
大胆なチーズケーキにある野心
兵児帯がぼろぼろになる義理一つ
一枚の水に写りし人の声　三重県　川上渓水

自画像にちょっときれいな嘘がある
指輪よりエプロン似合う妻で良し
どの向きの風にも風鈴素直なり
ぶらさがり器いつしか隅で邪魔になり
税務署の過保護へ医者の所得額　松江市　梅本登美也

聖書ふと開いておのが罪恥じる
我が胸にふっと広がる乱れ雲
サービスも万全を期す適マーク
女ふと許す気になる稲光り
美しい素足で罪を踏む女　出雲市　園山多賀子

ロボットがだんだん人間臭くなり
丸い背を伸してヒールは低く穿く
石垣に衣かけ蛇が雨を待つ
打たれるを覚悟の釘が曲る義理
女の瞳眩しく見えて枇杷熟れる　大阪市　西出楓楽

動物愛護ただし人間除きます
金太郎あめの素直が重くなる
夏休み絆がもつれてきませんか
ふんぎりをつければ雨もこころよい
限りなく漫画に近づく老夫婦　米子市　政岡日枝子

負けこんだ碁に善人の胃の痛み
二、三日胸でぬくめた辞職表

私までガラスの靴は巡り来ず
又出逢う亡夫へ再婚せずにいる
粘り勝ち親盲愛の虚をつかれ　島根県　松本文子

ある眩暈あまりにバラが優しくて
他人のように夫の横顔みることも
座ぶとんに化けたお召しは母のもの
忘れたいこと忘れるのも年か
泣きごとをならべ自慢をして帰り　島根県　藤井明朗

ひび割れの世相へ補修は遅々として
旅浴衣夏の情緒を買いあさる
忘られる明治の気骨わびしがり
老いらくの恋割勘でさようなら　島根県　西村早苗

ごて出して女が解かぬ堅い帯
胸や背をずばりと見せて泳がない
朝寝坊男独りという気まま
猫ある日犬のくさりに首かしげ　下関市　国弘半休門

退職はしたが閑人にはなれず
人の世は女難剣難交通事故
流されてたまるもんかと鮎は瀬に
老婆心邪魔にされてる話題かえ　今治市　越智一水

子雀を手のひらにのせ子が迷い
芽ぶかんとする老木に教えられ
蒸発をしたのも戻る盆踊り
あの人とやっぱり逢えた盆踊り　島根県　小砂白汀

小皺までズームレンズに暴かれる
雨を来る客へ手をすり膝を折り
翔ぶ筈の羽根が痺れてきた五十
瀬にかかる流灯まばたく間も惜しみ　大阪市　河井庸佑

うちの子に限ってはとは親の欲
はえば立て立てば歩めとせきたてる
反省の色見えないとまた叱り
どの子にも例外はない非行の芽　東大阪市　斉藤三十四

とまり木に欲求不満が顔そろえ
炎天下蟻の反乱見届ける
金もうけ男に勝って嫁きおくれ
楢山へ行く切符はかくしもつ　岡山県　直原七面山

筆談の夫見守る妻の愛
暴走族の一人一人は良い男
正直に生きて花咲く春を待ち
ぶたれたら回る独楽にも似て哀れ　出雲市　原独仙

束の間の慈雨が豪雨の牙を剝き
五十年明治の味に馴らされて

振り向かぬから想い出に遠くいる
過疎は佳し鮎が豊富に食べられる　東大阪市　竹中綾珠

好日と言える日は無い夫が逝き
目覚めると亡夫の影追う癖がつき
一人でも励まし合える友が居り
祭月落ち着かぬ父へ浴衣着せ　岡山市　川端柳子

つらいこと悲しいことにはフタをする
届かない愛よ電話のじれったい
ソプラノの嘘を信じて佇つ枯野
もともとは弱い人なり鬼の面　羽曳野市　榎本吐来

あての無い明日へ爪が伸びている
架け橋を信じて逝った友がいる
得意失意の背中が並ぶ終電車
未練断つ視角をよぎる流れ星　橿原市　岩井本蔭棒

機関車の気笛悲鳴に似て哀し
片隅で小さく生きる古屋敷
神様もポルノが好きと知る奇祭
すだれ越し見る往来の面白さ　鳥取県　金川満春

乗り切った激動老妻の燻し銀
嫁き後れ覚悟で理想追う娘
カーテンが妙にくすぐる好奇心

パラソルをくるくる翔んでいる女　町田市　竹内紫錆

人工呼吸代々見まねだけですみ
歯が丈夫なので講演持ちこたえ
うさぎ小屋テレビ体操観るばかり
君が代に口あけぬ群映される　鳥取市　両川洋々

没個性そんな男がめしを炊き
捨て石に徹して理想など追わぬ
傷心へ食い込む奈良の鐘を聞く
道ならぬ恋へ熟年けつまづき　竹原市　森井菁居

夕立が流してくれた罪ひとつ
石仏の目元と亡母が重なりぬ
太陽の笑顔が見たい雨三日
明日に頼るとセールスの負けになる　宇部市　平田実男

百姓の勲章として曲がる腰
乗れば人歩けば車に腹が立ち
飲む時は病気や血圧には触れず
所得税愚痴った頃をなつかしみ　竹原市　時広一路

諦めがついてつきから離れられ
越境をして来た花が美しい
のんびりと待てば風向き変わるだろ
夕凪ぎへ二人の影も動かない

とまり木の小鳥に遠い母の山　米子市　石垣花子

倦怠期愛の化石を抱きながら
もう少し待って見る気の迎え傘

懐を狙う口紅引き直し　平田市　久家代仕男

流暢な口にうっかり乗せられる
減塩で煮つまる南瓜一家の和
雨蛙あめを露わによろこばず
着実な尺取虫をいとしがる　奈良市　森田カズエ

恥かかぬ程度に娘茶を習う
何がおかしい看護婦さんの笑い声
由緒あるお庭ときいてする正座
店員のようにはいかぬ包装紙　倉敷市　藤井春日

年金で食べてる生活へ無心来る
遺産より尊い教えを呉れた父
時移り老いのファッション若作り
金のため荒む心へ目をふさぐ　熊野市　坪田冬花

年輪が笑って聞ける妻のぐち
苦労したのだろう母の座りだこ
友一人二人が消える暮し向き
客見えて女房急にしおらしく　生駒市　草深酔升

手のとどくとこに目ぐすり飲みぐすり
脱いでみてまた着る老いの病みあがり
酔い覚めの水で食後のくすり飲む
リハビリのつもり水打ち草むしり　貝塚市　行天千代

気まぐれな星の一つが流れ行き
列島は一日置きに梅雨に入り
二泊三日息子等の好意に甘えよう
何年も髪の形を変えぬ女　大阪市　欄蘭

縄のれん庶民の財布に合う値段
飛鳥路の素顔を見たり石仏
おとなしい犬も他人には怖い犬
空梅雨や一喜一憂の顔があり　出雲市　板垣夢酔

長兄へ遺産で盾突く腹積もり
番犬の鳴き過ぎ投書に叱られる
カタツムリナメクジからの挑戦状
トビ魚の羽が欲しいと鰯の子　八尾市　飯田悦郎

簡単にいうて馬鹿にはようならず
この家は留守とわかった猫の感
責任を果した足でパチンコ屋
頑固者その奥様も意地っ張り　倉敷市　稲田豊作

人徳のなんと明るい床柱

褒め言葉もらい一と役負わされる
威張るには給料袋が軽過ぎる
点滴に働き過ぎたを口惜しがり

堺市　高橋　千万子

急用とプレミア切符で罪が発つ
軒三寸借りてバーゲン一等地
空缶を拾う手はなし販売機
叔父さまが好き無邪気でない瞳

兵庫県　河原　みのる

医療破綻死ねとは言わぬが生きすぎだ
花柘榴島田脱ぎ捨つ散りざまや
すぐ還る香奠やからちとはずみ
いざさらば薬をのまん保険税

岡山県　荻野　鮫虎狼

左遷の地きれいな水と人情と
横糸へ夫婦の喜劇織り込まれ
門跡の尼僧邪心の無い素顔
波がしら海の踊りが美しい

岡山市　時末　一灯

思い出しまた忘れては生きている
ここからは父の轍も消える齢
生返事でない山彦怖くなる
煩悩を洗うた果ての二日酔

鳥取県　林　露杖

闇に色整え蕾朝に向き
み仏の慈悲に縋るも気の弱り
快い疲れビールがしみわたる
嬉しい日うっかり秘密洩らしそう

松原市　北野　久子

キッチンは女の業と思うまい
定期券二つ三つは若く書き
出し抜けの便り選挙の匂いする
聴こえないので丸くゆくのだと思う

河内長野市　井上　喜酔

魂を抜いても仏知らん顔
冷蔵庫すぐに空っぽ夏休み
角立てるより欠席して嫌がらせ
信じてる妻に半分疑われ

仙台市　川村　映輝

自然を求め歩けばつづく舗装道
狭い日本新幹線でゆきづまり
馬鹿になることは馬鹿ではできぬこと
金婚で想うこと只耐えること

神戸市　仲　どんたく

女体の辨咲いてプールは花の園
スカートを脱ぎ捨て開ける冷蔵庫
やがて入る寺の修理やさかい出し
文化財夫婦喧嘩の跡も見え

豊中市　増田　次章

飲むなとは医者のおどしと解釈し
真夜中の無人信号ながい赤
祝電は打ったがジェラシー胸をつく

さわがしいから救われるのれん酒　呉市　林野甦光

躾糸抜く手が探る妻の勘
後悔はしないと言えば嘘になり
鶏群の一鶴人を侮らず
燃え尽きた女の歩幅崩れない　堺市　大道美乙女

トントンとリズムがはずむ母の朝
底辺に生きてにごらぬ女の瞳
明日の日へ夢をたくして生きる意地
ある艶歌傷ある胸の底を這う　枚方市　水野弘

感激が終って孤独の我れとなる
青い目の人ともぶつかる祇園祭
メンバーが一人足りぬと言う受話器
百合の香が漂う朝の靴を履く　大東市　土岐トク子

確実に老いのきざしにおののいて
期待する辛さ知らずに期待する
子育ても終り空しい手のすきま
内助の功表に出たい日のうずき　大阪市　北勝美

年金へちょっとぜい沢梅漬ける
掃除夫の国防論に福祉論
紫陽花の色冴えぬ儘梅雨上る
朝顔へ小さな虹のふくみ水　和泉市　西岡洛酔

銀婚式もう馴れ合いの君と僕
踏み出したつま先暮しの音がする
よくしゃべる女で他愛ない寝顔
若造り人生論ぶって見る　倉吉市　渡辺菩句

炎天に我が生首を持てあまし
美しく鳴ってはくれぬ神の鈴
入院というは姥捨にも似たり
幽霊と無性に逢いたく眠る　羽曳野市　佐野白水

雨降りにする用たまる晴続き
見本市にて
ロボットの労働組合が出来るだろう
潮来、水郷にて
娘船頭みんな大正の娘なり
板一枚の橋も十二橋の一つです　岡山市　井上柳五郎

三度目の奈良もやっぱり大仏さん
酔ってます言って正論ほうむられ
風習が民謡の中だけ残り
有終の美飾る余白が見当らぬ　大阪市　横地雅風

部屋みんな点けて老父の眼安心し
あじさいが主役に女ぼけて撮れ
ほっとする風地下鉄で会う出口

土に会う嬉しさ公園回り道　大阪市　西川善紫

これは意外内緒を皆が知っている
と言うて真正直では馬鹿を見る
騙すなら六法全書を騙して見い
幸いなことに地獄をまだ知らず　玉野市　小谷仙山

心配がうらみに替る靴の音
百聞を一見すれば夢がさめ
偶然が重なり神を信じたい
なまはんか水を差したら燃え上がり　島根県　錦織文子

万緑へ埋もれ尼寺静かなり
白を白く磨いて留守の静けさに
せん定の高さへお茶を呼びかけて
虫干しへセルの感触生きていた　香川県　岡田拳法

核先制不使用宣言

歴史では不可侵条約さえ反古だ
戦争は嫌だと言える有難さ
いつまでも戦争嫌いで済みますか
力なき反戦言うてみるだけだ　島根県　大森孝華

一ぱいのお茶にひかれて裏話
肌と肌触れてかけひきなどいらぬ
善人の噂を回す風車

倖せは忘れる事とおぼえたり　守口市　羽原静歩

孫（三句）

太郎冠者その夜寝つきのわるいこと
行く末は何になるやらトンボ取り
ある時の孫他人めき他人めき
アルバムに貼ると歴史が一つ増え　西宮市　野呂鵜汀

日曜日邪魔になるから家を出る
円満は女房へ母が加担する
借景のここは駅まで遠い家
腕組めば妥協に遠い心境か　神戸市　山口美穂

甘えたい泣きたい夕陽沈みゆく
今朝の夢君の無言が気にかかる
うさばらし喋って食べてまた肥る
正直に鏡が写す白髪かな　姫路市　大原葉香

地下足袋の足跡男とかいてある
風脈に人間阿呆になり切れず
年いくつ指三本がやっと出来
一天を仰ぎ空梅雨目も乾く　守口市　野呂右近

先ず胸で咀嚼してから吐く言葉
駆引や嘘は無さそう続く手話
よく出来る子を持ち親も見直され

同じ手で孫にへそくりせびられた　島根県　木村はじめ

いてあげた置いてやったで金婚日
熟年のまだ半熟のままでいる
御仏に会わすその掌に慾があり
諦めるほか術もなし序列外　西宮市　林はつ絵

寺詣り少うしましな丸が描け
来る日来る日亡母とまたいだ雪解水
蝶の舞あれは道草だったろか
昇格の友が眩しい日のすみれ　岡山県　岩道博友

花泥棒勝手にさし芽を抜いて去に
誤解され孤独に鼻毛を抜いて見る
他人の汗知らない事と政治の目
餞別を渡す言葉へ邪魔を入れ　島根県　太田亀甲

更生の機会を酒でフイにする
お父さんそっくりな声で電話口
神経痛薬いろいろ教えられ
誤植かも難解の句意がわかりかね　枚方市　稲葉星斗

禅寺を歩き回って夏涼し
ひと雨が欲しくて紫陽花色変えず
夏祭四角に切ったハモ料理
冷麦を食べて食べて痩せている

何ごとも好きか嫌いで始まった
くちなしの花は小さく泣いていた
忘れたい旅貝殻を耳にあて
すてた恋の名残りのように百日紅　大阪市　橋元美恵

切り口上の妻をかわしているジョーク
子育てへキャッチボールで妻といる
逢えばただ頷くだけの愛である
贅沢があふれ五官の眼が狂い　西宮市　杉浦婦美子

お昼寝の頃か保育所深閑と
梅雨明けに遅れぬように風と雨
香水の行きつ戻りつ百貨店
高官に執行猶予という無罪　和泉市　岡井やすお

メモしたと記憶はあるがメモがない
友釣りの囮の鮎はFBI
栖山は核も鉄砲も怖くない
あと追うた倅が今は背をみせる　浜田市　中川幸一

定退四年交友録の整理する
亡き母の生きざま家計簿として残り
カラフルにまわる間もなし夫婦ごま
世渡りの下手な男に賭けて見る　和歌山市　堀端三男

海南市　牛尾緑良

悪女から貰う小さな生きる知恵
優しさをファイルしておく妻の胸
虚栄心未だ残していて女
反戦とは別に栄える基地の町

和歌山市　福本英子

貧しさを晒すマネキンの胸あたり
年齢に合うた服では気に入らず
にょっきりと夏を招いた妻の腕
双生児よそ見許さぬ母の膝

和歌山市　冨上光代

ひと言の温さを受話器から貰う
女郎花面影偲ぶ雨となる
噂から生まれた明日へ虹をかけ
触れ合いが楽しい旅にローカル線

和歌山市　坂口公子

蠅ひとつ捕える心が鬼になる
さざ波をつくりに孫ら来てくれる
挑む術さらさら要らぬあほう鳥
夜店から足をのばした恋ひとつ

和歌山市　細川稚代

ひと波乱あって絆が太くなり
風まかせ切札ちゃんと持っている
歳月が味方となってかれてゆき
身勝手な男がくれた自閉症

和歌山市　坂部紀久子

一杯の麦茶フルコースに勝る
ボーナス期今日も行員泣きに来る
称讃に甘えてならぬ舞扇

和歌山市　天満三千代

降って泣き旱魃で泣く農でいる
生一本ただそれだけの財であり
謙遜の陰で自惚れ覗いてる
何食わぬ顔で長針通過する

米子市　雑賀美世

お迎えの手旗にやさし陛下の瞳
かたくなに生きた明治の太い眉
節穴を抜けて笛の音冴えて来る
久しぶり漢字もふえた孫の文

米子市　桑原伊都

宿題もかかえて孫が避暑に来る
新風へ老舗ののれんゆれ動き
修整の眉で素顔は見せられず
受話器から居留守をつかう声がもれ

米子市　青戸田鶴

朝顔日記双葉大きく子がえがく
チャンネルで遠いいくさを見るゆとり
これが私鏡の老いへ目を伏せる
忘られぬ顔へ仏の瞳をかりる

米子市　菅井とも子

哀しさは悩みを見せぬ老母の貌
ジェット機がうるさい町にして栄え

形身分け亡母のシャネルが帯に滲み
はずむ日は眉さわやかに描いて出る　米子市　田中亜弥

眉寄せるただ事でない父の顔
月末の時計かけ足ばかりする
針止めて深夜の靴を聞きわける
町から村へ命を守る採血車　唐津市　仁部四郎

灰色の肌にべとつく菊バッジ（六・八ロッキード判決）
助手席に乗って帰った御名代
お隣りの神話を肴に妻が酌ぎ
奥様が興奮なさって国訛り　唐津市　浜本義美

関東・信・江の旅

鬼怒川の夜雨が旅をくつろがせ
紳士然としていで湯のたたき踏む
凍て雪の白根に夏は見当らず
叡山下る京が見え湖が見え　唐津市　浜本久仁於

週末の政局箱根伊豆あたり
面接へボタンの位置を確める
一坪の土の匂いを大事がり
年毎に緑が消える子の写生　唐津市　久保正敏

警察に協力一日棒に振る
ロボットの腸カタカタコンピューター

列島に阿鼻叫喚の事故多発
頑張って来いとは言わぬ嫁の父　唐津市　木塚素石

名が出るとみんなレッテル貼りたがり
国柄をオトリ捜査であぶり出し
西瓜はかぶりつくもの明治よし
磯しずか釣具ばかりは光ってる　唐津市　田口虹汀

世話人に又世話人の要るレジャー
無意識で手が走ってる網修理
大口をあけて青田は雨を待ち
紫陽花はお色直しの時間です　富田林市　中村優

追憶の一番先はかえり船
昨日保守今日は野党の肩を持ち
何気なく贈った花の花言葉
シナリオを持たぬ出会いの顔の皺　和歌山市　杉田周穂

片道の切符非情な親心
瓶詰のままで一人の夜食とる
一列に空瓶廊下に並んでる
自慢などしたことないと自慢する　倉吉市　野中御前

落ちそうで落ちないボタンと美人秘書
砂を噛む思いをさせる妻の愚痴
カーテンで仕切った夫婦倦怠期

怪談にカーテン少し風にゆれ
東大阪市　奥山弥山人

今言うたとこですのにと笑われる
詫びが過ぎ皮肉ととられる羽目となり
道標の里程だんだん遠くなる
箸枕それぞれ語る旅の詩
岸和田市　狭間希久志

あの時の言葉足らずが悔いられて
顔の皺フッ飛ぶようなシャツを着て
融通の利かぬ男で落ちこぼれ
骨見せて白魚は自己をさらけ出し
岸和田市　古野ひで

旅の宿意外な古傷語る友
紫陽花の下で御地蔵くすぐられ
くい違う話貧富の差を憶う
その姿亡母に似給う姉の日々
大阪市　大野武太

願わくば美田も少し遺したし
裏町の寄付に理屈などいらぬ
日曜の汗ていねいに草を抜く
地蔵盆あの子は二十になったはず
出雲市　吉岡きみえ

いっぴきの蟻に足裏くすぐられ
エプロンの下から届く五目ずし
割れなべにとじぶた夫婦うまが合い
人生も六十路となれば気の弱し
高知県　松岡三吉

平和なり妻の味方に母がいる
百年も生きぬ百年後の怖さ
燃えつきるまでを女の髪を梳く
すりこぎが我が家にもある母の味
七尾市　松高秀峰

左遷地へ栄転らしい顔で来る
御中元出す一方で五十年
老いて来て子に子に遠慮のいる世代
七転び八起きも不能か五十坂
大阪市　西村芙佐子

円満満腹強い人にはなれませぬ
アルバイトしてる工場の規模を聞き
二日目に休みの日を聞くアルバイト
こしひかりですのお麦は入れません
大阪市　鈴木節子

病いには縁ない老母へ夏祭り
知りすぎて隣りの噂に遠くいる
生きている喜びがある深呼吸
背伸びして自分を見失いそうになる
大阪市　村上田鶴子

二三日は黙って通う菖蒲園
螢火ほどの心売りたく想うなり
炎天にかぼちゃの花の物思い
憂きことに耳をかさない風車
鳥取市　森田熊生

あやまりに来た靴音がやわらかい
まだペンが走らぬ夜が静かすぎ
ぎりぎりに別の答が出た不安
長女次女みんな素直という寝息

橋本市　森脇善太

病名の一つや二つくれるだろ
時効にはなかなかできぬ愛もある
考える父へ子供は肩車
とぎれとぎれの話は聞いてやる

大阪市　鍛原千里

貧しいが自由の風は余るほど
愛さめた日からカナリヤ唄わない
ためらいを持たぬ流れよ黒部川（宇奈月の旅）
湯の香り想影橋に星が降る　（〃）

岸和田市　福島せつ子

お向いの自販機さかんに売れている
安楽死出来る善意の徳をつむ
産卵の海がめの涙見逃がせず
茶柱へ思い直して立つ心

岸和田市　原さよ子

無理しなやあんたも開腹した体
診察になれば薄らぐ歯の痛み
患者さん待たせておいて句の話
横文字も入れて七夕願いごと

吹田市　神田秀峰

永眠は此の地にすると宿を替え
姉急に駈けこみ寺へ行きたがり
見舞客医者看護婦のように聞き
金あれば何んでも出来るはまだ甘い

大阪市　柳原静香

日記帳誰にも恨み残すまい

猫の行方不明十日間

愛猫を探す夜更けの雨の町
三日目の寂しい膝を持て余す
カーテンの揺れにも愛猫かと思い

高知県　赤川菊野

どん底で積んだ積木はくずれない
ユリの香にむせて一人の夜を書く
企みの積木くずれた日のあせり
亡夫の忌が再婚話つれてくる

浜田市　佐々木裕

かくし酒妻の好餌の的となる
頑くなな律儀満座をシュンとさせ
夫権すら一日いくらで買いとられ
共稼ぎ夫わびしいワンカップ

大阪市　中西兼治郎

オーケストラどうでもよいのも交り
上と下一緒に止まるケーブルカー
弁が立つと言えば聞えのよいしゃべり
金借りに来たなと母の勘がさえ

枚方市　栗林光夫

車椅子しかと牡丹へ向かい合い

葱坊主照れくさそうに活けられる
雑草に力負けして抜き残し
ロボットに裏切られるぞ来世紀

鳥取県　清水一保

真実は知らぬ確かなコンピューター
五十年幾度阿修羅の山を越え
四十七億の中で選んだ倦怠期

岸和田市　島崎冨志子

展開する女のドラマに私置く
焦るまい夫の歩調のおそくとも
あなどったたかがおできに一ヵ月

岸和田市　清野こう

表情も楽しく手話の旅車中
新築の木の香も嬉し祝酒
親馬鹿を自嘲しつつも馬鹿になり

兵庫県　藤後実男

善人の汗又無駄になる世相
嘘を言い続けた医師にある人気
歯車を削り合せて夫婦仲

羽咋市　三宅ろ亭

変化して紫陽花人を楽しませ
通俗に堕して野心などのぞかせず
踏み込めぬ世界持つから畏れられ

交野市　山本テルミ

鬼の来る話で孫を眠らせる
片言が言えて一家のマスコット
ねじ巻いて時計に早起きまかしとく

大阪市　岡田ふみ

嫁の目をかすめてパンの耳落す
世帯別けするようさつきのさし芽する
吉報が届けと郵便受開ける

高槻市　田崎あき子

薔薇手入れあちこち刺に引っかかれ
花菖蒲散って山里又僻地
たしなめた言葉へ女むきになり

大阪市　山根いつを

言い聞かす口もやっぱり医者嫌い
少年が母を援ける夢を見る
竿頭の旗は絶えない風に遭う

米子市　寺沢みど里

繰り言を素直に聞いて亡夫の顔
あじさいに一雨ほしい城下町
ひまな手を狙い泣く子を預けられ

吹田市　西川景子

保津川にて

愛宕山前に後に川下る
保津川の史も織り交ぜて艪のリズム
梅雨畳イ草の枕で偲ぶ夢

島根県　山根峰雪

心よく貸したお金が戻らない
振り向けばもう明治は後がない
新聞の書きようで世論左右する

ひとり部屋あまりいいこと考えず
千人の敵いざこざの種尽きず
ああ東京獲物にたかる蟻の群れ
翔びたがる風吹きやまず低年化
聞えぬか君も息子に殺される

尼　緑之助

黒枠になる写真とは母知らず
絹糸に馬鹿にされてる暮しの掌
逢えぬ夜はやもりの腹を見て帰り
さりげない顔して宝くじの列
くちなしの白再婚のこころ断つ

月原宵明

竜飛いま僕を迎えて風強し
竜飛岬に立てば竜飛に湧く詩心
涼しさのこれが極楽浄土かも
父と子の絆を笑う花粉症
腹立ちを雲は相手にせず流れ

河村日満

味のある一と言老友から貰い
古里は佳し朝露が媚びてくれ
長いもんにうまく巻かれて出世する
剃りあとの青さが若さ物語る
きのこ雲二度と見せまい作るまい

本田恵二朗

くずきりが好きで若死だった姉
表札の人は唯今別居中

黒川紫香

空梅雨の時でも男邪魔がられ
おごられる間は味方の顔をする
肩書の通りの顔がいる机

正本水客

戸隠妙高

バードライン季節を過ぎた水芭蕉
カッコウが鳴き継いでいる霧晴れる
戸隠そば売る家杉の木の下に
根まがり竹採る人に声かけてゆく
岩ツバメに宿の出入りを迎えられ

長野文庫

陽の強さ川の底まで晴れ渡り
要領と言うのも学習熟指導
枝のゆれはっきり分る風の波

戸締り論ちらちらのぞく再軍備
花がある木がある好きでまわり道

若柳潮花

向き合うて視線の合わぬ話する
木を切らぬ与作がビクを提げて出る
何もない部屋で写楽の眼がにらむ
剃髪をしても柄に眼がうつる
常夜灯霧が包んで降りて来る

橘高薫風

亡母初盆

送り火を極楽の火と子は信じ

悼　板尾岳人君岳父

あんないい人がどうして癌ですか

悼　若本多久志氏

大文字の火に送られて魂発たす

川柳太平記(52)

井上剣花坊

東野大八

本稿も早いもので連載五〇回を越えたが、やっと大正期の川柳を迎えたばかりである。大正から昭和にかけ、書くことは山積しているが、今回から個々の柳人記に観点を移し、その人物伝を通して、背後にある川柳史の推移を感得して頂く方法を採った。

構造社出版㈱の川柳全集には、六大家はじめ剣花坊、当百、○丸ら九人の柳歴やその事蹟等が詳しい。しかし拙稿では、これらの全集の人々をとりあげても、できるだけ別個の評伝構成で対処する考えである。なお筆鋒もマスコミ流の柳史的処理なので、従前通り敬称は一切略させて頂く。前もってこの点については御諒承願いたい。

さらに今後の柳人記の執筆に当っては、主なる参考文献は、文中に明らかにするが、雑考的文献のものは紙幅の都合で割愛する。

さて井上剣花坊なる標題をつけたが、本稿一回きりで巨匠剣花坊の生涯と事蹟を語りつくせるものではない。幸い剣花坊関連の著書には「井上剣花坊伝」渡辺尺蠖著（昭和46年柳樽寺川柳会刊）と「川柳全集7・井上剣花坊」山本宍道郎編（昭和55年構造社刊）があるので詳細はこの好著に委ね、本稿は剣花坊の一面の概評だけに止める。

剣花坊（初号秋剣）は、本名井上幸一。明治三年六月三日山口県萩町の士族吉兵衛と妻たにの次男として出生した。廃藩により毛利藩の扶置を離れた父は失意のうちに剣花坊二十二歳の折に他界した。兄新吉は吉田松陰塾に学んだが、剣花坊は町内の遊童塾に学んだ他は独学。二十三歳山口市の鳳陽新聞に入社し、明治三十年二十八歳の折上京、雑誌明義の記者を経て、新潟県高田市の越後日報に転じ、同三十六年上京し日本新聞に入社。同社の柳壇を担当。この間、俳句も嗜み俳号柴野竜泉。また、司馬僧正の筆名で小説も書く。

母は大正七年十一月八十歳で亡くなった。そして剣花坊もその生涯の三十年間を川柳で燃焼し、昭和九年九月十一日脳溢血で死去。享年六十五歳。墓地は鎌倉建長寺にある。法名剣花院帰幸道一居士。

剣花坊の川柳革新運動展開に最も重要な影響力を示したのは、日本新聞主筆の陸羯南の思想と信念である。陸は近代日本を築き上げるには、まず明治維新とともに根強く巣食った藩閥政治の排除と、付け焼刃の如き鹿鳴館式欧化運動を否定し、民本本位の真の民主主義の確立にあるとした。その新生日本建設の当面の基盤は、国粋的伝統の尊重の上にたった尊王維新の実践にありとし、中国四千年の歴史の肇国の範たる堯舜六代の王道を揚げ覇道を揚棄すべしというのにある。昭和四年一月に剣花坊が掲げた「川柳王道論」の主張は、陸譲りと断定してもよさそうである。

「王道は民を本とする。民の幸福を図り、民の人格を認め、民を愛し民と親しむところの、所謂有徳の君を戴くそれが王道だ。堯、舜、禹、湯、文、武というような君主は、王道の名君とされた。覇道はというのはそうではない。ひとえに自分の力量を以て人の上に立ち、そうして民を奴隷とするものだ」(川柳王道論における王道の意義)

「僕のそもそも明治中期後半の新川柳興立が、川柳なる特殊の人情詩を、新俳句に対する新川柳として、芸術界へ、文学界へ、詩界へ一石を投ぜんと企てたもの(の基盤は王道)である」(川柳王道論(4)

剣花坊の終世の闘いは、短歌・俳句の下積みに喘ぐ川柳を、短・俳のレベルに引き上げることに終始した。子規の俳・短革新運動に勿論、刺戟鼓舞されたことは論を俟たない。

明治時代の剣花坊は、大半が滑稽味をふくんだ川柳であった。それが大正期後半から観念的川柳(象徴川柳)や傾向川柳(新興川柳の如きイデオロギー)や、諧謔味のある川柳が急激にふえている。

観念的川柳(象徴川柳の句

—ひきがえる石をのせると目をつむり

—殺されてまだかまきりの斧動く

傾向川柳と称された句

—ブルジョアの秘書やめかけ等花がるた

—大衆文学切取強盗の教科書

日本新聞の新題柳樽の頃は、一皮剝けば狂句にもなりかねない即吟的作品が多かったのはやむを得ないが、その頃は、陸主筆譲りの「尊皇維新」で、右傾化がみられる。それは大正四年五月の大正天皇御大典に当り、その観兵式を拝観しての但書によって生れた

—咳一つきこえぬ中を天皇旗

はよくその時点の剣花坊の心証を示したものといえる。このあと、その作句傾向は、さまざまな試行錯誤のくり返えしで、種々の傾向川柳が生れ、推移しついにプロレタリア川柳や、新興川柳調のものにまで行きつく。

—フイと手がその引金を引きました

—睨み合う犬と人との夜ルの底

こうした剣花坊の明治・大正・昭和三代の作句傾向をみると、概略して二つの流れがある。即ち詩的抒情精神にみちたものと、反骨精神に徹した社会人間批判のそれである。

剣花坊の生涯を評して光武弦太郎(ふあうすと)は「どうして後年あのように急進的マルキストになったのか」と疑問符を点じている。しかしこれは誤りだ。この胸の底には長州の士族出らしい頑固さが、生家の貧窮に育った環境もあり、消えぬ政府の閥臭への批判もあって、反政府的口吻を示しつつ、堺利彦(幸徳秋水らと平民新聞を発刊。入獄数回。社会主義同盟、日本共産党創立に関与したわが国社会主義運動の先駆者に大いに傾倒したことは、吉川英治の「忘れ残りの記」にも明らかだ。だが、そうだからといって、彼が左傾化していたということは当らない。

剣花坊は、久良岐や新興川柳派の田中五呂八らをつねにライバルとして認め、それあるをもって孤剣の闘志をかりたててきた。このため思想的にも陸羯南に私淑しながら、そのライバル的存在の堺利彦を認めていたのであって、昭和3年にみられる「川柳現実論」もその根底は「尊王精神」に帰納されていた。

「川柳を作る人に」(昭和8年)にみられる古川柳史解説は、その王道と大正デモクラシーとのはざまの所産であった。そして明治の魂を踏まえ近代川柳へのハードルを越えようとして倒れた。最晩年の作品。

—むだ飯の三十年をうたと糞　(昭和7年)

—十七字三十年を未定稿　(　〃　)

誹風柳多留廿六篇研究（七丁―八丁）

石田成佳・大屋六郎・八木敬一
鈴木　黄・石田晋一・南　得二
小野真孝・本多正範・多田　光
故岡田　甫

120　**傘の柄もりのやうに下タに成り**

石田成＝「茶臼では柄洩りがすると亭主云い」（五五・9）と同想句にあるように茶臼を詠んだバレ句。

大黒の柄もりハ寺の茶臼也　六九・4

八木＝賛。

柄洩りする傘に女中の腕まくり　銀の月

多田＝賛。

岡田＝同。

121　**九牛か一チ毛もない長つぼね**

石田成＝九牛一毛は九頭の牛の毛の中の一本の毛。多数の中のごく少数の意で、牛で牛角、水牛の角製張形をあらわし、一毛もないとあるから、否定の語で、句意は張形は沢山集まっても毛は一本も生えていず、さらに長局の奥女中連で張形を使用しない者は一人もいないということ。

九牛が百毛へ入る長つぼね　一〇二・11
一チ毛もないのを入れる長局　安四信7

大屋＝賛。

亀の子をはらむだろふと長つぼね　未二・28

これはべっ甲製で上等品

多田＝賛。

岡田＝毛のある牛（即ち牛角＝張形）は一つもない洒落。

122　**山伏へよな〳〵見廻ふ大天狗**

石田成＝山伏は女陰の異称であり、天狗は男根の異称。夜な〳〵は夜毎に、毎晩の意。

多田＝賛。ばかにバレ句が続きます。

岡田＝賛。

123　**薬師さまかわらけもありたこも有り**

石田成＝薬師様は薬師瑠璃光如来即ち薬師如来を更に略した通俗的な呼称。土器（薬師）と蛸（薬師）について、『江戸総鹿子名所大全』は、「蛸薬師慈覚大師作目黒……土器薬師浅草新堀東漸寺」と記し、『江戸名所図会』などにも記事がある。

「かわらけ」と「たこ」の対比についてはそれぞれ特殊な女陰の名称であり、句意は、女陰にも特殊なものとして土器開と蛸開が有

るように、薬師様にも同様に特異な土器薬師と蛸薬師があるとの意。

脇道へ吸込みたがるたこやくし　宝一二宮3

多田＝賛。
岡田＝賛。

八丁

124　両方に正の字の付く御神号

大屋＝「正」は「しょう」とよむ。「神号」は神の名号、すなわち呼び名である。「辞彙」は「正」の語解として、「①正直（真の誤植か）正銘の略称。正に其の通りといふ意である。②正八幡、又は正一位稲荷明神などの正」と説明している。

本句は、この②に当る「正」であり、句意は、「八幡宮と稲荷明神社の両方に御神号として、正の字が付いている」ということであろう。

正の字の並ぶ武の神稲の神　五六・33
八幡も上覧あわれや米の出来　五六・33

多田＝五六・33の句よく利いております。賛。
岡田＝賛。

125　神徳は御番組へも入り給ひ

大屋＝『謡曲と川柳』（安藤幻怪坊）には「菅公のことである。菅公の事蹟は〈雷電〉をはじめ多く作られている」と説明されている。「神徳」とは「菅原道真」すなわち「天神」の神徳をいい「御番組とは能の番組のことである。

本句の場合は、幕府の大礼能に町人の陪観を許されたいわゆる「御能拝見」を詠んだものではないかと思われるが、江戸町人の間に「能」が広くおこなわれていたことも事実なので、また、能は芝居や音曲などより一段と高尚なものとされていたことから「御番組」ということばを使ったのざと考えれば「能一般」を詠んだものともとれる。

献立テの様に御宿の御番組　一三〇・26

石田晋＝一般の「能」でよいと思う。ただし「能」と「謡曲」（能楽に附随する歌曲）とは使い方が異なるので、「町人の間に能が広くおこなわれていた」という表現は少しこまると思います。

小野＝賛。「御」を重くみれば、御能拝見の方にウェイトがかかると思いますが……。もっとも天神様に敬意を表して「御」の字をつけたとも考えられます。

多田＝賛。
岡田＝「御番組」と特に〈御〉の字を付けているのですから、徳川家の祝能と考えるべきでしょう。

126　御扇子と笏て雨天の御挨拶

大屋＝本句は、其角の三囲神社での雨乞いと小町の神泉苑での雨乞いを詠んだ句である。お扇子で御挨拶するのは、其角のパトロンだった紀文大尽で、笏でするのは宮中の公家達である。その「持ち物」で人物を暗喩するという、一ヒネリひねった句である。

南＝毎年二月下旬より三月上旬の頃に、将軍の年始御祝儀に対する答礼として京より勅使の下向がある。この勅使参向の時は春雨の期にあい、柳句にも雨を結んだ句が多い。

永ヵの日をふり通ふさるる御きやう応　明五義1
公家衆の江戸出立ッにニじかふき　明五礼1

で、本句御扇子は将軍或武家方、そして笏は勅使或公家方で、相互の挨拶に春雨のことが出たとの事。

本多＝南氏説賛。勅使下向を詠んだ句。
多田＝南説賛。『徳川実紀』勅使参向の一例「浚明院殿御実紀」宝暦十一年三月五日「五日新年慶賀の勅使広橋前大納言勝胤卿、姉小路前大納言公文卿参向あり」。
岡田＝同。

黒川紫香選

子と遊ぶ妻が少女の貌になる　東予市　小山悠泉

ロボットが稼ぐ職場に詩がない

逢えば又未練心が湧く出合い

暑さ嫌いだった夫の墓洗う

どちらへも心がゆれるヤジロベー　富山市　舟渡杏花

文部省推せんのひともの足らず

他人ならこうまではせぬ平手打ち

あの人を入れてあげたい傘を撰る

合掌を拒む右手が他人めき

冗談が過ぎ置き去りの刑に合う　西宮市　紀市郁栄

人妻と別れるときは手を振らぬ

ごあいさつができる利発な目をしてる

ＯＬの焦りを風が聞きもらす

夕陽沈むとき時効を意識する

ハガキ出しそびれて逢いたくなってくる　八尾市　高杉千歩

軒しのぶ購うて祭りを横に逃げ

看取りの記七年前も熱帯夜

童話読むやさしさに飢え夏日照り

星影のワルツが好きで雨女

新しい玄関豆狸堅く佇つ　尼崎市　奥山美智子

母の歌口に広がるさくらんぼ

いい人だった花輪が雨にぬれている

いい妻でいようおいしいめしを炊く

流れ雲いちずな思い揺るがせる

ロボットの素手は仕草をしたがらぬ　鳥取県　中原諷人

脚光を浴びる夫婦も子が居ない

角隠しの白さ戦さを布告する
湯あみする老母の乳房はまだまるい
正座して亡父の墓前でツルを折る
正午に捨てた武器が反戦歌に溶ける

尼崎市　角野かず子

形見着る背なから母のぬくもりが
肩車子どもはパパの視野を知り
無味無臭な女で香水ふってみる
看板の大きさ税吏の目が光る
半生を問わず語らず手が温い

羽曳野市　麻野幽玄

年頃の娘がいてタンスの値をのぞき
生き物はもういやペット逝ってから
先頭が覗けば皆が見る隙間
昔々の童話の中にいる寝顔
おごられた分だけホステス乱れてる

尼崎市　丹下玉子

鉄をうつように育てた子が背く
父の日に遮断機あげて子を許す
妻の笑顔なにか魂胆あるらしい
板前をかえてのれんの客が落ち
祭太鼓うつ若人の汗が飛ぶ

今治市　矢野佳雲

よく来たとほめてやりたい五階の蚊
ゆれるだけゆすって露地へ風鈴屋
歌手の親だって上手なわけがない
罪深き男女を鬼にする
眉太く洗いざらしを恥とせず

西条市　片上明水

照準が毎日替わる首相談
雑巾の白さが目立つ祖母でした
借財が九分片付いて遍路旅
乗り気ではなさそう連れが遅れ勝ち
カレンダーきれいなままで老夫婦

今治市　渡辺南奉

人間の弱さで食っている易者
三十で割ると月給これっぽち
辞書探す言葉心が通わない
頼りない男の方が人間味
義理一つ一つ中元選りながら

松原市　佐藤藤子

真中にいるから不安になってくる
親切な人が選挙を口にする
年寄がいて納豆が好きな孫
頼りなげにしていていつも先頭で
向き合えば夫の髪も薄くなり

尼崎市　西村かすみ

諦めているが薬に生かされる
音痴にも音痴のリズム酒楽し
手を組んでただ歩いてるだけの幸
男でも女でもいい三人目
わだかまり解けず深夜の熱い風呂

手品師が騙されている名演技　兵庫県　中田白李
保険証だけの治療をしてもらう
迂余曲折今日のひめくり無事に繰る
下取りにならぬ男の定年後
お詣りのツアーが好きになってくる　京都市　松川芳子
玉のれん髪にからませ母の愚痴
行く行くと電話の嘘に馴らされる
振返る私へ小犬首かしげ
自家製のトマト実ったタンブラー
種床で雀砂浴びしてる朝　高槻市　竹内花代子
活けられた稲穂炊飯器を知らぬ
九谷焼玉露に似合う彩をもつ
久し振り逢えばうるさい程喋り
温室で咲く紫陽花が雨を聞く
企みをハンドバックに詰めて出る　青森県　工藤蕗子
旅へ出た財布は妻に握られる
親馬鹿の夢がふくらむ通信簿
なつかしい文字で届いたお中元
勉強へ一息入れる西瓜割り　尼崎市　関口幸子
良い格好しすぎて自腹切る羽目に
くじ運の悪い女で雨に遭う

塀越の風鈴の音に聞き惚れる
惚れられた事もないのが恋を詠む　尼崎市　田中晴子
なす漬は母の色にはかなわない
夏足袋をぬげば喪服に落ちる汗
母たちの絵の具にいくさの色はない
倖せなドラマに耳へ栓をする　島根県　槻谷一葉
夏の日の西陽が柿の葉にかくれ
子との距離こゝらで折って近づこう
寝たままの孫と別れてくる辛さ
化粧して心落ちつく妻の朝　唐津市　浜本千代
景色など見向きもせずに先づ土産
猥談も笑顔で受けるガイドさん
温室のトマト聚雨の味知らず
淋しい日猫心得て膝に来る　松原市　本多洋子
新幹線細道にまで延びてゆき
犬と子が向い合ってる優しい目
母の側で編物見ている子の安堵
云っときますけどねと母は子供に釘をさし　藤井寺市　赤木和子
凶器にも見える妻の黙秘権
逃げる気の男時計をまた覗き
未練などないという眼が濡れている

勲八等以下同文のモーニング　尼崎市　伊藤春子

降る様な星を見せたい子の電話
子に期待捨てて一人の設計図
子を生んだ犬こまやかな母性愛
洗い髪明日は旅立つ夕茜

岐阜市　市川鱗魚

甘い情できくふる里のまつり笛
向い風なれば胸はる風見鶏
水溜り翔ぶと女はふり向かず
泣き濡れる女のバラはぬすめない

島根県　星野侑正

冷蔵庫あけてもビール見当らず
五ッ珠はじく儲けでたかが知れ
妻病んで家のリズムが狂い出し
補聴器を掛ければよいのに頑固者

名古屋市　越村枯梢

日めくりの痩せる速さに追いつけず
目かくしをされた埴輪の獨り言
生きている証しに腹も立ててみる
吹き溜りの中に愛しい俺がいる。

竹原市　佐藤令子

湯加減を聞いてはくれぬ温水機
似ていない姉妹で亡母にそっくりで
少しだけ進んだ時計でするデート
本当は気付いて欲しい擦れ違い

熊本市　高野宵草

カタカナのメニューとにかく食べてみろ
本読めば勉強してるなと問われ
写真帳むかし昔の虹がたち
方言が飛び出す程にうちとける
小利口になれぬ無器用さを自嘲

尼崎市　春城年代

乳離れの瞳かなしい色になる
女とはかなし生家のかげをひき
ちょっぴりは悪魔が住んでいてもよい
土曜日は溺れてゆきたい酒を呑み

旭川市　朝倉大柏

赤信号ばかりに出合う急ぎ足
取りあえず豆だけ出してビール抜く
後を押す妻だけとなる向い風
養生を叱った医者が先に逝き

熊本市　有働芳仙

針の穴くぐれば針についてゆけ
嫁が来て我が家へ派手な色が殖え
父として残すことばが見つからず
エレベーターみんな無口な顔になる

大洲市　横田放人

咲きかけをあげてうれしい花便り
緑濃き小道指さすへんろ道
大の字に寝る検診は異状なし
こう然と山に向って野小便

夢に来るあの人やはり好きかしら　島根県　松本はるみ
つるばらのアーチくぐった少女の日
理屈など通らぬ人と長い道
雨の午后犬小屋寂と音もなく　豊中市　満仲きく子
法要とはしびれの切れるセレモニー
帰るのは法要のみのふる里よ
綾取りをしながら聞いてる遠蛙
ふだん着が一番いいさ旅終る　堺市　久井富子
人間にわからぬように神の私語
わたくしはこれでも翔んでいるつもり
おたがいにネジをゆるめて平和です　八尾市　山下みつる
飲み薬忘れるぐらい回復し
叱るのが日課の様な妻の声
東大は親孝行を教えない
おひな様かざると娘行儀よい　島根県　東原福子
喜雨来るあっちこっちで雨蛙
楽焼の肌に京都がほんのりと
憂きことを忘れる胡瓜刻む音
手をついて雨に答えている蛙　岡山県　吉末謹太郎
同じ血が流れて性格みな違い
雨迄いへ無神論者も掌を合わせ
長生きの相で毒舌ばかり吐き
風よ哭け孤島に荒れし流人の碑　兵庫県　森脇和子
西日射す窓に一人の席があり
思い切り泣いた涙を過去にする
友去った茶の間が今も温かい
母一人満たすものあり趣味の会　高知県　大西冬木
うまの合う隣おんなじ花が咲き
別居してからのせせらぎよいリズム
水着ショーの折込が来る梅雨あがり
梅雨晴間登校の児の賑やかさ　八尾市　宮崎シマ子
甘い言葉に心がゆれる青い桐
まだ知らぬ楢山へ想いかけてみる
辛い〳〵味付の夜は寝つかれず
我が家には裸電球ある温み　大阪市　吐田公一
薄情な男に女ついてくる
戦友の話やっぱりカビ臭い
立話娘の縁も頼んどき
里帰り気ままに伸びた娘の手足　川西市　氏林洋敏
良く出来た女房と思う病みあがり
恋をしてすこうし花の名を覚え

転勤の辞令へ妻は黙りこみ
うちの子は誰に似たのか美男美女
西宮市　朝山千世子

慈雨の徳好きな謡いを一くさり
ゴキブリに振り廻されて熱帯夜
名人会老女の舞が瞳にのこる
カウスボタン婚約の日の愛を秘め
富田林市　藤田泰子

負んぶする愛がだんだん重くなる
散る場所は野原と決めた野の小菊
雨の日は親しき友の便り待つ
雨宿り気の合う二人でレモンティー
大阪市　津山刀水

しあわせと書いた手紙に残る嘘
泣き事は言うまい明日も陽が昇る
カーテンでいつまで騙し通せるか
叱りつつ脱がせ洗濯機は回る
岡山市　原田凡太郎

青春の大志マイホームで終り
淋しい日雨もつぶやくように降り
いただけぬ声で社長ののど自慢
蔓ばかり伸ばし依怙地になる胡瓜
青森県　波ただお

旅をして蛙の声に耳を立て
何もかもうまく行って飲むビール
青空が見たくて戸外へ散歩に出

新調の半袖シャツが涼を呼ぶ
弘前市　田中叶

雲の峰火葬場一つ見える道
昼間まで寝てて杭打つ響き聞く
自転車で来る叔父さんに嫁がなし
先生といわれ薬を飲む時間
大阪市　白石潔

グラマーで宿のゆかたは着たがらず
ハイミスはみんな小町かも知れぬ
おずおずと入れば許す瞳に出合う
まだ赤や手を引いた子にしかられる
西宮市　奥田光子

幼子が母の小指と手をつなぐ
老いてなお胸にドラマを組み立てる
絹糸の縺れにもつれ夜が更ける
生いかを投げ出したよう午前様
尼崎市　中谷利美

家事一切出来ぬ女でよく嫁ぎ
食欲がないからお茶で流し込み
おんなとは男次第と父で知る
善人の証拠はすぐに腹を立て
唐津市　神崎紫泉

民芸の土産売る娘の国訛り
雨たたく窓にピタリと青蛙
肩の荷を嫁にゆずって友と旅
今治市　蔦本昌道

タイムカプセル埋める大人と子の世界
時刻表通りに逢うて恋進む
筆不精だった妻から旅便り　鳥取県　和井観洋

嘘ひとつ許せぬ青い空である
あげ底と気付かぬふりをしておこう
カーテンを透して温い灯がこぼれ　西宮市　松尾志保

週末の日曜大工が見直され
週末は妻のいいなり運転手
青春を七つボタンで光らせた　尼崎市　矢萩貞子

天窓へ煙の柱はいのぼり
窓越しに見えたお人が笑ってる
週末をゆったりとして仕舞風呂　八尾市　松下蕉露

形見分け済んで親類来なくなり
行先は犬が知ってる散歩道
手に句帖心に恋の手帖持つ　泉佐野市　真崎浪速子

雨傘がくるり色よい返事くる
綿菓子へ少年の日を買う夜店
夕立が夜店の不意を突く祭　米子市　足立由美子

寝言でも口答えする反抗期
今日の顔つくる眉毛を太く書き
包丁の音まで競う団地妻　島根県　石飛水煙

古里もあじさい咲いたかふと思う
蜘蛛の巣の織りなす芸術見て暮れる
やがて来る冬のきびしさ影もなし　北海道旅行　新潟県　高野不二

訥弁で云うから重みある言葉
ニックネームで通ずる五十面
犬運ぶ為に買うてる自家用車　西宮市　西口いわる

急ぐ程出て来ぬ大事な探し物
飛び込んだ電車は方向違ってた
むつまじい話の中に鳩も寄り　鳥取市　武田帆雀

目をかけて下さったのか但し書き
ライバルとなるだろう後輩の長所
再起する足しになるなら躊躇せず　大阪市　服部頼一

取れかけのボタン千切ってスッとする
車窓から撮る富士何時もピントずれ
腕白の服のボタンが皆違い　熊本市　北川一進

輪になって踊るキャンプの夜の長さ
気を付けの姿勢で寝かす寝台車
屋上で双眼鏡のつく護衛

表札で偶然名士の家を知り　大阪市　北山悟郎

人生を真直ぐ歩いてミスばかり
生存を確かめ合うて戦友会　尼崎市　中辻千子

娘の踵の高さ過ぎし青春想う
同じひと言実母と姑の差を感じ
空の青さに前向きの力沸く　守口市　長谷川司

七回忘父母を泣かせた顔ばかり
豆づるが宅地造成うばい取る
打つ針が右や左と馬鹿にする　東大阪市　坂本喜洸

年寄に譲った席に子が座る
窓辺の子時折り校庭へ目が走る
我を折って年寄らしく腰を曲げ　水戸市　上鈴木春枝

言わないで良かった金の話なぞ
近眼へすれ違うまで待つ会釈
ハエ叩き握っていつも諦める　尼崎市　山田保蔵

いい人と歩いて見たい御所の庭
年上の女房きれいに化粧する
二十年嫁のタクトで家風変え　島根県　藤原鈴江

雑草をなぶって抜ける風の唄
妻である自信を崩す影に会い
ベレー帽父の苦脳を包むべし　島根県　田中ヒデ子

出来すぎて玉葱落ちつく場所がない
無事了えた牛のお産をほめてやり
神棚へ年金しばし預けとく　鳥取県　森山盛桜

爪を切る音へ構わず意見する
今日をどう生きるか朝の髭を剃る
群衆で終わるハチマキ派手に締め　島根県　岩佐富子

空模様気にして孫を送り出し
夏祭り金魚の柄着て金魚掬う
幸いに月と話せる隠居部屋　高知県　曽我部つぎお

感情を押える声がふるえ出す
釣り日和父の姿がよみがえる
追いぬけば絡まれそうな千鳥足　大阪市　堀口欣一

うちの嫁うちの嫁がとふれ歩き
昔ならユースホステル木賃宿
横堀が消えて鯛寿司だけ残り　大阪市　権安達一郎

二番目のボタンの奥に亡妻が居る
創立者だけは何時でも変らない
ラジオかけ男独りがボタン付け

守口市　中原好恵

ハート型赤いボタンに夢がある
夏の風けだるい声の大人たち
窓際に四季折々の四角い絵

大阪市　野田君枝

母偲ぶカーネーションは白で咲く
どの国も平和を叫び武器を持ち
外遊の後に待ってる針ムシロ

山口県　高崎雀声

甲子園へ送り出征の日が浮ぶ
持ち家は夢に終った流れ星
海水着砂浜歩くだけのもの

兵庫県　奥野テル

打ち水を笑っているやろ雨蛙
成績は別に一位の無欠席
我が里は焼物の町土に賭け

西宮市　津山冬子

地球儀に旅の娘を追って見る
口下手がうっかりしゃべって座が白け
能登の旅海の景色が夢にさせ

鳥取県　羽津川公乃

保険屋の粘り夫を死なす気か

夫定退近し

最後のボーナス自由に使えと気前よい
大空にケシ粒ほどの悩みもつ

兵庫県　円増貞子

働き蜂どっとつめこみ発車ベル
雨止んで山から山へ虹の橋
旅立を知らずさや豆とゞけられ

室戸市　浜口秀子

想い出の小箱きりりと痛む胸
ほたる飛ぶ女の想い秘めてとぶ
いつまでも女でいようそう思い

河内長野市　糸谷春草

神苑の花菖蒲見る日曜日
日曜日釣りを楽しむ親子連れ
小豆島もろみの匂いする通り

島根県　北川民子

夫入院

紫陽花を見せる手鏡夫へ向け
山肌の土の匂いを素手に触れ
夏の雲マリア像から龍になり

島根県　藤原秀穂

富田城址にて

城下町を昔に返えす鐘をつく
百羅漢どれがわたしの顔だろか
人当りあまり良すぎて怖くなり

大阪市　板東倫子

うちの子も同じ窓際のトットちゃん
公団の窓一つずつ灯り消え
定まらぬ心のままにプッシュホン

尼崎市　吉永伊三郎

前立を病み男の匂い枯れる
戦争話聞く母は首を振るのみ
死ぬときはお母さんといった兵隊　兵庫県　山根左春

姑は畠の西瓜を見て廻る
気にさわり打水までも荒くなる
知らぬ間に悪妻ぶりも板につき　今治市　新居田胡頼子

煩悩にゆらぐ哀しい蜘蛛の糸
満月がかすみせつない夜にする
意地張ってもて余してる針の穴　大阪市　山本炉斉

窓あけて朝の冷気を胸一杯
窓辺には鉢植の花いろいろと
長谷寺の廻廊花で埋まれり　奈良県　宮川古都路

ネオン街水掛不動は苔のひげ
叱る児に反抗期のある口答え
開かずの間鍵は柩と共に消え　長岡周太

寝たきりの傘寿祝いに言葉選る
来世を信じて朝の経を読む
マンションでなくてよかった病んでみて　島根県　岩田三和

窓すこし開けて病人深呼吸
熟年でボタン外したまま歩く
歩くほど冷たい風がほしくなり　八戸市　島田昭治

売るくらい母は薬を溜めて居り
上べだけ見れば誠実らしく見え
仏滅の式でも倖せ溢れそう　高知県　山下登舟

立つ度に夜なべの糸屑つけて妻
蒔く種が多くて狭い妻の庭
こしらえた滝に涼しい心太　吹田市　西岡豊

笑わせてパット和んだ大広間
拗ね者を宥め押しきる部下がいる
パンパンと風船裂けて裸女踊る　枚方市　二宮山久

ふる里の空で見た月我家にも
縄のれんくぐれば男の顔になる
夫婦酒語る人生あすがある　大阪市　今西静子

苦労した母とカメラは二重橋
齢とった事にしておく物忘れ
運試しというパチンコに拗ねられる　大阪市　平井露芳

動物園夏は臭気で嫌われる
会場は何処も嫌がる日教祖
ちりめんじゃここれも骨つきカルシュウム　芦屋市　中村近子

独身の友の便りはパリから
庖丁の音ほど菜葉切れていず
嬉しい日鏡の自分かくせない
高知県　北川竹萌

新聞の年金記事は見逃さず
選り廻す桃をはらはらしつつ売る
蚯蚓ミイラ今日蟻塚となっている
唐津市　筒井朴竜

諸酌を蟹漬で呑む佐賀頑固
佐世姫の岩へ松浦河汐招き
姫落し谷へひっそり海老根蘭
大阪市　塩田新一郎

袋路の扉を孫があけてくれ
二杯目のコーヒーがさめてまだ来ない
夕陽には蟻も矢っ張り長い影
大阪市　日阪秋子

片方をいやに褒めてるあてこすり
一碗の食で老母の口達者
捨石になって甘さに気付き出す
岸和田市　吉永照江

虹ながめ一人でゆっくり歩こうか
三姉妹亡母に似てきて腰まがる
七夕にかなわぬ夢も書いてあり
和歌山県　寺田裕美

母の旗うしろで小さく振るばかり

満々の自信助走を怠たらず
鳴門市　八木芳水

打ち返す矢が尽きたから負けておく
義理果たす支出が出来る老いの幸
寝屋川市　立床晴風

神様を担ぎ慕走する御輿
赤い旗持って生れた児にあらず
島根県　大浦ふみ

ぜいたくな悩み中年ふとり過ぎ
珍客を迎える軸に迷わされ
青森県　岩淵一星

雑草の中で手を振る写生の児
父の日を腹一パイにして皆もどり
高槻市　芦田静江

枝豆が採れる予定の日曜日
墓参する日を菊に問う花の庭
尼崎市　荻野江唯夫

確かめて愛の深さを知らされる
処女性の証明實に難かしい
和歌山県　北浜二郎

沢市の杖撫ぜてみる壺坂寺
けしゴムはわが身へらして円くなる
高知県　藤原岩男

信号をじっと眺めて待つ子供
新幹線東北弁をはこんでる
千葉県　中村有人

目覚しを止めてまたもや寝てしまい　倉吉市　今村夕路

巷には季節忘れぬ彩りが

灯台に夏は素直な海の顔　兵庫県　野々口ゆう也

お人好し逃げ口上もよう云わぬ

いくつでもよいのに齢をききたがり　岡山県　池田半仙

死ぬときは独り孤独になれておく

若松も松喰い虫は容赦せず　大和高田市　岸本豊平次

スモッグも透して見えるガイドの目

トンネルを出れば日本語も変り　今治市　八塚三五島

境界を人が作って人がもめ

糸くずが書斎に少しついてくる　大和郡山市　岡田すみれ

子に敬語使い世の中甘くなり

むらさきの可愛いい花にお早ようと　大阪市　村島秀村

初夏になればホタルの光なつかしく

涼しさに木影の下に集りぬ　河内長野市　井上伸子

老人も暑さにまけず歩るきましょう

また嫌やな寄附が回わって祭り来る

無駄口を聞いても夫は笑うだけ

八十路越えてもやはり母恋し　東大阪市　三宅旭

耐乏の裏では栄華昔から

子授けの寺あじさいの寺になる　泉佐野市　大工静子

ポートピアホテル外国を味あうて

せめてもの罪ほろぼしに鮨を下げ　青森県　荒田つる

風景に佇てば名画となる農夫

もの思い落葉を踏んだ廻り道　八尾市　椎尾公子

空港の今日は新婚旧婚も

窓を開け山の冷気を深呼吸　大阪市　山脇正之

受診待ち嫁の悪口に憂さはらす

トイレにも花をいければさわやかな　松原市　松本房子

両手足のばしてる犬きもちよか

ひょうきんな要素を持っている人気　尾鷲市　渡辺伊津志

お遍路に一足遅れ夏を着る

あの窓の拍手も阪神ファンらし　富田林市　田形美緒

ナイターに親子の意見一致する

定年で去る親友信念曲げぬまま　橿原市　西本保夫

定年で去る親友夢がうんとある

路郎賞
川柳塔賞

候補作品中間発表

自 57年5月号
至 57年8月号

◇路郎賞候補作品

（到着順）

正本水客

手料理という歓迎に隙がない　水粉　千翁
春雨に濡れたを忘れない女　遠山　可住
庭の夜を抱いて沈丁花眠らない　都倉　求芽
迷いふと桜が散ってゆくように　高橋　夕花
松の無いニッポン国をおもてみる　河原みのる
善人の怒り常識通じない　高橋千万子
一人言いわねば言葉忘れそう　藤田頂留子
いのちまで見せて白魚透きとおり　工藤　甲吉
悪人と言われる人に庇われる　高杉　鬼遊
ぼたん園抜けると苗を売っている　原　さよ子
花時計蝶をおどさぬよう回る　香川　酔々
ご先祖に混血がある高い鼻　川口　弘生
花好きの妻が私を疎んずる　小幡　里風
冗談のなかで口惜しさばいと捨て　堀江　芳子
潮溜りにいて小魚は疑わず　林野　甦光

若柳潮花

戦争のない菖蒲湯の男たち　高杉　鬼遊
釘打ってみてもガタガタする机　清水　健司
丸出しの無知を可愛いナと思う　小野　克枝
すこしずつ春に目覚める鈴の音　西山　幸
春うらら外野フライを見失い　谷垣　史好
似たような夫婦に出逢う春の旅　小出　智子
地下鉄の窓にも春の陽が欲しい　都倉　求芽
子を叱る言葉のトゲを抜いておく　岩本雀踊子
贅沢な言葉と思う旅つかれ　野呂　右近
啄木忌じっと手を見る人ばかり　工藤甲吉
出陣の女で美容院が混む　八木　千代
予定地へ今年限りの花が咲き　浜本久仁於
うるさいが生きねばならぬ基地に住む　菅井とも子
蛇口ひねってすこし明るい水を出す　高橋　夕花
軽口で触れてはならぬ深い傷　福本　英子

西尾栞

儲けとは悲しきものよ友が減り　清水　健司
ノイローゼぐらいは治る銭湯よ　小島　蘭幸
庭の花ほめて無難の交際す　田崎あき子
雨や憂し家庭医学の赤い本　谷垣　史好
いのちまで見せて白魚透きとおり　工藤　甲吉
夕立へ布団とりこむ仲直り　若宮　武雄
日本海テトラポットに似合う波　井上柳五郎
一級河川は淋しい川とんぼ　舟木与根一
あれから三日妻も私もろくでなし　山内　静水
夫婦して無言でつぶす屑いちご　高杉　鬼遊
老いてゆく姉妹に小さい旅があり　鈴木　節子
立ちくらみ誰のためなる背伸びかな　村上田鶴子
よく使う母の形見の虫眼鏡　谷　真風
壁に耳うっかり聞いた血の秘密　野中　御前
四面楚歌電話のベルさえならぬ日か　吉岡きみゑ

証人として交番の茶をすすり　岩井本蔭棒
茶飲み友達と寂しいこと申す　稲葉　冬葉

橘　高　薫　風

雨だれの一つを飲んだ雨がえる　那須　鎮彦
友禅の絵柄も小さくなる不況　小林孤呂二
セットしてなんと五つも老けたよう　北野　久子
トイレから戻ると社長の顔になる　中川　滋雀
往年の二枚目仏壇コマーシャル　岡田　ふみ
母の手と同じ温もり握り飯　杉本智慧子
二級酒でよかろう愚痴の相手なら　若宮　武雄
爪を立てると夏がはじけるレモン　宮尾あいき
ジョーカーの一つが残る旅の果て　辻　文平
諸行無常亡母が次第に若くなる　中村　優
小児病棟みな美しい妻をもつ　小島　蘭幸
鼻の穴性善説を信じよう　谷垣　史好
朝顔一つ誰にも優しくしたい朝　村上田鶴子
相見ての後はコーヒー党になり　柴田英壬子
青梅が出そめ一病持つ恐さ　堀江　芳子
私利私欲回転椅子に反り返り　西岡　洛酔

◇川柳塔賞候補作品

谷　垣　史　好

蘇える川と話せば母のこと　高杉　千歩
煩悩を二つに分つ鼓鳴る　森脇　和子
空気より少し彩ある夫婦仲　藤田　泰子
女から出逢い水蜜桃熟れる　市川　鱗魚
口説かれています夜景がきれいすぎ　有働　芳仙
魚屋の魚死顔きれい過ぎ　松本はるみ
死ぬ時は一緒と恐い言葉なり　氏林　洋敏
待伏せのような気もする花便り　片上　明水
城あけた男にしみるわらべうた　紀市　郁栄
びわ熟れるやさしい母になりましょう　古田比呂子
駅に撒く水はやっぱり男の手　今西　静子
深夜聞くまるめた紙の開く音　田中　叶
謝恩会ただぬくもりの中にいる　八塚三五島
年金を頂くだけの貯金帳　竹内花代子
公園に小犬もいない気味悪さ　宮崎シマ子

香　川　酔　々

千羽めの鶴が命の灯をともす　田中　亜弥
空気より少し彩ある夫婦仲　藤田　泰子
日曜日少し濃いめに紅をさす　清水　康恵
くちなしが匂う未完の絵は夏へ　高杉　千歩
気紛れな男と乗越券を買う　紀市　郁栄
改札を出ると歩幅がみな違い　片上　明水
一病息災薬でだましだまし生き　有働　芳仙
門灯にわが家の安らぎをともす　奥山美智子
出土したつぼに歴史がつめてある　小山　悠泉
争えば妻は昔の傷にふれ　西村かすみ
父の咳ちょっぴり孝行したくなる　久井　富子
鏡には一番いい顔してみせる　田中　晴子
死ぬときは一緒と恐い言葉なり　氏林　洋敏

昭和57年
尼崎市文芸祭作品募集

募集作品…雑詠　一人二句

1応募作品はハガキの裏右半分に楷書で書き、左半分には〒・住所・氏名電話番号を明記のこと。

2作品の右上に「川柳」と朱書のこと。

締切り…9月25日（当日消印有効）

投稿先…660尼崎市東七松町一―五―二〇
尼崎市教育委員会
社会教育課　文化係宛

審査員…萩原金之助・伊東静夢
奥田白虎・北浦牧郎・森田栄一

入選句発表及授賞は次の通り行われる

日時…**11月28日**（日）午後一時

場所…尼崎市立立花公民館
（阪急塚口駅より北西へ徒歩7分）

記念講演…中村東角氏

主催　尼崎市教育委員会
協賛　尼崎市川柳同好会

すぐ本音吐いて私が負けになる　中田　白李
水すまし吾が身の波紋ぬけられず　円増　貞子

高杉鬼遊

出世せぬ頃が良かった夫婦仲　小山　悠泉
気の多い男にめしは浅く盛る　紀市　郁栄
朝刊のチラシの中にある暮らし　吐田　公一
紅さして夜叉の心を女とす　奥田　光子
死ぬ時は一緒と恐い言葉なり　氏林　洋敏
波風を立てないように愛します　有働　芳仙
夢はでっかく間借りの壁の世界地図　舟渡　杏花
人事異動その日も子等の馬となり　田中　叶
居酒屋に薬袋を置き忘れ　田辺　哲寿
お百度を踏んで前より悪くなり　関口　幸子
牙抜かれてから狼の妥協ぐせ　矢野　佳雲
横堀川精霊舟はもうこない　高杉　千歩
年金を頂くだけの貯金帳　竹内花代子
葱坊主春の祭りの寄付がくる　片上　明水
以下同文の名に連なって義理を立て　岸本豊平次

西田柳宏子

つかず離れず絵皿の中の夫婦独楽　高杉　千歩
洗い髪女に嘘のない日なり　竹内花代子
朝顔の種蒔くだけの土を買う　板東　倫子
曖昧に言うから罪が一つ増え　細川　稚代
八十歳夫婦ゲンカの種つきず　田形　美緒
七人の敵を生み出すランドセル　服部　頼一
銃口を自分に向けて気を静め　麻野　幽玄
タンポポからゴッホの炎をもろてくる　奥山美智子
ブリッコの鮎友釣りへ先ずかかり　筒井　朴竜
冷蔵庫一杯つめて料理下手　大倉　圭介
言うだけは言うて波紋の中に居る　今西　静子
睡眠薬もった安堵によく眠り　伊藤　春子
虫の声聞いて風鈴熟睡す　角野かず子
信用がない古時計にある安堵　佐藤　藤子
城明けた男にしみるわらべ唄　紀市　郁栄

句集　花筏
―うれしい二百句―

橘高薫風

山下登舟さんが句集「花筏」を上梓された。題簽は本社副主幹の西尾栞氏の筆になる。

序文で樫谷桂緑氏は、「普通、老境から始めた作句の道程は坂道を登るように遅々として進まぬものであるが、投稿わずか三年にして、四百句に近い川柳が作品として各誌に取り上げられたことは驚異というより他に言葉はない。登舟さんは当然のことを真剣に考えた。当然のことを大切にしなければならないと思った。二度とない人生が一瞬の夢なら、夢を絵にして永遠の額ぶちに飾りたいと考えた。登舟さんはそれを実現するため、三年間の人生画を整理した。額ぶちは小さくても、彫琢された縁どりは素晴らしい。登舟さんは県内外の各紙誌に活字となって入選した全作品の中から二百句を自選した。その慎重で毅然とした態度は頼もしいと思う。云々」と述べておられる。

登舟さんは私が選を担当している「電波川柳」の常連であるが、初期は病院からの投句であった。脳軟化症で、言語と足の機能が正常ではなく療養中であった。おいおい快方に向い、喜寿を迎えられ、また奥さんは古稀

十八の気で居る夫婦喜寿と古稀

の句があるのも、おめでたい限りである。

宅地化へ水争いもない平和
栗色の髪では結えぬ日本髪
しっかりした批判の目を持っておられる。
大欠伸北斗に吐いて座にもどる
看護婦が白衣で作る雪だるま

俳句の感覚でもあるが、句はおおらかでセンスが良い。

呑めば足るだけの男で花の留守
囀りて病む身はげます朝の窓
米寿祝ただ看病の娘だけ

これは登舟さんの自画像、身辺座臥の句と言える。ますます健康で、川柳を楽しんで下さい。

■本社でもお取次ぎ致します。

頒価　一、〇〇〇円

—同人吟—

秀句鑑賞

—前月号から—

浜田　久米雄

耐え抜いて妻美しく老いている

舟木　与根一

どの位苦労をして来たかはわからないが、自分のために家のために苦労して来た妻である。その苦労に耐えて来た妻の横顔は老いてはいるが美しい。妻に対する感謝であり、ねぎらいの気持が句を引き立てている。

印籠は葵みんなが土下座する

香川　酔々

みんながわかる水戸黄門の句である。この頃二読三読してもわからぬ句が増えてきているがすぐにわかるし、ほほ笑ましい句である。

俎板に覚悟しきれぬ鯉もある

八木　千代

俎にのれば従容として死を迎える鯉ばかりとは考えられぬ。これは人間の世界も鯉の世界とは同じようで、あきらめの悪いのもいるのが世の中であろう。

ハンカチの折目で泣いて他人さま

水粉　千翁

折目で泣くとはうまいことを言ったものだ。おなじ泣き方でもハンカチを顔中にあてるのと折目で泣こうとする他人様との間に大きな違いがあるようである。

やわらかい飯がだんだん合うてくる

金井　文秋

若い時分はそうではないが、年をとるにつれて歯の具合やら胃の具合から固い飯よりやわらかいのがよいようになって来る。健康に年に添った生き方に同情を感じる。

熟年へまだ酒ぐせがやめられず

恒松　叮紅

反省の句ではあるが、それ程遠慮しなくてもよいと思う。長年嗜んで来た酒のことであるから、もう後何年生きようとうまいものはうまいからである。

玄関に出ても女はまだ話し

越智　一水

家の中で一度挨拶をして送りに出た玄関ではあるが、まだ話し足らないのか送る人も送られる人も尽きぬ話がつづくのである。この辺に親密の度がうかがわれる。

ぬる好きの夫にごった湯へ残り

井上　柳五郎

ぬるい湯へゆっくり入りたい性分であるから、にごっていても構わない。少々濁っていても本人は満足しているのである。いい湯である。

お見舞に行ける自分の幸思う

中西　兼治郎

お見舞に出かける自分が、お見舞を受けているものと思えばそこに大きな差が生じてくる。病気をしているから見舞を受けるのであり、健康であるから見舞に行けるのだ。

おじさんと呼ばれて歳を振り返り

中原　比呂志

まだまだ若い気でいるのに「おじさん」と呼ばれる場合がある。何歳位から「おじさん」でよいのか、それまではおにいさんでよいのか。相手によって違うのであるが、人はいつまでも精神年齢は若いのであろう。けれども「おじさん」と呼ばれたら幻滅である。

忍従はむしろ姑の方にあり

藤井　春日

嫁と姑との関係は、これまで嫁の方が耐え忍んで来たのが家風とされていたが、この頃の嫁というものは亭主でも姑でも負けてはいないような世相になって来ているようだ。テレビを見ても感じる場面がそうで、むしろ姑の方が耐え忍んでいるように思われる。

平凡にくらして天寿全うし

傍島　静馬

平々凡々と暮している者共にとってはまことにありがたい句である。あくせくと暮しても一生は一生であり、平凡に暮しても一生でありその上に天寿を全うできたら最高だ。

句評リレー

樫谷寿馬〈伊丹市〉
嘉数兆代賀〈岡山県〉
高橋鬼焼〈東広島市〉
尼　緑之助〈出雲市〉

ちりめんの袱紗のなかの会者定離

西山　幸

寿馬—茶の湯の心と、その中の人生の無情感を凝視する作者の思いは、中七下五だけで十分。絹であるべきものを〝ちりめん〟は余分では。他に言うべきことなしとすれば、不定型のままでも此の場合はよいのではないでしょうか。

兆代賀—袱紗は茶の湯だけでなく、進物の時にも使われますので何か焦点がぼけているような感じがします。会者定離の言葉をも少し具体化した表現が出来たら句が引きたつのではないでしょうか。

鬼焼—人間の運命をするどくつこうとした句だと思いますが、「ちりめんの」上五句が止五に対して弱い気がする。

緑之助—うっかり沈黙。

寿馬—前回のように書いては見たものの、羽二重や塩瀬ではなく、特に〝ちりめん〟とあるのに何か深い意味があるのではないかと反省し、これは作者にお尋ねしたいと思います。でないとしても〝ちりめん〟のソフト、袱紗の持つ人間社会の封建性、そして仏教思想の根底にある無情感の三つの対比というか矛盾というか、そんな所に川柳性を見出すべきものかも知れません。

兆代賀—はじめは会者定離の言葉を具体化したら等と思いましたが、後で考えてみると袱紗と会者定離の言葉のつながりに何か深い意味があるようにも思われ、そうするとやはり鬼焼さんの言われるように上五が弱いように思われます。

鬼焼—「会者定離」の止五が作者の発見とも言える。川柳への冒険はおおいに許すべきだと思う。

緑之助—「ちりめん」の綾が下五を助けているように思われる。弱いながらも。

傷持っているから恐い顔をする

本間　満津子

寿馬—傷があるから恐く見えるだろう。どうせ傷があるのだから、優しさなんて……との居直り。が、やっぱり人は傷の有無に拘わらず素直で穏やかでありたい。あらねばならない。顔も心も。

兆代賀—いくら笑顔を忘れまい、明るい自分でありたいと努力してみても心の傷が頭を

もたげて知らぬ間に恐い顔になるのが人間の弱さではないのでしょうか。だから下五を恐い顔になるとしたらどうかと思います。

鬼焼—恐い顔をするでは句全体が平凡に終ってしまう、恐さの中に人間としての笑顔がほしいものだ。顔にするとすれば傷持ってが生きてくるのではないでしょうか。

緑之助—下五の『をする』『になる』どちらがいいか？『になる』が平凡ながら穏当のようだが、何れにしても平凡。

寿馬—言葉の流れ、調子から見て逆説的というか、愛すればこそ憎む、といった観点から捉えるべきとしていましたが、お三人のお二人が言っておられるように素直に受け止めるべきかとも考え直しもしております。

兆代賀—こうして皆さんの句を拝見させていただいて、一字の使い分けの大切さを勉強させてもらいました。また上五の「傷」と「恐い顔」の重なりで句がきつくなっているように思えますがどんなものでしょうか。

鬼焼—説明に終ったのが淋しい気もするが女性としてのやわらかい表現法を買いたい。

緑之助—最初平凡だと言ったが、平凡は平凡ながら捨てがたい余韻を持っているようだ。

共白髪のはずの夫が染めてくる

妹尾春江

寿馬—旧いと言えば言え。通俗と思えば思え。変な抽象や心象をと詮索せずに大声でうたいたい。こんな川柳を。軽味、諷刺、ユーモア、そしてペーソスという詩のベールすらも備えているこんな作品を。

兆代賀—いつまでも若くていたい。これは人間の本能だと思います。いい年をして等と思わないで、よーし私も負けるものかとルージュでも引いて共に若く余生を頑張ってもらいたいものです。

鬼焼—平凡ではあるが夫婦の愛情をユーモアにとらえたことは成功と言える。「共白髪の」のに引っかかる人間いつまでも若くありたいものだ。

緑之助—寿馬氏のお説同感。染めて帰宅した夫の頭を見て笑ったものの複雑な感懐がしばし劇しく動いたのだろう。

寿馬—前回は少し作者に失礼ではなかったかと思っております。白髪を染めるという男の、まあ言わば革新的な決断によって現そうとする夫の愛情と、それを受け止める側の女として、妻としての心情、今迄の流れを変えたくないとする優しさ、保守性、と言ったものの心の動き、絡み合いと解すべきだと思い直しもしております。

兆代賀—最近ユーモアの句が少なくなったと言う声をよく聞かされますが、このきびしい社会情勢の中でこんな句に出会うと言うことは何だか心にほのぼのとしたものを与えて下さったと思います。

鬼焼—スラリとまとめすぎて句全体にするどさがたりない気がする。

緑之助—熟年の哀歓、生まれた作品の強さを感ずる。

ひょっこりと生れひっそり死んでいく

松本文子

寿馬—客観か？　ではないと思う。ならば死という字は激し過ぎる。せめて〝消えてゆく〟位でありたい。不変の哲理にも歌心で接したい。

兆代賀—大いなるものの力に引かれて生れて、また大いなるものの力に引かれて死んでいく。これが人生の摂理だと思います。だから生を受けている間を悔いないドラマにしたいもの。

鬼焼—ひっそり死んで行く方が人間しあわせであるかもしれないが淋しい気もする。ユーモアの句が詠めない私にとっては、みならうべき句といえる。

緑之助—客観に主観をやや強めに冠せたのだろう。とすれば自嘲的弱さに抵抗を感じる。が、大きな問題をよくまとめたものと感心する。

寿馬—兆氏の希望、鬼氏のユーモア、緑氏の自嘲、三人の方々に比し、私は少し主観に重きを置きすぎたかも知れません。然しこれを等三者の眼としての句と捉えると全くの写生的、風景画になり、つまらないものにしてしまいそうに思われる。やはり作者自身の強い〝思い〟であると信じたい。

兆代賀—「ひょっこりと」と「ひっそりと」という対照によってこの句が引きたっていると思います。

鬼焼—ひっそり—という言葉がこの句の命であると言えるが「死んでいく」が淋しい気もするがユーモアとも言える。

緑之助—寿馬氏のように客観から促えると平凡、作者自身の思いと思う。すばらしい一生を絶えず描き続けたものの、気がつけば今や峠。このままずるずると幕が降りそうな諦観がよぎる。何れにしても人生の大問題を一句にすることの難かしさを覚える。完成された句ではないが、作者の思いが促えて離さない。

黒き瞳の乙女近づき牡丹画く

稲葉星斗

寿馬—画くは乙女か、作者か。又特に黒と断ったのは単なる瞳の枕詞か。貧しい小生の頭は行きつ戻りつ定まらない。私にとっては、中国の花、牡丹と、丸い大きな眼のパーマも知らないお下げ髪の中国少女を思い合せて、嘗ての大陸時代が鮮明に蘇り、感極めて深い。

兆代賀—正直言って浅学非才な私には難解句でして、すぐに句評を書く自信がありませんのでメモさしてもらいました。二回目が来るまでにじっくり考えさせてもらいます。

鬼焼—平凡に理解すればそのままの句に終ってしまうが、作者は「牡丹画く」の止五に何かを訴えようとしているのでは……新しい川柳、新しい言葉への挑戦を買う。

緑之助—牡丹を描いている作者の幻想、黒い瞳が鮮烈、そのイメージに躍動する絵筆と解したい。

寿馬—緑氏は黒い瞳がポイントのファンタジーと解き、鬼氏は牡丹を画く行動に何かの訴追を読みとろうとする。やはりこの句は黒と牡丹との関わり合いがテーマでしょう。がここは一つ乙女を真中に据えて見てはとも思います。大きな緋牡丹一輪を染めた、真黒のドレスを着けた少女が一人……これでは抒情に過ぎるでしょうか。

兆代賀—何べんも読み返して考えてみましたが、「黒い瞳の乙女」と「牡丹画く」の下五を結ぶ「近すき」の言葉が私には引っかかります。

鬼焼—問いにたいして答えのすぐ出る川柳ではものたりない。難解であるがゆえに、すばらしいともいえる。心から訴えてこそ川柳への発展とも言える。

緑之助—描写の適切が支え、一歩誤れば、「独り言」になる。巧みな抒情詩と思いたい。

おそろしや彼は教料書だけを読む

仁部四郎

寿馬—正におそろしや。彼には非ず、自らを振り返って。〝ばかり〟と言わず〝だけ〟とした所が一層に。が、直情にすぎる言葉〝おそろしや〟ではある。が又そこがおそろしい所かも。

兆代賀—いい成績をとっていい大学へ入ってエリートコースをいく。こんな彼を想像します。これは現代教育のひずみでもあり実におそろしいことです。「だけを」がよく効いています。

鬼焼—社会を真直ぐ素直に歩こうとする姿をうまくとらえた句。「教科書だけを読む」がこの句の命ともいえる

緑之助—教科書が問題になっている此の頃ガリ勉の揶揄か、イデオロギーか。下五のだけに価値がある。

寿蠢馬—四者同意見と思います。

兆代賀—私はこの句上五の「おそろしや」と教科書だけの「だけ」が句のポイントになっているのではないかと思います。教科書だけを読むとは融通の効かない彼と受け取っているのですが思い過しでしょうか。

鬼焼—「だけを読む」止五をピシリときめたことによってすばらしい作品になったと言える。

緑之助—上五が平凡のようで重い。

父の死に涙せぬ子に育てしや

稲葉冬葉

寿馬—前々句の作者と同姓なのはご家族なのでしょうか。同じ流れが感ぜられます。(間違いならばご容赦を)〝育てしや〟が牡丹の句と同様に落付かない私です。詰問ではなく、反省だと受取ってはいますが。一般に句には余韻があるのを可としますが、上五中七と鋭く言い切ったあとは思い切って下五もきっぱり止めを刺した方がと思いますが、如何でしょうか。

兆代賀—この句をよんで乾き切った人間砂漠を想像します。父と子の絆の温みを感じない子に誰が育てたのか？「育てしや」にいやと言うほど反省が感じられます。

鬼焼—思い切って句を詠むことはすばらしいことですが「育てしや」に難があるように思います。

緑之助—反省だと思うが焦点がしぼり切れない。力みすぎではないか？

寿馬—父の死の日に涙せぬ子が立っているその側にいる母親として……と素直に状景を思い浮べると、兆氏の女性。緑氏と鬼氏の男性としての評も又自然に思えます。この反省や悔恨に頷くと同時に、恐ろしい怒りをも感ぜられる。そしてそれが母親自身に対してでなく、父を代表とする社会に対してであるとしたら。飛躍かも知れませんが、案外この句のいのちはそんなところにあるんでは……。

兆代賀—私も寿馬さんのご意見に同感です。これは親としての反省でなく現代社会に対する訴えのような気がします。

鬼焼—この句の「や」は、おどろきを表わすことばではないでしょうか。「育てしや」に難があると申しましたが、私なりに反省いたします。

緑之助—父の死に平然たるは、のように見えたのは母親で、その取り乱し的な錯綜事情が、せきを切った、という下五のようだ。寿馬氏の対社会へのぶっつけも連動しそうである。

愛染帖

橘高薫風選

ロボットを責めれば笑う天の声　鳥取県　清水一保
大宇宙光らぬ星がきれいな夜
老父母のしわを受け継ぐ僕のしわ　青森市　工藤甲吉
原発は貧しい村へやってくる
太宰の忌ことしもやはり酔いつぶれ　笠岡市　木山遠二
八十越えて漸くわが名にも馴染む
陋屋で小庭の老樹見て暮らす　西宮市　林はつ絵
古傷のことタンポポに聞かせるな
独楽回れまわれば疵もうつくしい　島根県　小砂白汀
たとう紙の中で炎を噴く形見
白紙へ引かれ無限を秘める線　大阪市　小出智子
八月の暦にのこる胸騒ぎ
銭湯の鏡は見ないことにして　大阪市　白石潔
牧水よ夏は騒いで呑むものか
気がつけば旗を振るのは俺ひとり

食通で知られ試食をたのまれる　奈良市　森田カズエ
ようでけたお人と金を借りてから　島根県　堀江正朗
指先に夢と不安がいつもある
かたつむり僕の真似して曲り角　岡山県　白岩文衛
月見草見果てぬ夢が胸に棲む
改修の川の落武者月見草　和歌山市　西山幸
鏡よ鏡まあるい顔をしませんか
尼寺へ行けとは誰も言わないが　八尾市　高橋夕花
やがて九月減びの曲が満ちてくる
垣間見た本を買いたくなる九月　町田市　竹内紫錆
胸ぐらもつかめず国を相手とす
みな杭となる敬遠のフォアボール　名古屋市　藤井高子
咲く花にまた命日を教えられ
コメディアン顔中口にして哀れ　島根県　松本文子
夢捨てた女真紅な服を着る
美しい初恋だから実らない　富田林市　林澄子
白バラに好きと書いても散ってゆく　唐津市　浜本久仁於
離婚ざた女の尺で測られる　高知県　曽我部つぎお
望郷の大きな蜂の巣に出会い　伊丹市　樫谷寿馬

マイコンもいつかは泪するだろう　米子市　雑賀美世
病室のコロンに眠る千羽鶴　岡山県　稲岡正之
薄色の夢を濃くする旅に出る　富田林市　藤田泰子
シンデレラと月下美人に怖い朝　大阪市　津山刀水
子供が見てた小さなちいさな悪事　唐津市　久保正敏
指切りがはっきりしない宿酔　唐津市　筒井朴竜
広大な庭園スプリンクラー付き　吹田市　西川景子
夫婦だけの涙をためた小さな壺　今治市　矢野佳雲
ゆれながら達磨フィニッシュ考える　富田林市　岩田美代
才女かや美事な幕を下ろしてた　藤井寺市　赤木和子
ここからは他人小さな門を出る　松原市　佐藤藤子
小鳥の目今日の私が分るかい　米子市　八木千代
七夕だから人間だから恋を書く　岡山市　川端柳子
ろうたけて一輪が咲く狂い花　高知県　赤川菊野
愛憎の谷間で女枯れてゆく　大阪府　坂口公子
赤子ねてこの世の音が針になる

大阪市　西森花村
東条もそない言うてたホメイニさん
高知県　大西冬木
相槌の重さ煙草に火をつける
八尾市　松下蕉露
宿浴衣昔の妻がダブります
海南市　牛尾緑良
知性の差埋めるつもりのハイヒール
米子市　青戸田鶴
すばらしい自然の中で素直なり
和歌山市　北浜二郎
背を見せて前へ前へと父歩く
鳥取県　林露杖
思いっきり老いの口笛秋空に
熊本市　有働芳仙
故里を出たことがない白い杖
岡山県　池田半仙
松枯れの山にも小さい松が生え
西宮市　奥田光子
恋心合わせ鏡に似てかなし
寝屋川市　平松かすみ
姑が居るおかげで若い奥様よ
島根県　堀江芳子
雨ぱらりぱらり心の清めとも
唐津市　新岡回夫子
逢うてみて声は若いが年を知る
唐津市　木塚素石
鈴木さん一人歩きをすすめられ
兵庫県　遠山可住
暑中見舞余白に暑い陽が溜まり
大阪市　神夏磯道子

夜逃げした話面白がって聞く
鳥取県　河村日満
恐山四五人連れで出るジョーク
和泉市　岡井やすお
海はまだ大魚夜市だけ戻る
守口市　羽原静歩
尻餅をついても青春のジャンプする
笠岡市　高木桃里
打水へ蜘蛛がゆっくり降りて来る
米子市　野坂なみ
早咲きの花遅咲きの花子に供え
米子市　桑原伊都
開山の歴史樹齢の中に棲む
今治市　月原宵明
雨けむる赤いポストに思慕しきり
高槻市　田崎あき子
落人と生きた田圃へ菖蒲園
唐津市　筒井朴竜
切木牡丹匂い名残るも松浦の徒
旭川市　朝倉大柏
神の掌を洩れたと思う失意の日
唐津市　岩崎実
礼状を先方様に先越され
大阪市　江城修史
いつの日か渡り切らねば虹の橋
唐津市　田口虹汀
紫陽花の会釈が楽し風の午後
唐津市　仁部四郎
お互いに人並みの知恵引出物
島根県　木村はじめ
銀行が意外な人に愛想よし

唐津市　浜本千代
淋しい日明るい嫁を訪ねて見
羽曳野市　麻野幽玄
オーイと呼べば嫁返事して妻が来る
和歌山市　松原寿子
竹の先から銀河へ飛ばすラブレター
和歌山市　浦野和子
幽明の境を卍に翔ぶ蛍
米子市　林瑞枝
ぬるま湯の心貧しい言葉吐く
東大阪市　竹中綾珠
友達も国際的の貿易部
富田林市　田形美緒
右左あなた委せのラッシュ時
羽曳野市　吉川寿美
何時の日か親を置いてく子を膝に
今治市　越智一水
腹の立つとき落ちつけと庭の石
尾鷲市　渡辺伊津志
波の秀は愁いの如く照って消え
堺市　久井富子
美僧をえらびおんなの朱印帳
堺市　大道美乙女
これ以上すがるすべなき百度石
岸和田市　古野ひで
小さい旗それでもいいの友と振る
東大阪市　三宅旭
綱引きでなくて足引き合う諸公
倉吉市　奥谷弘朗
受け売りの知恵をわざわざ来て喋り
今治市　蔦本昌道

商い不振チャイムが重くのしかかり　米子市　石垣花子

背負篭前衛花道に狩り出され　豊中市　満仲きく子

坊やもう眠っちまったねむの花　守口市　長谷川司

竹生島入道雲を傘にして　寝屋川市　堀江光子

誘蛾灯解けぬ迷いのごとく舞う　大阪市　川口弘生

世が世ならエリート社員の九軍神　倉敷市　藤井春日

手切金子どものことなど考えず　米子市　田中亜弥

腕白の声太陽をつきぬける　兵庫県　奥野テル

朝の露私の欲しいネックレス　宝塚市　吉田笑女

餅肌の初めてふれた孫の肌　今治市　八塚三五島

着流しで同級会に来る大尽　岡山市　原田凡太郎

捨てにきた思慕へ川面の灯が揺らぎ　浜田市　中川幸一

本心を言えば泣くのに聴きたがる　兵庫県　森脇和子

心経の音色が変わる朝の雨　羽咋市　三宅ろ亭

宇寅時代に針の穴から天覗く　河内長野市　井上喜酔

満腹の欠伸は野心捨てている　西宮市　津山冬子

雨の駅温さ伝わる妻の顔　島根県　榊原秀子

落日壮厳倖せな人いくら住む　水戸市　上鈴木春枝

三度した会釈でやっと気が付かれ　京都市　松川杜的

ボケの本読む程ボケになりそうで　奈良県　宮川古都路

ライバルが来ぬので意識燃えて来ず　平田市　久家代仕男

背水の陣を裏切る蟻も居て　岡山県　松本元江

噂通りにちょっと歩いてみたくなり　京都市　都倉求芽

姥捨山でさえも自分で登らねばならぬ　岡山市　井上柳五郎

冬至南瓜継ぐ嫁がおり座をゆずり　寝屋川市　宮尾あいき

待ちがびてあせたあじさい雨しとど　和歌山市　若宮武雄

黒枠で笑ってやがるバカ野郎　大阪市　松尾柳右子

あじさいの衣替えにも雨恋し　高知市　北川竹萌

同じこと繰返すようで日々新た　鳥取市　若林一止

かずら橋スカート狙う風も巻き　西宮市　朝山千世子

やればやれると年齢忘れとく　東大阪市　米田喜一郎

鱧を焼く市場の香り宵祭り　米子市　政岡日枝子

花活けて上司と火花散らす気か　京都市　山本規不風

香港の夜店幼いスリ逃がす　島根県　西村早苗

この辺で許そうとしてる父の眼が　鳴門市　八木芳水

何気ない素振り聞き出す父の妙　寝屋川市　柴田英壬子

優しさがだんだんうすれている欠伸　柳川市　神崎紫泉

ポーズとるみやまきりしま従えて

★

投句先　〒560豊中市中桜塚3—13—15
橘高薫風宛（ハガキに三句宛）

NHK川柳募集

課題　「新聞」　選者　**橘高薫風**

締切　**9月10日**
（ハガキに三句以内）

投句先　大阪市東区馬場町3—43NHK
大阪放送局"老後をたのしく"係

発表　9月26日（日）ラジオ第一放送
午前10時から

秀句鑑賞

—水煙抄—

—前月号から—

背のびしたふくらはぎにある痛み　松本はるみ

女のチャームポイントにふくらはぎがある。それに魅された久米仙人は神通力を失い墜落した。後世男どもはその美を鑑賞するためハイヒール、トウシューズを考案したが、美しくありたい女心は、男の目を楽しませるために今日もふくらはぎの痛みに耐えねばならぬのだ、と女の目で女を批判している。

城あけた男にしみるわらべうた　紀市　郁栄

志成らず一敗地にまみれた男に降るは楚歌、こんなとき追い打ちをかけるように霖雨さえ続くのである。故里が山が川が無性に恋しい。

ヤドカリの身で海鳴りへ落ちつけず　矢野　佳雲

現在職安へ通う身である。干潮満潮、海鳴りとチャンスは種々去来するが、気ばかり焦って如何とも無すすべなきヤドカリの悲哀。

すぐ騒ぐ血をもて余す片えくぼ　市川　鱗魚

生来好人、熱し易く、おだてに乗り易い。後ではしまったと思うが、その時はつい笑顔になってしまう。日本人の見本のような人物像を描いて鋭い。

一本の針で幸せ縫いあげる　藤原　鈴江

着物はすべて直線で構成されているが、着た時はあらゆる線を表現する。そのきものをこれまた一本の直線「針」で完成させる。この針は偉大な意志を持った芸術家である。句主もきっと幸せを縫いあげる針であろう。

喋るのが苦手で微笑を使いわけ　山田喜代子

無口な人は兎角短気だと言われるが、己の弱点をカバーするにはこの手しか無いかもしれぬ。しかもそれが使いわけられるようになれば達人であろう。

水すまし吾が身の波紋ぬけられず　円増　貞子

いったん嫁して子を成した女には、どう蹠いても、その磁場から抜け出す事はできない。たとえ近頃はやりの離婚、再婚をくり返しても、もとの白紙とはいかぬ女の性の哀しさ。

信用が無い古時計にある安堵　佐藤　藤子

句風はやや古いが我々にはジーンとくる句である。良き後継者を得てる身が何かと口出しをすれば、若い世代にはトンチンカンな点鐘と取られがちであるが、子を思う親ごころ危なくて見ておれぬ場面にたびたび遭遇するのだが、任せなさい。子は逞しく成長した。

交通指導すれば渋滞してしまい　高野　宵草

役所の窓口には大体こんな指導係がいて庶民を悩ますのである。が、世の中すべて規則規則と振り回すと、至るところで渋滞を起して規則のために世の中が窒息しかねない。こんな事態にした当局はどうだ、と鋭い。

千羽鶴納めて指の白さかな　吉永伊三郎

長期看病の甲斐もなく亡くなられた大切な人（指の白さからすると夫）の棺に納められた千羽鶴の涙、おそらく近親の方の不幸を句に托されたであろう悲しみに胸が痛む。

強がりの仮面とりたい春の宵　森脇　和子

人間いかに頑固に見えても、一徹な人ほど内面は孤独で淋しがり屋である。ただ日常弱味を見せまいとしているだけかも知れない。春の宵という特殊な雰囲気をかりて思いきりくつろぎなさいよ。

逢いたくて下書きのない手紙書く　角野かず子

女ごころの切なさ、もう飾ってなど居られない。またその要もない相手である。

コーヒーに身を持ち崩す角砂糖　越村　枯梢

正反対のものに魅かれる人間心理。

想い出が流れるガラス窓の雨　工藤　蕗子

雨に誘われた青春へのノスタルジア。

■同人特集／私の古典鑑賞

『柳多留』この一句

（到着順）

川口弘生

なにさもうかくさん事と医者ハ云ひ

（前句　それ〳〵なこと〳〵）

岩波版誹風柳多留拾遺輪講において、吉田精一氏は、かくす事を、恋わずらい、妊娠、毒断をせず病気のぶり返し、あるいは梅毒と礎解しておられる。女を診たら妊娠を疑えとまで教えられ、また頻度の多いものを先ず疑う医者の性癖から考えると、妊娠のチャンスの有無、有ればその月日を知りたくていっしんに問いつめているのであろう。しかし診てもらっている方は、有れば相手の有る事で、その時の状景も浮んで来よう。又これと明らかにした後のいろいろな影響や、周囲の人の立場も考えねばならず、それこそそれぞれな事情のある事で、江戸時代の娘さんならずとも、はきはきとした返答のし難いケースが多い。職業的な医者の感覚と患者の情緒の醸し出す不調和を衝くこの句に教わる所は多い。

金井文秋

これ小判たった一ト晩居てくれろ柳樽初

ピエロの笑い

小判一枚がどれ程の価値があったのだろうか、現代と比べてあまりにも低かった当時の所得から考えて、今の数万円を儲けるよりも得難い金額であったと思われる。たとえ入ったとしても、右から左と掛取りにもっていかれる。支払いを済ませたあとに、せめて小判一枚ぐらいは残る程の余裕が持てたらなあと思うのは痛切な願いであったに違いない。

この句の持っている哀愁は現代にも生きている。手形を追う人、ローンに追われている人、サラ金に苦しむ人など、決して他人ごとは思えないだろう。この句のおかし味は擬人法で成功している。むかし豆秋さんが、川柳の笑いはピエロの笑いですよと言われた。おかしさの中に哀愁を秘めている意味だとすぐにわかった。これから考えると、この句は一級品である。

野村太茂津

うたた寝の書物ハ風がくって居る

夏の縁側の情景描写。明和五年とあるから今から約二百二十年程前の作品である。

「うたた寝」を見ている作者とも受けとれるし、また「うたた寝」からふっと目覚めた作者本人の呟きかも知れない。

柳多留には人情の機微、お上に対する反撥や、世態を風刺し、奇抜な着想とユーモアを主体とした江戸庶民の言葉で盛られている。

当時の風俗・習慣や出来事を踏まえねば現代人には解らない句が多い。

ところが、この句は今読んでも、ほほえましい情景が浮かび、庭の植え込みから吹く風の色まで見えてくる。難かしい言葉を用いず

表現されていて私の好きな一句である。

この間どこかの句会で出会ったような気がするほど親しみが湧いて、作者に「結構なご身分ですネ、羨ましいネエ風邪ひきますよ」と話しかけてみたくなってくる。

工藤甲吉

南無女房乳をのませに化けて来い

この句は川柳を始めた頃、川柳忌の柳話などで師の故・小林不浪人から耳にタコがよるほど聞かされた教々の中の一句である。

乳呑子を残されて女房に死なれた亭主の苦悩。それをかくも単純明快に詠んだ手並にはただただ感嘆あるのみだ。今更ながら川柳というものの〝恐ろしさ〟さえ覚えるのである。

このように直截で単純で明快な句は、人にも受け入れられ易いし、膾炙もされ、それが又、川柳への理解を深め、川柳の普及と社会進出にも一番役立つのではないだろうか。

それにしても、愛する者に死なれた者が死んだ者にたいし、化けれるものなら化けて来てくれというのは、およそ人間たるものの心性である。

その点で、この句は、今も生きてるし、これからも又いつまでも生き続けるにちがいない。

香川酔々

留女片袖もってわびて居る（柳多留三篇）

宿場宿場の宿屋の前には、必ず宿引きの女が居る。時代劇では、おなじみの風景である。現代でいえば、場末の暴力バーの女も顔負けの腕力で客を引っ張ったようである。

もみあっているうちに、旅人の片袖をちぎってしまった。

さあ、旅人は「我慢できねえ、どうしてくれる」とつめよる。「サービスしますからごめんなさい」ということになるのであろう。

柳多留拾遺には、次のような句もある。

とめ女おとりのやうに出して置き

とめ女十六町のそんをさせ

とめ女もめん〳〵のわかれなり

一句目は、ご経験の方もおありかな？　二句目は、引き止められて、歩けば十六町くらいは行けたのにと考えられる。三句目は、吉原の妓は絹物を着ているから、朝の別れは、「きぬぎぬの別れ」になるのだが、宿場の留女は、木綿づくめだから、一夜の行きずりの別れは、「もめんもめんの別れ」とシャレたのである。

竹内紫錆

碁敵は憎さも憎しなつかしさ

何の説明もいらぬ句。そして、今日、盛況をきわめる室内・野外競技の原点を衝いた句である。実は私も勝負事の好きな方で、囲碁将棋には凝った時期がある。

終戦後、文芸には全く無関心だったころ、病院で療友から古川柳集を見せられた。そのとき「女の百態」を知って啓蒙させられたものだが、一番面白かったのはむしろ、強い実感あった盤面盤外の描写句であった。今日、集団競技に溶けこんで熱狂の情にかられる人は多いが、その根源をさぐれば「碁敵は……」

岡井やすお氏（和泉市）より
句集「古稀」出版記念として
金一封
ご寄贈いただきました
川柳塔社

の句のような、好敵手に対する思いから発展したものではなかろうか。

私は、川柳を知ってから、石や駒しか知らぬ文盲（詩痴？）を脱したわけなのだが、逆に、人に川柳を勧めるには、その人の趣味ごころをゆさぶる古句を見せるとよいかも知れない。

本田恵二朗

折ふしはつんとするのも道具也

寛政九年に出版された「誹風柳多留拾遺」の中の一句である。宝暦の頃に生れた句であるが、生みの親は誰れだかいまだにわからぬままである。類題別では「恋」の部にのせられているから句意は川柳人ならずともすぐに解るであろう。私がなぜこの句をとらえたかというと、恋という文字がどこにもないところに先ずは惚れたのである。つんとしたのは男性の方か女性の方かも考えてみねばなるまいが、この句の場合は女性に決っている。

そこで昔も現代も恋の心理は変らないなと思えて、ふと微苦笑が湧いたが、ちょっと待てよと、も一人の私が「まった」をかけるのである。現代の恋の形態は、この句の男性と女性とをあべこべに置いた方が当っているのかも知れぬぞと思えて来たのである。さておたちあい、如何でござるかな——。

板尾岳人

柳多留は今から二〇〇年前に刊行された句集で「句意のわかり安きを挙て一帖となしぬ」ということが謳われている。これが発刊の趣旨である。庶民の声として、多くが個人的に署名されていなかったことを麻生路郎は落首などと全く等しいものであったと言い、「皮肉」「冷評」「漫罵」であるかも知れぬが、それが直接目的でないと語っている。

優曇花（ウドンゲ）を小麦の花と覚てゐ

小麦の花としたのは、小麦から、うどん粉が作られるので、発音に近いところから、優曇花もそれに似た花かと、ひとりぎめにしているというのであろう。優曇花はカビに似たもので、草かげろう、という昆虫の卵であり昔は実体がわからず、花の一種としていた。

生活基盤の中から巧まずに生れた味わいのある作品で、言葉には思考の深さがあり、作者の心情が詠出され、視角の独自性を物語っていて奇妙な感動をはらんでいる。

文化祭参加

第32回岸和田市民川柳大会

日時 昭和57年10月10日(日)12時30分

会場 岸和田市民会館地下会議室

柳話 中島生々庵

兼題
「他人」 西田柳宏子選
「旅」 梶川雄次郎選
「スランプ」 中尾藻介選
「動く」 橘高薫風選
「主義」 榎本聡夢選
「選ぶ」 西尾栞選

席題 当日二題
選者／野村太茂津・辻世界人
各題2句、締切14時（出句は出席者に限る）

賞 市長賞、議長賞、教育委員会賞
文化協会長賞、操子賞、秀句賞

会費 五百円（発表誌呈）

主催 岸和田川柳会

■お問合せは
〒596岸和田市土生町一九八九—八
高橋操子内
岸和田川柳会

清水白柳 句碑建立

除幕式と記念句会

日　時　昭和57年9月26日(日) 午前11時

場　所　阿部野神社境内

大阪市阿倍野区北畠3丁目7－20
電話（06）661－6243

菊活けてひととき欲を忘れたり　白柳

記念句会

日時　昭和57年9月26日(日)午後1時

場所　阿部野神社　北畠殿
大阪市阿倍野区北畠3丁目7－20

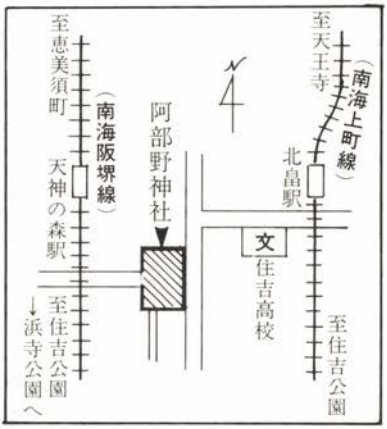
祝辞　中島生々庵

兼題
「菊」　八木　千代選
「職人」　定金　冬二選
「雑草」　山内　静水選
「先祖」　森中恵美子選
「板」　中尾　藻介選
「仁王」　西尾　栞選

席題　二題(橘高薫風・岩本雀踊子)
各題二句(投句拝辞)

会費　一千円(記念品・句会報贈呈)

懇親宴　三千円(同会場にて)



〈会場見取図〉
- 南海阪堺線・天神の森駅から徒歩5分
- 南海上町線・北畠駅から徒歩10分

主催　清水白柳句碑建立実行委員会
後援　川柳塔社

第六回 全日本川柳大会参加と十日の旅 (二)

西尾　栞

六月十三日午前八時に目が覚めて、ホテルのバスを浴びると、旅心地がよみ返った。朝食は街の喫茶店でかるく摂ることにして、ホテルを出た。賑やかな通りを歩いたが仲々軽食喫茶が見つからない。ものの二〇〇米も歩くと狭い間口の二階の喫茶店が見つかった。ウインドにモーニングサービスと書いて、例のトーストとコーヒー茶碗が並べてあった。狭い階段を二階へ上ると、客は誰も居ない。適当なところへ腰を下ろしてモーニングサービスを注文をすると、今日は日曜日でモーニングサービスはしていないと言う。じゃ、致し方がないから、バタートーストとコーヒーを注文する。間もなく階段を上ってくる靴音がして、鼠色のベレー帽が汚れて黒くなった男が顔を出した。見れば横浜の大熊吉三さんである。「お早よう」「おはよう」を交すと、彼は腰を下ろすなり、モーニングサービスを注文した。そして彼も亦私同様、断られた。

注文の品を待っている間に彼は突然、僕に近ずいて、「栞さん、あんたが恐山行きの主催者だってね、是非僕も連れて行って下さいよ、日満さんにきいたんだよ、日満さんも行くらしいね」と言うたのには驚いた。昨日ホテルのロビーで日満氏に遭った時、十四日以後のスケジュールを話し合って、僕は恐山へ行く話をした。既にタクシー代も入れたクーポンを持っていることを話すと、じゃそのタクシーに便乗させてくれとのことだったので快諾したまでのことで、恐山行の主催者でも何でもないので大笑いした。そして私等二人に日満、吉三の両氏と四人で一緒することを約した。

朝食をすませて、本日の大会会場青森県農業会館へとブラブラと歩いた。僕等が歩く前後には、昨日から泊っていた柳人、今朝青森駅へ着いたらしい柳人が三々五々と歩いていた。

会場はエレベーターで六階に上る。十時半より別室で総会が開かれた。私は会計の決算、予算の報告をして無事にすんだ。開会までの時間を昼食を摂るべく外に出た。どこか、青森独特のものを食べさすとこがないかと右左を眺めて辻を曲ると、甲吉さんにバッタリ出遭った。昼食のことをいうと、さて青森独特のものとてと言うて、甲吉さんのお馴染みというすし徳の暖簾をくぐった。ここでビール二本とホヤと帆立貝の寿司をつまんで昼食に

題別句集

東　照

頒価千六百円（送料共）

送金先　振替口座大阪六―七〇七五
番傘紅白川柳会　**岸田万彩郎**
〒565　吹田市古江台三―一五―三

した。青森はホヤと帆立貝がどうやら名物らしい。

会場へ戻ると十三時三十分の開会に間に合った。司会は、大手門歯科院長の波多野祥二氏（五楽庵）であった。胸のL字のバッジでライオンマン（332地区、元ガバナー名誉顧問）と知って固い握手を交した。開会の辞は大会委員長中林瞭象氏であった。大会を前に去る五月八日、柳人後藤蝶五郎氏の子息柳充さんが、今日の日を待ちに待って、準備に懸命であったが突如として急逝された哀しい報告をされて一同粛然として黙禱を捧げた。次に日川協理事長藤島茶六氏の挨拶、教育長、市長の祝辞、祝電と型の如くセレモニーがつづいて、清興の津軽三味線に津軽民謡、紅い着物の少女の踊り曲弾きと遠来の客をもてなすのに主催者の御苦心の程が察せられる出来栄えで拍手、拍手のどよめきであった。

間もなく、本日の参加者は三〇一名であるが一つの欠番があったので、丁度三〇〇名であることを司会者から告げられて、愈〻集句一題一四〇〇句入選八〇句という第一部入選句発表の幕がきって落とされた。トップの選者は「北」の題で展望の時実新子、邪馬台国の卑弥呼のようなスタイルで登壇、日川協大会初めての女性選者の和やかな笑顔に万雷の拍手がつづいた。はじめ新子さんの姿が見えなかったので、主催者はあわてていたが、プロペラ機でやっと到着したので一同愁眉を開いた。女性のあとの男性選者は影がうすい。しかも文部大臣奨励賞が新子選の

花吹雪かえらぬ島が北にある

が決定して、新子のよろこぶことよろこぶこと。

「時事雑詠」「手紙」「母」「こけし」「笑う」と入選発表が続けられてゆくうちに、呼名は青森の〇〇、岩手の〇〇〇、函館の〇〇と、地名と柳名を並称される賑やかさであった。圧倒的に青森の〇〇が多かった。それは参加者に地元の柳人が多く、優秀作家揃いでもあり、熱の入れようも違っていた成果の外ならないものである。口の悪いのが「国体みたい」と言うたのはひがみであろう。西塚春魚氏の閉会の辞は、こんな最果ての地で、こんなに沢山の参加者を得たことは終生忘れることが出来ないと喜ばれ、来年の六月は伊豆の下田で逢いましょうと結ばれた。

最後は蛍の光の大合唱で感激の坩堝と化して会場を去りやらぬ思いであった。瞭象氏にお疲れを謝して手を握り返すと、瞼の奥にキラリと光るものがあった。

（つづく）

若本多久志氏急逝

本社副理事長の若本多久志氏は八月十六日、香雪病院で死去された。告別式は十八日午後一時から西宮市本町の正念寺で営まれ、本社から中島生々庵主幹、西尾栞副主幹はじめ多数の同人誌友が参列、冥福をお祈りした。

週　末

文川野生選

週末に安心しきった酒に酔い　水煙
週末の客で献立空回り　多賀子
週末のチラシ商魂のせてくる　悠泉
週末の列車網棚から詰まり　明水
週末が来れば調子の出る男　本蔭棒
週末を座禅で過す倦怠期　志保
週末になると時計が走りだす　道子
週末へ期せず悪友気が揃い　可住
週末に帰る夫の荷がはじけ　木魚
週末にやっと自己流花を活け　博友
週末をさけてよかった湯に浸る　柳子
週末はゴルフときめたウサギ小屋　重人
週末になれば化粧が濃くなる　美恵
週末をカラ出張の湯にひたり　久仁於
明日休み疲れた腰に言い聴かせ　昭治
初恋が週末に行く道路地図　浪速子
週末が宙に浮いてるマイホーム　文子
週末は調子作りの早帰り　やすお
週末のプラン狂わす夏期手当　軒太楼
着物から決めて週末誘い合う　実
週末の財布へチラシの果し状　四郎
週末のデートは月曜病など知らぬ　枯梢
週末は帰る実家が近すぎる　保夫
週末の気分計報持ってゆく　つぎお
半どんの言葉忘れた人ばかり　有人
週末の伝言板が小さすぎ　悟郎
週末のゆとりを持ってる女　与呂志
週末の午後を待ってる赤い靴　文子
金のない週末なんて莫迦みたい　凡太郎
週末が来ても世間が広がらず　三五島
中流意識週末に行くレストラン　和子
週末が伝言板におどってる　大柏
佳

週末の構図は地図の上に書く　はつ絵
顔役は週末毎に駆りだされ　豊
週末は妻のリズムに合わされる　泰子
週末を幸せの助手席にいる　富子
恋拾いウイークエンドで捨てた恋　甲子郎
人

週末の小窓雀に覗かせぬ　ゆう也
地

週末もポケットベルを持たされる　素身郎
天

週末のとまり木にある酔い心地　公一
週末の帰りを待っている花火　軸

ボタン

土岐トク子選

ボタン付け寮母は嫌な顔もせず　木魚
お仏間に七つボタンの子の遺影　代仕男
ボタン一個つけ間違えて首になり　七面山
デザイナーボタンひとつに気をつかい　静子
不器用にやもめがボタンつけている　千世子
ちぐはぐでもボタンかけ出来て子の笑顔　美穂
神ならぬ身の愚かさが押すボタン　本蔭棒
ボタン付け母はかすかに咳をする　静歩
七つボタン心に点る忠魂碑　胡頽子
内職のやつれボタンの穴かがる　宵明
つけ忘れボタンのことで朝がもめ　冬子
付け終えたボタンに母の糸切歯　実
切れかけたボタンにも似る老いの日々　浜本千代
とれかけたボタンきっかけだった恋　文子
ボタンのとれた仕事着でよく稼ぎ　素身郎
ちぐはぐにボタンを掛けて老いた父　右近
パジャマのボタンかけ終えましたハイポーズ　秀子
暑がりもボタン外せぬ席がある　いつを
ボタンつけさせながら聞く妻の愚痴　圭介
リハビリにボタンをひとつひとつ嵌め　倫子
取れていたボタンが付いている疑惑　泰子
雨上り色あでやかなボタン寺　志保
母だけの息子であった金ボタン　景子
哀愁の彼方七つの金ボタン　富子
着古したボタンのつぶやき聞いてやる　はじめ
制服のボタン暑さへ妥協せず　道子
リハビリに今日もボタンにはげまされ　裕
Tシャツは七つボタンなど知らず　満津子
ボタン付けぐらい女房の手を借りず　弘郎
OLの噂を蒔いたボタン付け　春日
ボタンかけちがえ夫婦の長い旅　柳子
秋風にボタンのないのが気にかかり　水煙
いろいろのボタンで父の作業服　可住

プロポーズうながすボタン胸で揺れ　軒太楼
ボタン一つ現場にあった捜査の眼　松太郎
今日も又ボタンちぎれて子が育ち　どんたく
金ボタン学生服にある誇り　ひで
佳
落ちていたボタン刑事の眼がひかり　婦美子
このボタン押せば地球が死ぬだろう　与呂志
金借りに来て押すベルが派手に鳴り　凡太郎
ちぎれたボタンかぎっ子悲しく母を待つ　日枝子
朝湯満ち溢れて旅装解くボタン　芳子
人
未来図を話すボタンが見当らぬ　文平
地
核ボタン悪魔のささやき聞いている　重人
天
我が家では飾りボタンの位置にいる　幸一
軸
ボタンホールリボン通してママアリガトウ

窓

笠原吸江選

わだかまり取れた窓から朝陽さす　道子
学校の窓から理想ばかり見る　はつ絵
信じても心の窓は閉めておく　義美
仕合せのしのび寄る窓なら開ける　枯梢
別れ来しその夜の風が窓叩く　春日
あの窓ももう起きている葱きざむ　きく子
窓だけの世界へ千羽鶴が翔び　文平
どの窓も倖せそうな灯がともり　虹汀
ハンケチを結んで待ってる窓もある　正敏
先生はアクビを窓へ捨てに立ち　悠泉
迷い鳥窓のぬくみに飛んでくる　芳子
ときめきを窓へ残したシルエット　昌道
鈍行の車窓でまるい風にあう　重人
帰宅して怒ったように窓を開け　大柏
窓際にいても打算は捨てていず　軒太楼
同じ窓個性がのぞく暮し向き　志保
窓際へ来てから社内よく見える　やすお
受験子のライバルの灯に励まされ　武水
カーテンは人間模様の団地窓　泰子
窓一つ私の心を知っている　与呂志
開け放す窓に秘密のない暮し　圭介
窓明り今日も戦争始まるか　蕉露
逢観をすれば陽も照る窓のきわ　どんたく
俄雨窓から窓へ声を掛け　和子
来年は俺があそこへ座る窓　木魚
車中では故郷の見える方に座し　弘朗
快復の子に朝の窓少し開け　久仁於
掌を合わす十指に心の窓開く　多賀子
いい夢の余韻で朝の窓をあけ　婦美子
窓框の四季にベッドの詩が積もり　可住
寡婦ひとり暮しを見せぬ窓を閉め　宵明
遠い人いよいよ遠く雨の窓　凡太郎
幸福が逃げそう二人の窓を閉め　柳子
窓開けて手話を弾ますひとができ　胡頽子
点滴の追加へ窓が白みかけ　カズエ
佳
窓ガラス拭いて心のしみも拭き　秀子
幸せは小さな窓から這入れない　満津子
産院の窓あたたかい雪が降る　はじめ
窓々に老いと若さの色がある　民之助
幸福の吐息がもれる窓の彩　美恵
人
病窓が四季の景色を額にする　あき子
地
頬杖が窓うつ雨の愚痴をきく　ゆう也
天
裏窓を開けると人間臭くなる　三吉
軸
窓際で沈思黙考五十肩

初歩教室

題 ― 折れる ―

本田恵二朗

子に折れる親をいとしとふと思う　芳水

親と子の世代の差を精神的にも肉体的にも感じる年齢になると、この句に共感をおぼえるようになる。一沫の寂しさがしのび寄る。

どの枝も自由が好きで折れ曲る　美智子

それぞれに育った子たちの姿である。ここでも世代の差を感じないではいられない。それぞれの個性が自由に伸び、折れ、曲るのをコントロールする自信も力もない現代の親の姿でもあろう

折れる気で来たに番犬やけに吠え　軒太楼

「水引をかけて来たのに吠えつかれ」という句に出会って微苦笑したことがあるが、それと同様の微苦笑をこの句にも感じた。

屈折の光に別のあなた見る　紀久子

折りたたむ傘のしずくに棲む余韻　寿子

素晴しい進境振りに目を見張る。句材の見つけ方、とらえ方がうまくなった。独りよがりの句に落ち込まないよう自戒しながら進んで欲しい。故路郎師のおっしゃった「一句を残せ」を目指したいものだ。精進あれ――。

骨折れる仕事峠を越したお茶　民之助
（骨折りの峠を越したお茶の味）
野の花は手折れとばかり競い咲く　同
（野の花は手折って欲しい顔で咲く）
折れること知ってる奴のこわさ知る　達一郎
（折れるチャンスみごとにつかむから怖い）
折れること知らぬ男にあるもろさ　同
折られてもなお老樹の意地で咲く　房子
（老梅の意地折られても折られても）
ひれ伏した姿に叱言の腰折れる　ふみ
（反省の涙へ叱言の腰が折れ）
煩悩へ打って空しき釘の折れ　寿美
（煩悩に打つ釘むなし折れ曲り）
折れるほどたわわになりしつるし柿　二郎
（枝たわわ枝折れそうに折れそうに）
内輪もめ妻はとにかく折れておく　美智子
（内輪もめ妻が上手に折れている）
猛反対しても結局親が折れ　千代
折れるだけ折れて心は別に持ち　同
（折れるだけ折れたと見せる下心）
先輩は折れるチャンスをよく捕え　芳水
（折れるチャンスさすが先輩見逃さず）
お互が少し折れれば済んだこと　軒太楼
（お互にちょっぴり折れたら済んだこと）
四分六でどうかと一応折れてみせ　同
八重に折る膝当選までと耐え　柳五郎
（八重に折る膝当確まで当確まで）
強情と頑固が折れ合い笑い合い　同
ミシン針折れたところで昼にする　古都路
恐妻家気折れの出来ぬ痩我慢　同

昭和57年度大阪文化祭
第34回 川柳大会

日時　昭和57年11月20日（土）
11時開場、午後1時締切・開会

会場　中央公会堂中集会室
地下鉄「淀屋橋」中之島公園内

兼題　「声」　谷口光穂選
「城」　片岡つとむ選
「神様」　西尾栞選
「枷（かせ）」　高橋古啓選
「時事雑詠」　久保喜義選
「燃える」　荻田千代三選

席題　当日一題

賞　各題二句、出句は出席者に限る
府知事、大阪市長、府・市教育委員長から「川柳賞」。選者から「選者賞」贈呈

会費　五百円（発表誌代を含む）

（今日もまた気骨折り折り恐妻家）
損得は別孫には折れる父が好き　刀　水
（無条件で孫には折れる老父が好き）
ライバルの主張へし折る語を探す　同
折れること知らぬレーガン押してくる　みつる
怒らせぬ程度で折れて丸く行き　同
（怒らせぬ程度に折れてことが済み）
意地っ張り折れる汐時見失い　元　江
汐時を見て折れている苦労人　同
（汐時にニッコリ折れて苦労人）
矢印のとおりに折れて無事に昏れ　凡太郎
折れることを知らぬ男の袖を引き　同
（折れるすべ知らぬ男の袖を引き）
折れるのはいつも亭主という世相　勝　美
折れ合うてシャンシャンと手打式　同
（シャンシャンシャンと折れ合うたらしい音）
立話なんの噂か指を折り　兼治郎
強情も孫の顔には勝てず折れ　同
（片言の孫に強情へし折られ）
妥協はしたが反骨は折ってない　三五島
折れ釘で道の順序を書いてくれ　同
（折れ釘で道順画いて教えられ）
折鶴は上手のやんちゃな我鬼大将　柳右子
（我鬼大将案外上手に鶴を折り）
あの人が折れて寄り合い丸くなり　同
（A君が折れてグループ円くなり）
折りたくもなるような小枝の咲きっぷり　山　九
（折りたくもなるほど粋に咲いて見せ）
折られても尚且つ新芽の底力　同
（折られても新芽は強し陽に向う）
急ぐとき針まで折れるなさけなさ　千　子
我を折った姑の手を引いて差し上げる　同
（我を折った姑の手となり足となる）
折れるには条件があると親の意地　貞　子
結局は親が折れてる話会い　同
（話合いとどのつまりは親が折れ）
この場では折れてエリートに花持たす　保　夫
もう定年思いなおしてまた折れる　同
（定年近し折れておき折れておき）
電卓に速算自慢の鼻が折れ　一　止
ヘボ将棋相手負けるに骨が折れ　同
（ヘボ将棋負けてやるのに骨が折れ）
受け流し柳の枝を真似てみる　昭　治
（受け流し柳の枝は折れません）
至らないからよと妻がいつも折れ　同
折り込みの裏が白ならメモにする　忠　広
折れ方の上手な嫁で波立たず　同
（折れっぷり美事な嫁です平和です）
度忘れが乗った話の腰を折り　胡頼子
あっさりと折れて人柄見直され　同
（笑み添えて折れる人柄見直され）
この辺で折れとく我身可愛さに　紀久子
折り込みにまた計られたショッピング　同
定年のいつか世間に折れている　幸　子
気遣って生きる生活に芯が折れ　同
（気遣いのあけくれ芯が折れそうな）
突張られ親の方から折れて出る　無　名
孫の顔見れば親爺も折れてくる　同
折れる気はあり正論は吐いておく　武　水
折れる気が見えず仲裁あせり出し　同
やんわりと折れて女を失わず　寿　子
逢えぬまま折れた矢羽子にたまる思慕　同
折鶴に最後の願いかける指　三千代
七重にも八重にも折れる親の膝　同
骨折れる割に合わない手内職　利　美
座布団を二つに折って念を押し　同

題―**隠す**―**9月20日締切**（11月号発表）
宛先　岡山県倉敷市下津井一―九―三四
〒七一一　**本田恵二朗**（ハガキに5句まで）

◇

川柳塔社常任理事会（8月2日）

出席者＝栞・薫風・水客・紫香・潮花・太茂津・吸江・与呂志・鬼遊・天笑・柳宏子・史好

〈議事並びに報告事項〉

★57年度同人総会並びに二賞発表句会の会場が阪南荘に決り、式次第、選者を協議決定する。（詳細は表紙裏に発表）諸先輩、病臥中のため今年は若手が中心になる。

★川柳しんぐう吟社創立十周年記念・県下川柳大会が九月19日白浜で行われ、本社からも全面協力することを了承（太茂津氏報告）。

（史好記）

■**9月**の常任理事会は**1日**（水）

柳界展望

（原稿締切毎月末）

集録・香川酔々

■第18回雀郎まつり川柳大会が左記要領で開催される。

時・9月19日(日)10時

所・宇都宮市、くろかみ荘

◉兼題

△第一部（出席者のみ、各題2句）

曲る　町井　葉月選

駅　水井　薬人選

ダブル　田代　好鳥選

事情　鶴具　虎魚選

柔らか　中野　茄子選

くよくよ　江森　成柳選

廊下　佐藤　延寿選

△第二部（誌上大会、投句歓迎、各題二句）

踏む　越郷　黙朗選

留守　宮本　紗光選

悟る　菅原　一宇選

とんぼ　西村　在我選

湯　臼倉　寿夫選

メートル　田中　白牧選

覗く　吉田　湯北選

高山植物　杉山　方夫選

身晶屑　森　紫苑荘選

ちらちら　三原句一路選

投句料・千円（発表誌呈）

締切・9月19日必着、用紙自由

投句先・〒320宇都宮市桜3—2—3　川俣　喜猿宛

主催　宇都宮雀郎会

後援　栃木県川柳協会

■細川聖夜句集「そして秋」発刊記念川柳大会

時・10月24日(日)11時開場

所・金沢市昭和町6—8　金沢シティホテル（金沢駅下車徒歩5分—六牧町交叉点近）

祝辞・片岡つとむ氏

森下　冬青氏

森　茂喜氏

記念講演「川柳のゆくえ」

岸本　吟一氏

句集鑑賞　安井　久子氏

中田たつお氏

宿題（当日各2句）

「ふるさと」奥　美瓜露選

「軋む」松岡　緑朗選

「闇」今井胡次郎選

「ペン」亀山　恭太選

「許す」松本城南子選

「いのち」森中恵美子選

「坂」曽根　幸広選

「母」西村　芳川選

特別課題

「秋」　礒野いさむ選

会費・2、000円（句集、記念品、大会記念号呈）

懇親宴・4、000円（同会場で16時30分より、予約制）

事前投句（秋）・懇親宴・宿泊のお申し込みは10月10迄に

〒923-12石川県能美郡辰口町来丸　酒井路也方　番傘加越能川柳社

主催・番傘加越能川柳社

■名古屋川柳社では、秋の川柳大会を左記要領で開催

時・9月19日　午前10時

所・葵会館（名古屋市西区那古野町2丁目18—23　那古野小学校東）

兼題

靴べら　氏田騒太郎選

目玉　森　淞鳳選

どこかで　会田規世児選

五百円玉　保地　桂水選

オルゴール　浅野　滋子選

正論　鈴木　如仙選

絆　加藤　翠谷選

人間味　名波　勝選

肩すかし　市川　鱗魚選

あやふや　丹羽　麦舟選

片手落ち　中江　一魚選

各題二句

会費・千円（呈粗食、参加賞）

投句・五百円（発表誌呈す

9月10日迄に左記宛お送り下さい）

〒451名古屋市西区縁場町一ノ二六　中江一魚

主催　名古屋川柳社

後援　愛知川柳作家協会

■第34回西日本川柳大会

岡山県芸術祭参加並びに丸山弓削平氏名誉町民祝賀

時・9月5日(日)8・30開場

所・久米南町中央公民館（津山線弓削駅徒歩5分）

兼題と選者

下駄　斉藤　正一選

味方　高杉鬼遊　選

放す　平山　繁夫選

素足　水粉　千翁選

眉　八木　千代選

続く　横部　牛歩選

席題二題　小林夢介外一名

会費・出席一、五〇〇円

残暑御見舞申し上げます

東大阪川柳同好会

桑原　喜風　竹中　綾珠

斉藤三十四　中宮　良教

片岡　湖風　江口　度

那須鎮彦　外一同

呈昼食

投句・千円共に発表誌呈

賞・総合成績知事賞外12賞

主催　弓削川柳社

■合同句集「あたごやま」が上梓された。藤村〆女、林はつ絵さんその他の方々が参加されている。発行所愛宕山川柳同好会（西宮市愛宕山19－9梶川佳丹子）

■川柳句集「花筏」山下登舟著が発刊された。登舟氏は高知川柳社柳誌「川柳高知」へ主として出句されて居られる。樫谷桂緑、西尾栞、橘高薫風諸氏の協力による由あとがきに述べられている。長旅を終えて我が家の徴くさき／早乙女も見えて詩になる千枚田

▽同人・柳友消息△

▼国弘半休門氏（下関市）旅行業に永年従事されたがこのほど第一線を退かれた。ご健康で第二の人生をお楽しみいただくことをお祈りする。

▼尼緑之助氏（島根県）より、宍道町にて「いずも」例会開催。43名の出席で盛会であった由。

▼直江武骨氏（小樽市）が6月30日逝去。北海道川柳連盟会長として活躍なさった方である。

▼全国鉄川柳人連盟第26回奈良大会より寄書拝受。

▽句会案内△

■菜の花句会

時・9月10日（金）夕6時

場所・西郷会館（八尾神社境内）近鉄八尾駅下車

兼題＝貯金、踊る、鍵、コント、大阪風景。

■南海川柳部

時・9月16日（木）夕6時

場所・南海会館ビル本社地下食堂

兼題＝砥石、応援、遊ぶ。

■南大阪川柳会

時・9月19日（日）夕6時

場所・高松会館（寺田町裏駅下車）

兼題＝パレード、ピリオド、プリン、ページ。

■東大阪川柳同好会

時・9月25日（土）夕6時

場所・東大阪中央公民館、近鉄永和駅前

兼題＝敬老、道、マスコット、怪物。

■駒つなぎ川柳会

時・9月27日（月）夕6時

場所・寺田町高松会館

兼題＝涼風、ファイト、おべんちゃら、見送り。

■堺川柳会

時・9月21日（火）夕6時

場所・堺青少年センター

兼題＝即決、囲む、顔色、祈り。

川柳しんぐう吟社創立10周年記念和歌山県下合同川柳大会

とき　**昭和57年9月19日(日)午後一時**

ところ　**白浜町古賀浦・白百合荘**

（白浜駅～古賀浦行バス5分歩いて6分）

挨拶　大矢十郎

祝辞　黒川紫香

柳話　西田柳宏子

兼題　「海岸」　野村太茂津選

「流れる」　香川酔々選

「駈落ち」　岩本雀踊子選

「手強い」　児島与呂志選

「書く」　神谷凡九郎選

「潮風」　西尾栞選

「真ん中」　大矢十郎選

席題　ナシ　投句拝辞

会費　句会出句者のみ　二、〇〇〇円

前夜祭　参加者宿泊二食付宴会費共　六、〇〇〇円

賞　知事賞・新宮市長賞・新宮市議会議長賞・天地人賞・選者賞など多数

新宮市熊野地一丁目六－一二

川柳しんぐう吟社

記念句会実行委員会

〈堺川柳会〉

『夜市川柳』募集

堺川柳会では、今回『夜市川柳』を企画しました。今後この企画を〝大魚夜市〟同様、堺川柳会の名物として育てあげるべく努力して参る所存ですので大方のご替同とご支援をお願い申し上げます。

規　約

一、川柳堺の例会（毎月第三火曜日）を来年より七月に限り三十一日にし「夜市句会」として開催する。

一、川柳堺誌上にて例会の題以外に毎月夜市に因んだ題を一つ出題し毎月選者が交代してこの題の選句に当る。

一、入選句は毎回四〇句に限定し川柳堺の翌月号で発表する。また、毎月の得点を加算して（初年度は十一ヵ月）年間のベストテンを競う。

一、出句は一枚の句箋に一句ずつ無記名で三句とする。投句料は無料とする。締切は毎月15日消印あるもの。直接手渡される場合は堺川柳会の例会の日（毎月第三火曜）まで可。

（受取人は天笑または一二三氏）

一、得点　前抜三十二句　各一点

佳作　五句　各一・五点

人の句　二点

地の句　三点

天の句　四点

選者軸吟　一・五点

一、毎年七月三十一日の夜市句会にはベストテンの表賞をし、その内より七名が当日の選者となる。

一、投句先

〒593　堺市堀上緑町二丁九―二

河内天笑方　堺川柳会

〈初年度の題と選者〉

「花火」	谷垣　史好選	8／15〆切
「砂」	高杉　鬼遊選	9／15〃
「喧嘩」	西田柳宏子選	10／15〃
「汗」	児島与呂志選	11／15〃
「酔う」	香川　酔々選	12月15〃
「般若」	中尾　藻介選	1／15〃
「手」	阿部　柳太選	2／15〃
「踊り」	森中恵美子選	3／15〃
「声」	野村太茂津選	4／15〃
「徹夜」	橘高　薫風選	5／15〃
「主役」	西尾　栞選	6／15〃

堺まつり協賛

第36回堺市民川柳大会

とき　昭和57年10月17日(日)11時～5時

ところ　大阪府立堺労働セツルメント

挨拶　堺文化団体連絡協議会会長　高木幸太郎

柳話　西田柳宏子

司会　河内天笑

兼題　「売る」　野村太茂津選

「峠」　亀山　恭太選

「眼鏡」　中尾　藻介選

「滝」　岩井　三窓選

「辞書」　橘高　薫風選

「青年」

席題　当日一題発表

締切　一時三十分・各題二句

（出句は出席者に限る）

会費　一、〇〇〇円（作品集・記念品呈）

賞　各題に秀句賞

主催　堺番傘川柳会・堺川柳会

後援　堺文化国体連絡協議会

堺文化観光協会

連絡先　〒593　堺市堀上緑町二丁九―二

河内天笑方　堺川柳会

電話〇七二二―七八―四七〇六

本社八月句会

会場　なにわ会館
七日㈯　午後六時

夏の高校野球の始まった日、雷鳴とどろく夕立の中を、ずぶ濡れになって来る柳人もあり、初参会者の森田カズエ・紀市郁栄両氏をまじえ和やかな句会になった。黒川紫香氏のおはなしは、阪急電鉄にお勤めだった関係から、高校野球と阪神電車から始まった。「一人乗っても半身（阪神）電車、一日乗っても半休（阪急）電車」の洒落や、「阪神タイガースと朝汐関」の強いのか弱いのか分らぬ意外性に富んだ性格に触れ、阪神電車と阪急電車の個性の違いに言及され「川柳にも個性を」の話の核心に導入されて行く。路郎先生の選は作者の個性を伸ばす、血の通うたものであって、それ故、門下に個性豊かな作者がひしめいたことを強調される。お話は、電車からホテルの経営に変る。それは阪急電車へ勤務のあと新阪急ホテルに移られたので、その創立時代の裏方としての苦心談になる。

人の和の大切さを従業員に認識させる仕事をしていた関係で最後には女子従業員の寮長となり、面白い話、困った話で会場を笑いの渦に巻き込まれた。

兼題選者の岩本雀踊子氏は雷のため来会不能となり笠原吸江氏の代選となる。八月の月間賞は西出楓楽さんの獲得するところとなり午後八時四十五分散会した。（K）

（受付—与呂志・重人）
（進行—柳宏子、記録—鎮彦・敏）

出席—静歩・与呂志・敏・健司・柳宏子・勝美・太茂津・幸・英子・郁栄・岳人・潮花・雅風・登志代・滋雀・楓楽・千代三・景子・形水・三十四・冬葉・美智子・度・紫香・泰子・カズエ・儀一・水客・白水・みつ子・寿美・喜風・薫風・甘平・鎮彦・重人・綾珠・文秋・寿馬・鬼遊・白兎・武太・美緒・栞・春蘭・吸江・凡九郎・喜一・はつ絵・春江・萬的・涼一・柳伸・酔々・湖風・射月芳・智子・弘生・頂留子・規不風・寿界・天笑・月子・悦郎・寿子・和子・弥生。

（七月句会出席者名に楓楽さんが抜けていました）

席題「愚痴」　西出楓楽選

愚痴聞いて貰える膝を知っている　潮花
愚痴ひとつさらりと風の中に捨て　寿子
星空に愚痴はこぼせぬ迷い道　柳伸
パレットに多彩な愚痴を溶いてゆく　寿子
日めくりにその日の愚痴を詰めておく　美智子
愚痴っぽく惚気話を聞かされる　泰子
明日のある男で愚痴をこぼさない　湖風
愚痴こぼしていると茶柱知らなんだ　重人
愚痴重ねたちまち冷たい風に逢う　みつ子
下積みの愚痴を丸めてやる身銭　滋雀
愚痴ばかり言うが啖呵はよう切らぬ　千代三
愚痴こぼす相手がいない才女です　湖風
遠花火愚痴は言わないことにする　美智子
寺参り信玄袋に愚痴を詰め　鬼遊
愚痴を言う己の事は棚にあげ　射月芳
針山にグサリとさした愚痴一つ　鎮彦
女二人生活の愚痴の影法師　滋雀
藻の中で金魚の愚痴が泡になる　紫香
愚痴こぼしながらよく飲みよく食べる　幸
負け犬の愚痴は盃よりこぼれおち　寿美
仏前に一人暮しの老いの愚痴　白水
愚痴はもうよそう明るい虹が立つ　重人
愚痴一つ言わない父のいかり肩　射月芳
底の無い袋に愚痴を溜めている　幸
金のこと愚痴ると世間が狭くなる　郁栄
里がえり愚痴はすっかり空になる　規不風
水中花きれいな愚痴を抱いている　美智子
酌ぐ方に回って愚痴を聞きあきる　カズエ
胃の痛み愚痴も少しは吐き出そう　みつ子
飲めば又愚痴が出そうな盃を伏せ　柳宏子
さみだれの愚痴へだんだん背が曲がる　度
愚痴秘めて女静かな台所　与呂志
愚痴聞いてあげたら機嫌よく帰り　綾珠

退院の患者は愚痴もおいてゆき　弘生
愚痴っぽいおとこ正論見失い　寿子
鏡拭く愚痴は決してこぼさない　酔々
貪欲な愚痴マニキュアがはげてくる　英子
愚痴っぽい女へ雨の旅つづく　萬的
ふる里のみどりに愚痴を盗まれる　滋雀
作業衣のポケット愚痴は入れてない　酔々
千手観音愚痴はどの手に預けよう　太茂津
みぞおちのあたりで愚痴がひっかかる　楓楽

席題「去る」　片岡湖風選

惜しまれて去る潮時がむつかしい　文秋
去ってのち余韻の温いお人柄　楓楽
愛一字伝言板に残し去る　景子
別れてもくれず去ってもくれぬ妻　千代三
無人駅降りて東へ去るピエロ　岳人
裁判所からの決定置いて嫁が去る　規不風
過去の傷視野を横切る影一つ　寿美
孫が去にふたりのリズムに戻る朝　春江
唐草の風呂敷背負い詩人去る　酔々
ステーキを一切れ残し去る淑女　寿馬
去ると決めわたしは夏のシャボン玉　寿子
職を去る広い視野から振り返る　太茂津
去るものを追うと悲劇になってくる　幸
去る人をトランペットの音が追う　潮花
夜叉面の女がひとり一人去る　白兎
職を去る男の背なは枯れている　涼一
ヒロシマを去ると竹とんぼが回る　寿界
別れよう男の古傷などふれず　与呂志
一難が去って夫婦が信じ合い　登志代
ジャスミン茶愛去りし日の部屋に満つ　和子
災害地去来の雲に浮き沈み　勝美
美代ちゃんが村去って行く秋祭り　柳伸
過ぎ去った日々温めている自伝　武太
ふり向けば他人の顔で見送られ　柳伸
夏が去るはざまで蟬が死んでいる　潮花
やがて去る日の台詞など考える　幸
とり巻きの後姿は見送らぬ　水客
老残のいつか去る日へ石を積む　滋雀
去りし日の炎を詰めた玉手箱　泰子
ほおずきに話そう夏が去らぬ間に　美智子
ライバルが去るとぽっかり穴があく　射月芳
去る者の一人となって虚無で居る　弘生
去る人を追えば枯野へ迷い込む　楓楽
去る人の影が哀しいほど伸びる　美智子
惜しまれて去る足跡は汚すまい　滋雀
平凡な暮しに去り状などはない　三十四
島を去る男海鳴り溜めている　水客
去りぎわにだけ喝采があればよい　楓楽
旅役者去ると吹雪がきつくなる　千代三
哀しみを一つ残して街を去る　湖風

兼題「直感」　神谷凡九郎選

幼児の直感仮面脱がされる　三男
良心の直感退路をあけておく　緑良
直感でこの借金は諦める　幸一
三歳の直感にどきっとさせられる　刀水
直感の男は椅子に掛けている　悦郎
直感は居溜守を使うカタツムリ　鎮彦
直感をみごとはずした夜のジョッキ　潮花
直感を信じて男立ち上がる　水客
直感で阿蘇の火口に近ずかぬ　酔々
今日のパズルへ今日も直感ずれている　幸
インスピレーション胸に重たい鍵を抱く　寿子
直感もヒントもなくて平凡に　静歩
嫉妬心からの直感笑えない　幸
直感にじってしとれぬ地獄耳　悦郎
世帯盛りで直感冴えている　天笑
すばらしい直感がある葱坊主　寿界
直感ですぐ走り出す麦わら帽　健司
直感で点線を画く蟻の道　寿馬
直感を軽いジョークに消して置く　規不風
ただ仲でない直感の影になり　滋雀
悪人の直感だから惜しまれる　勝美
ある直感鵯鳴くので旅に出る　岳人
騙し易い女とわかる歩き方　鬼遊
直感と直感ぶつかる一呼吸　鎮彦
八卦の直感女を斬っている　冬葉
手鏡の裏で直感まろく抱き　寿子
直感で応接室に案内する　武太
直感の危機を夜道にまだ女　滋雀
直感へ重く冷たく鳴る電話　幸
お多福の笑顔直感には触れず　水客
直感で投げれば賽は気まぐれで　楓楽
離婚歴もって直感よく当る　弥生
海に生き明日を直感する夕陽　与呂志
方舟に乗る直感がひらめかぬ　湖風

直感へアンテナの位置高くする　楓　楽
直感で動く錯誤を笑えるか　太茂津
直感のカルテへ重いペン握る　カズエ
病人の直感理由などはない　柳　伸
直感ではないが妻の顔を見る　白　兎
一秒先の自分を直感予知出来ぬ　凡九郎

兼題「待つ」　香川酔々選

待つことの好きな男の待ち呆け　枯　梢
賞与待つまでは笑顔の妻でいる　緑　良
待つ傘の雫へ幾度目の時計　どんたく
待たされて女負けたなと思い　曲ん手
一張羅見せそこのうた待ちぼうけ　静　馬
待ちに待った叙勲今日は日本晴れ　善　紫
パートから帰った母へとんで出る　はつ絵
信号を待つ間も恋のワンカット　天　笑
待たされて何のたたりかと思い　栞
ポックリ寺お迎え待っている喋り　萬　的
流しそうめん夏の会話を待っている　度
待つ事になれ午前様を苦にしない　頂留子
待つ事に馴れて老妻寝てしまい　与呂志
風鈴は優しい言葉待っている　水　客
待つ事に馴れて妻の座板につき　登志代
作戦もちょっぴり立てて待つ見合い　柳　伸
納得をするのを黙って待っている　水　客
年金の下りる日を待つ旅鞄　鬼　遊
妻が待っているというのにときめかぬ　智　子
待ち遠し世界に核のなくなる日　みつ子
待つ人は来るおみくじ信じよう　甘　平
女人高野逢うてはならぬ人を待つ　寿　子
せっかちが待てずぶつかる自動ドアー　美　緒
待ちました待たせましなと仲のよい　白　水
信号待ちにさえポーズするハイヒール　萬　的
衣ずれの音を待ってる青畳　千代三
待っているわけでもないのに誕生日　泰　子
どの位い待ったかたばこ数えてる　鎮　彦
易の灯が迷う羊を待っている　鬼　遊
もう二度と来るかと思う程待たせ　柳宏子
待っているかたちで郵便受がある　智　子
月下美人に夜の匂いを待たされる　太茂津
鍵っ子の鍵が待ってる親の愛　甘　平
待つ人がいない渇いた鍵の音　重　人
腹の立つ頃に笑顔でやってくる　柳　伸
家中の灯りをつけて母を待ち　郁　栄
快方を待つ絵馬繋せることなかれ　重　人
姉弟で母を待ってる雨の駅　紫　香
岸壁の母はそれでも待っている　敏
待つことに馴れた夕餉の白ふきん　英　子
雪解けを待ってる父ちゃん待っている　楓　楽
手毬唄三年三月待つ女　酔　々

兼題「実行」　笠原吸江選

実行力ないのがいちばんよく喋り　静　馬
掲額の不言実行に遠くいる　軒太楼
実行をしてから男らしくなり　刀　水
実行の出来ぬ数字で追うノルマ　幸　一
禁煙宣言実行を信じない　どんたく
実行はしないが検討いたします　武　太

第16回東大阪市文化祭参加
第10回 市民川柳大会

日時　昭和57年10月10日（祭日）
正午開場・締切一時半
会場　東大阪市立中央公民館二階
視聴覚教室
近鉄永和駅すぐ南市民会館内
講演　時事吟に見る今日の世相
よみうり柳壇選者　広瀬　反省氏
兼題　岸　伊佐次無成選
紙人形　板尾　岳人選
雨　岩本雀踊子選
青春　奥田　白虎選
許す　久保田寿界選
打つ　田頭　良子選
笛　永田　帆船選
席題　一題　当日発表（江口度選）
兼、席題共各二句以内、出句は出席者に限る
賞　各題優秀句に市長賞他楯
会費　一、〇〇〇円（大会句報誌呈）
懇親会　会費二、〇〇〇円
主催　東大阪市文化連盟
東大阪市川柳同好会
後援　東　大　阪　市
東大阪市教育委員会

実行をせぬ公約へダルマの目　英子
実行へ金が先だつ青写真　儀一
実行と胸のドラマにある隙間　みつ子
お手の鳴る方へ実行足が向く　潮花
実行も出来ない人が前に居る　刀水
約束の実行期日が書いてない　弘生
実行は言うてることと又違い　与呂志
実行もせず御託をよく並べ　善紫
実行はリンゴが落ちて老える　岳人
実行予算これで儲かるはずがない　健司
実行力抜群でいて孤独なり　春江
実行のその踏み台に妻の顔　カズエ
人の首絞めて自分が殺せない　弘生
実行はせず金がない暇がない　射月芳
実行へ情け無用の棒グラフ　寿馬
実行が崩れてからの失語症　寿子
満腹になると実行ど忘れる　カズエ
高下駄をいつも履いてる実行派　酔々
よっしゃよっしゃ金で動かす実行力　和子
毛はえ薬すぐ実行をすると決め　涼一
銀行へ来て良心に突き当り　滋雀
核ボタンいつか誰かが押すだろう　楓楽
実行へ前夜祭から崩れ出す　寿馬
口下手な男がなんでもやってくれ　美智子
不言実行壁に飾ってある徒食　滋雀
実行力富んで無口の頼もしさ　寿美
考えるよりも実行する若さ　楓楽
実行をせずに失敗考える　柳伸
実行力買われて鈴をつけに行く　和子
きっぱりと別れる絃を高くする　郁栄
実行をせぬから翔べぬ竹とんぼ　酔々
実行をしたので鬼の名で呼ばれ　はつ絵
実行は貧乏ゆすりして決める　岳人
実行をいやがる指だってある　吸江

兼題「定義」　正本水客選

敏軒太楼

広辞林ひいて定義を確かめる　三男
篤農の一家に定義などいらぬ　緑良
労働の定義で汗を忘れてる　潮花
悪人の定義へ善人押し込まれ　滋雀
男の定義へ女いきりたつ　太茂津
定義から外れると喜劇にもならぬ　滋雀
古い男で女の定義決めている　凡九郎
男と女定義次々創り出す　滋雀
青春の定義は悩みの底にある　紫香
定義から外れ秘密の輪をつくる　寿子
三角形の定義に落し穴がある　柳宏子
定義など知らず達者な銭儲け　綾珠
人生に定義があればやりよかろ　柳伸
盲目の愛は定義に立ち向う　太茂津
新しい定義に人間縛られる　涼一
厳然と老い長らえて定義持つ　千代三
ジグザグに歩いて定義など持たぬ　与呂志
別れ際夫婦に定義などは無い　射月芳
廿歳前少年Aと定義する　郁栄
愛のきわみに定義をはさむ隙がない　太茂津
サイコロを振っても定義変わらない　静歩
人間の定義生きてはる食べてはる　泰子
定義付けされた子供の荷が重い　泰子
無理矢理に定義づけては痩せて居る　春江
一期一会ひとり生れてひとり死ぬ　寿美
聡明な夫婦で定義など持たぬ　寿馬
定義付け止めて世間が広くなり　泰子
リンゴの木リンゴが落ちて来た定義　岳人
青春の定義はみ出すためにある　楓楽
変化球定義などには関わらず　水客

★

〈訂正〉 8月号78頁「道標」作品中〝駅前の道標登山に嘘はなし〟は**喜風**氏の句でした。

第29回八尾市文化祭

市民川柳大会

とき **昭和57年10月17日(日)**正午開場
ところ 八尾市商工会議所3階大ホール
おはなし「暮しに生かす易」　山本　殷煌氏
兼題（狙う）（潮）（とんぼ）（猫）（こめ）（日曜）
席題 一題（各題2句）
締切一時三〇分
—詳細は次号で発表します—

■**原稿用紙を使用**。締切毎月末着便まで。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

（整理・香川酔々）

うみなり川柳会　小林由多香報

楽ばかりなかった峠やっと越し　希満子
楽しみの二合を奪った診断書　一止
五線譜に春の楽譜はよく踊り　日満
欲捨ててからの楽しい瞳が強い　熊生
大家族思わず靴の散らかしよう　笑王
痛む足撫でつつ舵とる車椅子　富美湖
生きてゆく義足ギシギシ鳴るあせり　葉士人
妻や子に聞かせたくない夜を痛む　静夫
捨てられた女の痛さわかるまい　芳泉
傷口を洗うお酒が過去に沁み　洋々
治まった痛みへ夜が白みかけ　由多香
古米食べまた新米を古米にし　正
盲目の愛が娘を古くする　吟月
編みかえた古着親子の温み抱く　とし江
古里は良し古巣にも椅子があり　天雀
雨雲にでんでん虫も歩を早め　華子
紫陽花へ一雨ほしい日がつづき　行子
雨空へてるてる坊主つきつける　舟宏
にわか雨一座の空気変えてくれ　盛桜

菜の花句会　高杉鬼遊報

髪洗うはかない恋は揺れている　蕉露
憧れた大人を嫌い出す少女　右近
コーラスにゆれてタンポポ風にのり　美乙女
ガレージに植込みなかば食いこまれ　勝美
条件がぴったり合ってケーキ切る　昭子
あきもせず中座で寛美の説教聞く　優
ボーナス期店員ずらりと日本橋　雅風
斜陽族庭をガレージにして稼ぎ　綾珠
おひな様かざると少女行儀良い　みつる
詩の好きな町の少女は病みやすし　射月芳
ねむの木がゆれて遠い母を呼ぶ　道子
うつむいたダリアはきっと恋をする　美幸
貝がらにひそむ少女のものおもい　頂留子
怒らない条件消化が悪くなる　悦郎
同居する条件だった嫁荷物　柳伸
いつも少女は天使になれる鼓笛隊　酔々
原爆忌にゆれる千羽にある祈り　雀踊子
条件を満すとピカソの絵にならず　糸葉
キナ臭い話にゆれる水中花　鬼遊
火葬場へ行くにも条件あるそうな　幸生
マドンナはいない河内の夏祭り　律子
条件が揃いくもは巣をかける　度
示談済むまでガレージで晒しとく　茂雄
大阪弁で丸く包んでとけている　凡九郎

勝山双葉川柳会　小出智子報

彼かばう傘の雫はいとわない　久子
ひと雫女の武器は残しとく　妙子
娘の青春をバラの雫で描きたい　好子
石うがつ雫に心ひらかれる　楓楽
叱る声もだんだん悲しくなってくる　千里

背で眠る遊び疲れた子が重い　智慧子
大声を出して不安を消している　洋子
遊んでる体へ役を持たされる　秋子
ラッシュ時は遠慮の影も見当らず　いく子
ひと雫心の角が折れました　頂留子
父の日は母の座少し遠慮する　千寿子
遊びから男が得るもの失くすもの　和子
長距離電話わが子の声にすがりつく　ふみ
大雨も雫となって晴れ上り　ハル子
かごめかごめ鬼が後へ忍び寄る　田鶴子
誘われて待ってましたと飛んでゆき　静子
アベックの肩の雫は気にならぬ　千世子
遊ぶ子をゆたかにさせる花の彩　静香
遠慮して出るきっかけを見失なう　藤子
いつまでも夫に遠慮して平和　芙佐女
姑の立場で遠慮することも　節子
遠慮なく長所は盗むことにして　智子

川柳高知　松岡三吉報

目が笑う心が笑う人に会い　康子
花と蝶強い絆で結ばれる　広風
水引きの御目録へかしこまり　白水
娘にかかる電話へ父が箸をおく　節子
子の便り来てもこいでも愚痴になり　竹萌
標準語つかう隣へとけきれず　冬木
ポケットのメモに秘密のある若さ　千鳥
点滴のしずく確かに時は過ぐ　春枝
個性ある御顔美貌とは言わず　弘生
愛憎を編んでほぐして夫婦坂　菊野
失敗も一度位は御愛嬌　登舟
婚約へ首をかしげる興信所　草風
婚約へガッカリしたのも二三人　松風

婚約のもう親類の顔になり　つぎお
婚約の指にうれしい2カラット　三吉

駒つなぎ川柳会　里　**小路報**

小心がお化け屋敷のビラ破る　規不風
小心の鬼で金棒はなさない　弥生
小心な性で手固く貯めている　美乙女
赤坂の仲居障子をそっと開け　律子
なりわいにより天候も悲喜を持つ　千代三
降ってよし照ってなおよし鮎の艶　柳伸
天気晴朗六十歳の誕生日　恒明
梅雨宣言ホホーと笑うちぎれ雲　美緒
雨の日の白いベンチは人を恋う　泰子
瀬戸内の霧笛の中のおくれ旅　小路
カップルの歩幅に雲が下りてくる　美代
戦傷のうずきに明日は雨になる　雀踊子
天候は気にしていない紙コップ　健司
天候をなぜか気にする紙おしめ　岳人
傷跡が知らせてくれて傘を持ち　柳右子
天候へ自分に叶う橋をかけ　悦郎
雨の日は雨の音する計算器　花梢
曇りのち雨かなしみがつきまとう　恵美子
天候のせいで知恵の輪が解けぬ　酔々
午後からの雨を女として覚え　冬二

川柳ささやま　河原みのる報

曇る日の傘の話は雨の事　やよい
核の傘ささ恩まできせられる　越山
魅せられて無骨も傘に入る野点て　ゆきお
丸顔が心のトゲをカバーする　和人
丸顔をほめる言葉に蹴つまずき　みのる
丸顔へ嫁ぎ丸顔抱いて来る　とみ子
丸顔の記憶で出会うクラス会　美智子

極楽へ行く切符なら僕も買う　文平
古稀すぎて切符のいらぬ汽車に乗る　静子
人生の門出往復切符などいらぬ　貞子
手弁当うちの隣保は気が揃い　可住
手弁当そっと入れてるワンカップ　宗珠
手弁当色彩もよし仲間入り　くにの
手弁当妻の真心薄うなり　ひか平
南無観世落慶僧の傘に慈雨　法斉

川柳しんぐう　川上　渓水報

白蟻に一戦賭けて城守る　義廉
白蟻の不幸は火事で焼け出され　大輪
白蟻の私語がきこえて雨季になる　雀踊子
白蟻に見せてやりたい請求書　博代
地震雷白蟻も仲間入り　八千代
里詭り見合いの席でふとこぼれ　那智子
親同士意気投合をした見合い　道子
義理だけの見合いは母だけ付いてくる　与呂志
お見合いに飽いたのもある金魚鉢　白光子
見合いしてから面白い人にされ　冬花
生活費妻の鋏の冴えを見る　利凡
亡母さんの躾が染みる生活費　豊太
生活費運んだラッシュを視てる老い　あつむ
生活費まだ取りに来ぬ子を案じ　登紀夫
出稼ぎの父へ何より子の便り　三男
父立てる母を見習う子に育ち　澄孝
家計簿の都合で父の日忘れられ　勇太
叱られて父との距離が近うなり　十郎
父親が居るそれだけの安堵感　富子

尼崎いくしま川柳会　黒川　紫香報

人形の顔にしっとなどわかぬ　ハツエ

大声で宇宙の過去を呼んで見る　すえ
人はみな短編になる過去を持つ　中石
鍵渡し部屋の案内もないホテル　保蔵
優勝のかぶとが部屋でいばってる　かね子
民謡がきこえる部屋で土産選る　晴子
夫婦して散らかす部屋が一つある　年代
歳ですね軽く言われて不満もつ　玉子
手鏡の中に重なる母の顔　晃美
眼を病みて鑑真和上を友と呼ぶ　美代子
沈丁花咲いていますね白い杖　かすみ
しまい湯にひたり平和をかみしめる　美紀子
反核デー鶴を折ってる昼休み　伊三郎
あの辺に石があればというお庭　春子
広すぎる庭に寓話が生きている　かず子
縁日がはてて風船のシルエット　浩
カラフルに風船騒ぎ店開き　静江
校庭で遠い昔の風と会う　美智子
風船が飛んでパレード動き出す　郁栄
まとめ役あって家族の和を保ち　千子
あっちみてこっちみるまに家が建ち　幸子
梅雨どきに梅雨らしくない日が続き　貞子
ふところの辞表が汗をかいている　紫香
親切にされて寂しいお年寄り　重樹
夫唱婦随たまにはたからくじも買い　牧郎

東大阪川柳同好会　斉藤三十四報

駈引きも上手商談纏めてき　三十四
小遣いをせびるかけひき母見抜き　喜風
かけひきと知らず思わぬ損をする　白屯
どちらもかけひき団交腹割らぬ　善紫
土壇場でばれるかけひきあわてさせ　喜一郎
かけひきは無いがチョッピリ負けとこか　儀一

脱サラの商いかけひきまだ足らず　滋啓
先ずほめて値引きをさせる主婦の腕　千代子
そろばんの玉がかけひき勝負する　慶三
人質があればかけひき楽なもの　不二夫
かけひきもおぼえネオンの海に生く　美子
かけひきの才覚無くて煙草売り　光水
かけひきのし過ぎ真実見失う　度
駈引きが自然に身につく船場街
セールスのかけひき何からほめようか　孤舟
身勝手へ母性本能くすぐられ　律子
身勝手と思う心のいんぎんさ　春蘭
身勝手は仲間はずれに星一つ　古都路
身勝手な国の主張で民は泣く　松山
生活に追われ身勝手とも言われ　柳宏子
繁華街抜けると足が早くなる　文秋

川柳わかやま　堀端　三男報

生きるため噂なんかは聞き流す　登志代
男の胸そこは女の泣くところ　正博
浴衣着た夜店に夏の詩を拾う　翠雨
金賞を嗤う奇抜な字がわらう　英子
案外と噂は近くで燃えている　豊太
六十の発心奇抜な服を買う　紀美女
空中から新郎新婦おりてくる　武太
死んでまで酒どっくりの墓で生き　太茂津
線香花火夜店の余韻また燃やす　緑良
風鈴の音色へ郷愁買う夜店　裕美
やりくりへ愛が奇抜な知恵を生む　武雄
歌よりも奇抜な衣裳で売れている　民代
奇抜だと本人トンと思ていず　凡九郎
夜店の服は夜着る色である　千寿子
夜店から足をのばした恋ひとつ　公子
雪山を降りる男の重い枷　あつむ
骨のある男に育てん寡婦の鞭　勇太
お茶漬が好きな男に娘はやれぬ　和子
海のむこうへいつも漕ぎつづける男　幸
立小便天下取った気の男　天彦
唯一人選ぶ男だから迷い　光代
世渡りの下手な男に賭けて見る　三男
三姉妹　姉は男の風を持ち　善太
腑甲斐ない男にしてる賢夫人　凡太
世わたりがへたで死角のない男　稚代
男見る目が肥えてきて結ばれず　信子
赤紙に泣いた男の半世記　白光子
立ちばなしどうやら私のことらしい　きみ
煙りが風の噂に煽られる　克子

わかあゆ川柳会　小砂　白汀報

ロボットがとんだところで喋りだし　恒星
ロボットに稼がせ週休二日制　輝水
スカートは膝を基準に上下する　秀穂
ロボットの会長でまるく進行し　ヒデ子
年ごとに膝から弱る淋しさよ　ふみ
膝組んで上座へまわるのも役目　敏明
膝枕風化したのか腕まくら　民子
どっしりと重みを増した膝の孫　歳栄
ロボットで終った青春いとおしむ　鈴江
キューピットの矢となる一枚の手紙　志保
さわやかに語り縁談断られ　清夢
ロボットに仕立てて黒い影動く　清泉
想い出はほのぼの温し膝枕　美栄
目くばせに膝が反旗をひるがえす　はるみ
ロボットがいつかは唄う労働歌　白汀

京都塔の会　松川　杜的報

離職してからの三軒両隣　杜的
素うどんが好きで将棋の強い人　紫香
人生の隙間を和服着て気付く　和友
豆腐屋のラッパと話す京ことば　桐下
遠吠えも寒さが抜けたおぼろ月　求芽
口当りついつい過ごす大ジョッキ　忠雄
親友の声はきびしい口当り　弘三
口当りよくて病の身を忘れ　笛珠
カロリーは知らず賞めてる口当り　紅陽
口当りしかと覚えて乳房吸う　芳子
のびのびと障子の白さ見ていたり　水客
口当り考え言葉をさがす姑　明代
日当りが何よりだった家を建て　飛鳥
逞しい母の気力を真似てくる　白李

佳句地10選（前月号から）

小林由多香選

母に似た婦警に何もかも話す　恵美子
母さんのスリッパばかりくたびれる　楓楽
点数を追えば笑いが消えてゆく　久子
帰りしな姑がひと言置いていく　婦美子
連休もボーナスもある職探す　弘生
タイミング合ってきれいに席ゆずる　有一
鼻声の電話へ風邪がうつりそう　岳詩
焦燥を見抜かれていた鼻の汗　雄々
嫁の目をかすめてパンの耳落す　ふみ
良心に従い派手な喧嘩する　太茂津

福祉にはたよらぬ母が逞しい　潮　花
日雇に馴れ逞しい寡婦の汗　白渓子
無理やりに飲ませた酒にからまれる　潮　花

川柳塔まつえ　恒松　叮紅報

スタミナのうなぎ亭主の細い足　寿美子
二階借り下はうなぎを焼く匂い　登美也
土用うなぎとんと厄日を忘れてた　巡　歩
うなぎが嫌いな家族で救われる　鶴　丸
ナイターの死角でスリの目が走る　孤呂二
いいとこでプッとナイター時間切れ　逓　児
泥舟と知らず他人と乗り合わせ　与根一
他人にはない掌を妻がもっている　早　苗
争えぬ血筋他人の目にも付き　みのる
遺産分け他人がいらぬ口を出し　由　郎
他人には腹のキズなど話さない　三　和
いさかいに他人をふっと見せた妻　ちかし
水涸れてダムの醜い尾骶骨　紫　吻
都市砂漠情けの水に飢えている　孝
一億の水揚げ浜は夜を忘れ　芳　枝
水をえた魚にも似た職につき　四　希
地図で見る日本の周囲青い水　春　楷
一滴の水からドラマ動きだし　正　朗
水がめの底に姑の一代記　芳　子
札束を数え他人の顔となり　昭　二
いのししと言った時代がなつかしい　愚　童
黒い金にされる紙幣のふしあわせ　舞　吉
両替機紙幣の皺にそっぽ向き　鳳　人
折目ない紙幣を包む目出度い日　多賀子
たたまれて放浪癖をもつ紙幣　叮　紅

川柳翠洋会　山根いつを報

岸壁の母へ青い目連れ帰り　いつを
来客のあるのも知らず梯子酒　仙吉郎
海岸で子が探し出す桜貝　あき子
強がりを言うほど弱さ見えてくる　みつ子
泳ぐ子へ帰れと母は岸に立ち　兼治郎
今日も客空出張に空会議　綾　子
釣銭が多いと言ってくるお客　風　童
海ほおずき鳴らせば潮が満ちてくる　景　子
ゆっくりとおやじの海で舟を漕ぐ　酔　々
流木は岸見え出してから焦る　薫　風

山長川柳会　那須　鎮彦報

ヒラマサを釣った夢見る潮の岬　伍　一
燈台の白さ気になる潮の岬　幸太郎
潮の岬きらきら光る夜光虫　真由美
大物をせめて一匹潮の岬　忠
乾坤に潮の岬は融けてあり　嘉　道
気持はや潮の岬に飛んでゆき　俊　司
矢表に立っているのか潮の岬　重　信
釣り天狗潮の岬で昼寝する　轍　彦
暑い日にぜんぜん釣れん魚釣り　やよい
胸を打つ潮の岬の波の音　恵　子
漁り火がぼんやり写る潮の岬　朝　夫
潮の岬大きな尻で思案する　守
潮の岬今日もビキニの花が咲く　和　子
潮の岬に着きましたよとガイドさん　昇
朝ぼらけ潮の岬へ新妻と立つ　司
親子蟹潮の岬の岩にねる　一　美
おだやかな平和のうねりいつまでも　安　弘
潮の岬男は全身夏になる　鎮　彦

川柳大阪　西岡　洛酔報

靴をはく顔は男になっている　希久志
かたつむりキャンピングカーで一人旅　司

中島生々庵主幹より
句碑建立の記念として

金　一　封

ご寄贈いただきました

川　柳　塔　社

人の世の出逢い別れもさまざまに　酔　花
虹追うて来たのに虹は峰向う　比呂志
熟年といつの間にやらおだてられ　君　枝
青春のミイラを抱いて一人住む　六龍子
日本に腹芸という社交術　敏
結局は葬式代になる保険　笑　風
沈黙を破れば恐い反主流　喜　酔
朝焼けの不吉が今日をつきまとう　洛　酔
おおらかになれと鏡に叱られる　重　人
生花が届き男の部屋も生き　秀　峰
午前〇時無職になった夜のしじま　本蔭棒
過疎に住む母に孝行の手が遠い　鉄　心
東大は親孝行を教えない　みつる
独身寮タオル一枚干してある　道　子
寮監の叱言親爺と同じ顔　二天坊
蛸焼きが好きな女房でよく笑い　九　平

蛸焼きに偲ぶ昔の祭りの灯　九　平

堺川柳会　**河内　天笑報**

キー変えても姑は遠のくばかりなり　天　笑
シャンソンを聴くひとりだけ距離をおく　月　子
大阪の夜景で終る空の旅　たつお
思い出の人皆遠く落葉焚く　紀美女
八十年徽もつかずに生きている　東　雲
糸切れた凧になりたい昨日今日　凡九郎
水替えて金魚きれいな色になり　山　久
田舎道眺められてる厚化粧　てるよ
山男水のうまさを知っている　育　園
ブティックとなって気安さ遠くなる　富　子
程遠い話を隅の方で聞く　射月芳
凧揚げた河原で告げる胸のうち　柳　伸
凧合戦ひと役買った観光地　甘　平
いつまでも枝を眺めている鋏　素　灯
目を病んで遠いみどりを今も見る　眉　水
遠い夢まだ抱いてます屋台店　宏　子
凧あげる親子が握る温い糸　千万子
風のない凧に似ている老いの愚痴　ミツエ
八月のハガキは遠い旅に出る　元　紀
自画像の徽定年を話し合う　作二郎

川柳たけはら　**森井　菁居報**

プレゼントのメモしみじみと父の日よ　静　水
スケジュール六十路たのしく忙しく　房　子
すいすいと小学生に追い抜かれ　政　己
かぞくっていいごはんがおいしいよ　小一方　昭
ピーコーピーコなぜか気になるむなさわぎ　小三亜貴子
なまけぐせ長い長い日がくれる　小五仁　昭
どうみても解らぬ絵にも何かあり　中一希世子
酒飲みの父をやさしいから許す　中一　紀
持久走ほんとの私をためされる　高一愛
寝顔しみじみどの子も夫に似て平和　笑　子
点滴は母の祈りの如く落つ　蘭　幸
酒が言う愚痴をやさしく聞いてあげ　貞　子
かぎりなく青葉よつづけ夫婦坂　不　朽
数えてるうちは石段まだ登れ　一　路
出番待つ喜劇役者は笑わない　英　詩
筆持つとなくて七癖おどり出す　節　夫
そうめんをツルツルツルと安らぎぬ　菁　居
人の道書の道清く筆供養　鈍　舟
喜びも悲しみも父黒を着る　令　子
魚屋を夫婦でのぞいてつつがなし　比呂子
雑兵の祈りは無病息災を　秀　水

南大阪川柳会　**中川　滋雀報**

中味ある人だと思う飢ざわり　千代三
寝袋のネームが星と対話する　信　治
唇が少し動いてきた苦手　悦　郎
聖書読む糠喜びをせぬように　酔　々
のんきではないよ打つ手がないだけさ　文　秋
お見舞は十二単衣を着せたがり　柳　伸
贈った人のセンスが匂うている中味　智　子
作業衣のネームも胸を張っている　鎮　彦
エリートが苦手絹のハンカチーフ　白　兎
黙って坐ってはるだけなのに苦手　恒　明
読まんでも判る表紙で売っている　凡九郎
イニシャルが待ちくたびれた伝言板　滋　雀
結局は裸で死ぬよとのんき者　千　梢
いつとはなしに私に馴染むペンネーム　節　子
成る程とニックネームに合った顔　蘭
ポケットの小銭が唄うのんきぶし　度
もう一人の私をつくるペンネーム　洋　子
投資家が糠喜びに踊る株　喜　風
人間の中味を犬に疑われ　儀　一
糠喜びになろうと止めない好きな道　頂留子
ボーナスの中味業績うきしずみ　春　蘭
名を惜しむ男去りぎわ考える　公　一
人間の中味はながい目で見よう　雀踊子
食うて寝ること以外はみな苦手　善　紫
シャボン玉苦手なひとに誘われる　小雅子
つかの間の糠喜びか千鳥足　勝　美

川柳化粧櫓　**植村客遊子報**

養殖の甲虫とはさみしいね　紅　月
救急車着いても医者は慌てない　秋　月
妥協することにも馴れて宮仕え　岳　詩
吉報は家までまてず赤電話　実　男
音もなく目の前蝶の恋があり　葉　香
妻の旅目覚し二つおいて行き　大　鷹
童唄聞えるような山の門　奮　水
手柄山姫路の庭に姿替え　永　楽
川岸のドラマは星が投げかける　白　李
慰霊塔仰げば軍靴のこだまする　三　青
乾杯のグラスの底にしっとあり　遊　香
川岸の夜霧に消えた影二つ　多　津
湯の街のバーで昔の娘と出逢い　客遊子

西宮北口川柳会　**杉浦婦美子報**

気の弱い男の靴を光らせる　春　江
ハイビスカスぽとりと落ちて心病む　いわゑ
Tシャツを着るとゲージを出たくなる　幽　香
それぞれの机で夫婦趣味を持ち　光　子
今夜逢う人の名前をかきなぐり　冴　子
泣くだけは泣けと子供をしかる母　正　祐
子を背負う時は弱気な人でなし　弘　生

嫁姑のリードも出来ずいる弱気　千子
母と子に鱈子が焼ける水入らず　三笑子
水替えて澄んだ金魚の瞳と出会う　紫香
鐘乳の一滴ずつのもつ歴史　隆子
口下手がコップの水にむせている　はつ絵
睡蓮の白き炎が水に浮く　婦美子
水溜り素通りできぬランドセル　静馬
水よどむ背信の傷痛み出す　冬子
水くさい味に余生を賭けて見る　ち世
清流の水面に映る釣天狗　きよ子
せせらぎとなり瀬となって水の詩　右近
出世急ぐ策士が嵌る落し穴　千世子
サラリーマンドラマの中へ朝の靴　半歩
九ヵ月ペンギンに似た妻を連れ　みつ子
角壜に弱気の男溺れてる　伊升
スタートライン一歩遅れる気の弱さ　春子

米子きゃら木川柳会　石垣　花子報

成長へ産まれる不思議聞き出され　由美子
娘の胎動に触れてお産を思い出す　高代
苦しみの末に産まれた亡友の手記　みさと
合唱団生む苦しみにタクト泣く　弥生
鈴虫に一年かけた夢生まれ　千恵子
細き目の夫そっくり男児産み　つる子
産み終えて五体満足問うて寝る　伊都
産声にしあわせの波おしよせる　田鶴
陣痛に耐えて産声遠く聞く　美世
アイデアを生む触角を右ひだり　瑞枝
出産ですんなり同居の灯がともり　なみ
産み月へ姑こまごまと体験記　みどり
ひたすらに産んで海亀帰路を這う　千春
産卵の鮭の涙が川に満つ　日枝子
原子力産んだ人間おびえきり　花子
産む自由水子地蔵に風車　あい子
此の児だって耐えて産まれてくれました　千代
いま母となった娘の掌にぎりしめ　亜弥
産んだ子が育てられない檻の中　とも子

オーエスケー川柳会　大坂　形水報

腹の虫も一つのポケットに入れておき　幸坊
雨女ポツリポツリと愚痴を言う　雅洋
残業をするのはデートの時間待ち　雄峰
ポケットに手を入れながら意見聞く　晴男
母さんの機嫌をそっと耳うちし　千夢
ポケットを調べられてる朝帰り　登
疵痕を残して遠い人となり　亜也子
ポケットの中で検算してる指　有一
雨の日の紫陽花ささやきあっている　聖地
コーヒーの苦み残して立つ会議　亜成
紫陽花の花に雨露残る寺　一扇
自分だけのポケットいつも持っている　博泉
結局は追加分だけ売れ残る　形水
スタンドも選手も濡れている試合　入仙

ねやがわ川柳会　高田　博泉報泉

パンフレットめくると風が歌い出す　右近
コーランも聖書も戦火に役立たず　一菁
ひとり旅妻に済まない罪作る　千代三
四次元の視点で捉えている地球　亜成
国連の力不足を見る戦火　山久
パンフレット粗品進呈見のがさず　あいき
ミサイルは玩具でなかったマルビナス　光夫
飲むほどに妻の信号眼に入らず　亜鈍
パンフレットいつしか軽井沢に居る　英壬子
墨をする心のくもりを研ぐように　かすみ
もめている茶の間テレビだけ笑うてる　一途
パンフレットドンキホーテになり給え　一念
間を置けば口先だけの美しさ　琴音
拗ねた娘が足の爪まで赤くぬる　シマ子
拗ねた背をやさしく撫でる掌が欲しい　亜也子
年金が暮しの幅をきめてくれ　清香
正面にテレビ置いてる亭主の座　野生
死に方も教えてくれるテレビです　冬葉
パンフレットが手具脛引いて待つ出口　度
パンフレット集めて積木の家を積む　満津子
赤信号連よく抜けた千鳥足　淳朗
信号の下で貧乏ゆすりする　博泉
パンフレット極彩色で墓場まで　花世
パンフレットお城のような家が建ち　静歩
拗ねに来た窓はきれいな月明り　紫香
美しく拗ねそれからの物語り　英比古
視聴率悪貨は良貨を駆逐する　酔々
シグナルの赤に病気の母思う　覚然坊

岸和田川柳会　植山　武助報

真っ直ぐに生きて遊びを知らぬ父　ひで
遊びから悲劇へ続くスキャンダル　甘平
ちょっと遊びに行って来ますとヨーロッパ　武助
遊ぶには事欠かぬ子の夏休み　浪速子
遊ぶ事覚えて五月病癒える　射月芳
現代っ子一人で遊ぶ知恵が出ず　冨志子
若いころ遊んだらしい芸の幅　さよ子
主婦の座を忘れて遊ぶ旅の宿　こう
歩道天国今日はいきいき子等の顔　せつ子
上品に笑って語るお人柄　加代子
裁判の敗訴を笑う黒い影　希久志
遊び金つい魔がさした出来心　白光子

年の差か包み包んだ恋抱く　操子

にた川柳会　西村早苗報

酒と言う逃げ場があって堪えている　きみえ
イランイラクまだ戦争をやってたか　亀甲
好きだとの本音は酒に含ませる　多賀子
媚少しあるぬくもりの握手する　幸一
満ち足りた鼾に変る父の酒　登美也
風みどり心洗わる通り雨　孝華
うちの人規格品です平和です　独仙
充電が過ぎうとうとと日向ぼこ　夢酔
傷口へ蠅は卵を産みに来る　栄
何となく倖せ落ちる陽がきれい　〆女
つますけばその指先に花が触れ　正朗
合傘へ浮きたつ話もなく歩む　芳子
激情の谷間で反省する理性　花子
帯を解く空しさの中に居て独り　寿美子
素直さが親には少しもの足らぬ　裕
献血へ牛乳飲めばすむ若さ　雄々
相槌で逃げて居るのがよく解り　弘朗
宿浴衣ゆたかな隆起のぞかせる　早苗
夢少しテレビ体操からの朝　緑之助

城北川柳会　川口弘生報

すぐ負けるのは養殖のかぶと虫　右近
かけ違うボタンのままで来た夫婦　公一
屈みこみ子供の視野で見る景色　美恵
少しだけましなまる描く寺詣り　はつ絵
衛星も交えて今宵星祭り　倫子
新幹線岩手の姪に逢いとなる　ふみ
覚悟したとたんに歩幅広くなり　新一郎
急ぐ手にボタン一つがままならず　志保
星月夜窓で眺めるもらい風呂　忠夫
としよりに話しかけられ立ち去れず　道子
米余る国にも空梅雨案じられ　千世子
日の丸で覆う柩は見たくない　満津子
空梅雨へ蛙の恋もままならず　登志代
月見草あわい思いをつつみ咲く　すみれ
人生を真直ぐ歩いてミスばかり　悟郎
お手植のオリーブ一本毅然たり　静歩
年寄りに譲った席に子が座る　喜洸
入梅の子報むなしく水不足　炉斉
パックした野菜に土が匂わない　テルミ
物価高どこ吹く風のネオン街　弘
真実のように嘘つく時もある　達一郎
バイキング育ちが判る食べ残し　頼一
道しるべ地蔵は梅雨を逃げられず　そとえ
夏の夜に楽しみがあり夕涼み　秀村
勉強部屋窓の風鈴なぐさめる　午郎
いい夢の余韻で朝の窓を開け　婦美子
帰省の子待って窓から影探す　千子
ふる里の灯が遠ざかる汽車の窓　星斗
窓一つ小屋にも生きる光射す　松太朗
窓少し開けて言い訳考える　好恵
窓開けて眠たがる孫起こす日日　茂樹
窓際に咲いた紫陽花今日は冴え　左春
口づけへ胸のボタンも鼓動する　三十四
人間が押してはならぬ核ボタン　笑風
デザイナーボタン一つに気をつかい　静子
胸ボタンはずして本音覗かせる　圭介
オモチャ箱に拾ったボタンが一つある　弘生
服ボタン掛ける坊やに手を貸さず　正之
熟年でボタン外したまま歩く　三和

川柳後楽　井上柳五郎報

声かけて欲しい女が居る夜市　秋月
かき氷夜市明治の色となり　鮫虎狼
夜市の手放すものかと若夫婦　定平
孫に手を引かれ夜市をさまよえり　照路
黙黙と精進欠かさぬプロ根性　隆
一言居士角で黙黙呑む不気味　柳五郎
黙黙と今日も努力の石を積む　恒洋
雑兵はただ黙黙と歩くだけ　玉水
黙黙と妻だけ坂へ従いて来る　胡風
植え替え替えてやれば記念樹湖に沈む　草風
植え替えの出来ぬ言葉をつい洩らし　博友
内祝迷わずきめたバスタオル　元一
病人へ冷しタオルがもう渇き　久米雄
篤農のタオルは働く汗が好き　哲郎

堺川柳会　河内天笑報

ブライドと言う愚かさがつきまとう　月子
蔭口も知らず愚かな顕示欲　佐久良
持ち駒を後半戦に残しとく　東雲
二十世紀の後半核でゆれている　元紀
老いてなお心に花束失わず　紀美女
中年の恋は失うものばかり　柳伸
片腕を失い麻酔からさめる　千万子
重かった仮面を脱いで愚を悟る　笑痴
愚かさが覗きはじめた酒をつぐ　山九
石庭にこころしずめて愚を悟る　宏子
合掌をすれば失うものはない　素灯
愚かにも核のボタンに手をのばす　一二三
愚か者ですがと庇う親ごころ　夢遊
蟬しぐれいつかは母を見失う　智子
あり余る時間に金のない老後　鬼遊
愚かさがだんだん見えてくるグラス　天笑

本社九月句会

日時　九月七日（火）午後六時
会場　なにわ会館
天王寺区石ヶ辻町19―12
地下鉄谷町九丁目・近鉄上本町下車東南
電話　06・772・1441番

兼題
おはなし　香川酔々
「騒ぐ」　河内天笑選
「助手」　高杉鬼遊選
「求める」　西田柳宏子選
「本心」　黒川紫香選

席題　二題　当日発表　各題三句以内厳守
会費　五百円

★投句は柳箋に一葉一題、郵券200円同封のこと。

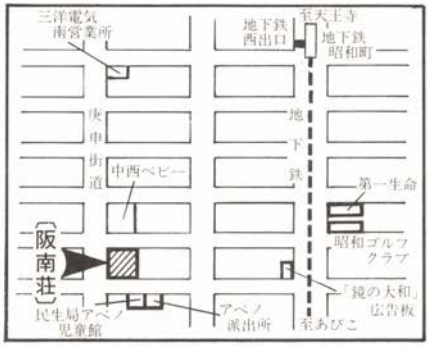
川柳塔社

11月の兼題　「人生」「渡る」「気がかり」「放す」

本社10月句会は3日（詳細表紙裏）

会場「阪南荘」案内図

地下鉄―昭和町下車歩3分
市バス―地下鉄昭和町停下車歩3分



●募　集●

十一月号発表（9月15日締切）

水煙抄（10句）川柳塔（10句）西尾栞選
黒川紫香選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「助言」　阿部柳太選
「手袋」　小林トメ子選
「メモ」　山本三郎選

★原稿募集＝四百字詰原稿用紙に四枚以内。楷書で新かなづかいにしてください。

十二月号発表（10月15日締切）

水煙抄（10句）川柳塔（10句）西尾栞選
黒川紫香選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「決断」　大塚豊生選
「くすり」　行天千代選
「大根」　飛田好一選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

9月の常任理事会は1日 5時から

定価　五百円（送料50円）
半年分　三千二百円（送料共）
一年分　六千三百円（送料共）
昭和五十七年八月二十五日印刷
昭和五十七年九月一日発行
編集兼発行人　中島蓬太郎
印刷所　藤原童心社
〒545
大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（06）622―六九一四番
振替口座大阪・三三三六八番

＝編集後記＝

☆九月号の編集たけなわの八月はまことに暑い。一日に台風までがフィーバーして接近して来た。各地に災害をもたらしたが被災地の各位にお見舞い申し上げる☆広島・長崎の原爆忌、敗戦忌などの行事も今年は例年より熱がこもった。前後して始まった高校野球もまたいやが上にもフィーバーした。

☆九月が来ると熱の人不二田一三夫さんが思われる。病気で倒れてもなお編集に執念を燃やされた姿のあれこれが、今なお昨日のように目の前にある。原稿一切を印刷所に送り込んだ日、校正を責了にした日、一三夫さんは、じゃんじゃん横町の天狗という店へ串かつを食べに出かけられた。今年は天狗の串かつで故人を偲びたいと思う。（薫）

☆長崎は雨でチンチン電車行く。これは、筆者の作品だが、こんどの豪雨禍はそんな生易しいものではなかった。とくに鳴滝地区は、多数の犠牲者を出した。鳴滝には、シーボルトの旧宅があり、彼の胸像がひっそり建っている。鳴滝川は、溝をすこし大きくしたような小川で、むかしは、おはぐろとんぼがなよなよ翔んでいた。

筆者が通った長崎中学も川畔にあった。その校舎もいまはなく、県立女子短大の校舎に建てかわっている。災害地は二百米ほど上流、新しく山を切り開いた左岸である。この屋根つづきに七面山があり、その奥に烽火山がある。当時は目白や鶯のいい音色を聞くことができた。シーボルトの旧宅がある右岸は人家もあった。先人の知恵は危険な左岸には住んでいなかったのである。雨降って地固まるどころか、雨降って地押し流すのである。（酔）

▼むかし遠州天龍川の河原で、子供たちが砂遊びをしていた。竹の切れはしで砂に大きな法師を描き、地蔵さまと呼び、拝んだり草花を供えたりして遊んでいたが、一天俄にかき曇り雷鳴と激しい夕立になった。増水で中洲に取り残された子供たちが流されそうになった時、法師が現われ子供たちを抱きかかえそれぞれの家へ送り届けた。親たちがお礼のために外へ出てみたが法師の姿を見かけなかった。これは静岡地方の民話である。神戸に住んでいた頃、近所の地蔵さんが盗まれ、世話役に頼まれて半紙に想像の地蔵さんを描いたことがある。地球上の核弾頭の数はすでに四万発以上である。核戦争から救ってもらっても廃墟になった地球に住む所がない。（き）

★久しぶりに8月号の発送を手伝いに行った。むし暑い日で、クーラーも扇風機もない事務所は、じっとしていても汗ばむくらい。

★発送も従来は五十冊一とくくりにして郵便局へ運べばよかったが、二、三カ月前から郵便番号別に細かく分けて出さねばならなくなった。余計な仕事がふえたわけだ。三種は料金が安いからというのが理由と聞いたが、高い安いに拘らず郵便物の仕分けは本来、局のやるべき業務であろう。

★臨調の基本答申が出されその中で国民に対して〝既得利益への期待の制限や負担と不便の増大といった行革の一時的苦痛〟に耐えるよう求めている。理屈はその通り。だが行革の大義名分をカクレミノに弱者いじめが一層進むのではないかそれが心配だ。（史）

肉体疲労時のVB1補給に——
アリナミンA
アリナミンA25の効能＝肉体疲労時・病中病後・妊娠授乳期のビタミンB1補給、神経痛・腰痛・筋肉痛・肩こりの緩和、脚気。☆説明書をよく読んで正しくお使いください。☆くわしくは医師、薬剤師、薬局、薬店にご相談ください。
タケダ
武田薬品工業株式会社　〒541 大阪市東区道修町2-27

何を選んでいたゞくかは先様におねがいしてタカシマヤの商品券をお贈りするのも　心にくい贈物かと存じます
一〇〇円から一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都3店に共通です
大阪・なんば
東京・日本橋
京都・四条
高島屋

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和五十七年八月二十五日 印刷
昭和五十七年九月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻六六四号 川柳塔 九月号
定価 五百円（送料五十円）

タッチでえらべば
やっぱりサコム

サンヨー電子式計算機
サコム
SACOM

見やすい設計 ICC-162型 280,000円
平面表示ゼロサプレス・√%キー付き
16ケタ2メモリー高級品
SANYO 三洋電機株式会社

この夏、おいしさひとりじめ……
アイスキャンデー
宇治金時・あずき・チョコ・ミルク・パイン

高島屋 そごう 松坂屋 阪神 ドージカ店
近鉄(アベノ・上六・奈良・東大阪・京都各店)
サン・ストア(中之島・淀屋橋各店)
京阪モール 新川売店 虹のまち店
泉北高島屋 南海難波駅構店
国鉄大阪駅店

アイスキャンデー SOFT

551 HORAI
大阪・なんば
蓬莱
TEL (641) 0551

雑誌 05703－9